

一般社団法人 全日本ピアノ指導者協会（ピティナ）
調査報告書 第3号

2016年9月

今こそ音楽を！

菅野恵理子

目 次

第1章 社会的観点から ～グローバル化する社会の中で、音楽ができることは

はじめに ～社会は何を求め、音楽には何ができるのか——6

成長社会から、成熟社会へ／教育には、より人間らしさが求められる

1. 表現する力——7

表現したい本能は赤ちゃんから大人まで／表現様式を知った先にある世界

2. 文脈を読み解く力、創る力——8

音楽家は優れた解読者でもある!？／体系的な学びは、他分野にも応用できる

3. 本質を問う力——9

リベラルアーツとしての音楽～知識を知力に／リベラルアーツとしての楽器演奏～感覚を表現に／問いかけ体験して学ぶ、アクティブ・ラーニング

4. 協働する力——13

自分の役割を知り、他者とコラボレーションする／アメリカの大学 AO 入試で評価されるグループワーク力とは／PISA 新指標はアンサンブル力で培われる？

5. 世界とつながる力——16

若い頃から身につく異文化受容力／世界の音楽仲間に出会い、関わること／さまざまな世代と接すること

6. 見えにくい力を評価すること——18

音楽や勉強での見えにくい力とは／音楽を含む全人的教育では、問いかけが鍵に／言葉になる以前の、感じる力

第2章 歴史的観点から ～古代から現代まで、リベラルアーツとしての音楽はどう変遷してきたか

1. 古代・中世では、音楽を教養として——22

古代ギリシアの教養人＝リラが弾ける人だった／中世では、音楽を大学教養課程として学んだ

2. 近代では、音楽を専門&教養教育として——23

ドイツからアメリカへ渡った音楽教育／ハーバード大でカリキュラム近代化・自由選択化へ

3. 日本では、音楽を専門および師範教育として——25

日本に西洋音楽を導入したのは／近代から現代へ至る歴史の中で／大学教養教育に音楽を取り入れる新たな動きも

4. 民間が担ってきた教養としてのピアノ学習——28

環境の変化によって、つながり支え合う指導者たち／学習者環境の整備によって、動機づけが変わった／音楽環境はどんな学びの変化をもたらしたか

5. 専門と教養が融合するとき～数学教師&ピアニスト・金子一朗さんインタビュー——30

音楽と数学は何が似ているのか？／全員が弾く時代に、音楽の何を学ぶべき？／音楽・数学・歴史・すべてを関連づけながら学ぶこと

第3章 脳科学的観点から ～音楽は脳にどんな影響をもたらすのか

1. 「ピアノで脳の構造が良い方向に変わる」～脳科学研究者・澤口俊之先生インタビュー——36

音楽は進化的に古いので、幼少期が重要／ピアノでワーキングメモリがぐんと伸びる／ピアノで脳の構造が良い方向に変わる／発達障害者や高齢者にも効果を発揮する／日本全体の一般知能が上がると、GDP も上がる

2. 「美しいものの創造に関わる人は幸せ」～幸福学研究者・前野隆司先生インタビュー——39
幸福の四つの因子とは？／幸せになる方向に向かっているか？／なぜ幸せの研究を？／幸せのための「感動」を分析する／美しいものの創造に関わる人は幸せ

第4章 経済的観点から ～音楽の見えない経済的価値とは？

1. 暮らしの質全体を測るべき——46
日本国民では教養費・教育費にどれだけかけているか？
2. 自己成長～それは消費か投資か？ 音楽を習う動機を七つに分類——47
人間には成長欲求がある／中高生・成人のステップ参加
3. 自己成長および社会との関係構築に——50
人間には繋がりたい欲求もある／社会への還元もステーション運営や社会貢献など／自己投資だと思う消費とは？ 自ら選び、自ら関わること
4. 教養費を増やして医療費を軽減!?——51
教養・技能教育は1兆円、精神科病院は1.5兆円規模／高齢者×アートの取り組み、および社会的インパクト研究（イギリス）
5. 「21世紀は人的資本投資を」～経済学者・福島清彦先生インタビュー——52
世界の新しい幸福度指標は「人」と「社会」／今現在の支出削減より、未来のための投資を
6. 世界の文化費・教育費のトレンドは？——54
フランス×人間理解と能力開発／イギリス×すべての人にアートを&経済効果測定も／スウェーデン×民主主義社会の創造
7. 世界的に投資が進む人文学研究、音楽も力に——57
学際的研究が進むと、なぜヒューマニティーズが重要になるのか／ヒューマニティーズの音楽・芸術分野への応用

第5章 大学最新カリキュラムの観点から ～リベラルアーツとしての音楽にも注目

はじめに ～音楽をより広く、深く学ぶためのカリキュラム考察——62

1. 音楽で思考法、実践力、創造力を養う ～総合大学教養科目——62
❖慶應義塾大学 ～知識は実践してこそ！ 身体知としての音楽
一般学生が教養として音楽を学ぶ環境 ～身体知・音楽とは何か／リベラルアーツとしての音楽／音楽を深く学んだからこそ、音楽家に対する敬意も
2. 音楽を深く学んだ社会人を育てる ～総合大学音楽学部・音楽専攻——64
❖青山学院大学 ～芸術の学びを糧に社会へ
比較芸術学科とは何か？／現役生に聞く ～比較芸術として音楽をどう学んだか
❖フェリス学院大学 ～音楽が心にある豊かさ
音楽が核にある豊かな学びを ～演奏学科／創造&実践！ 全ゼミでコンサート制作実習 ～音楽芸術学科
❖金城学院大学 ～3タイプの音楽家を育てる
3タイプの音楽家像を想定して／文学部だからこそその幅広さも／社会で音楽の力を役立てるために
3. 音楽の可能性をさらに掘り下げて ～音楽大学——73
❖東京藝術大学 ～スーパーグローバル大学創成支援認定校に
日本発音楽家として、海外に出る意義とは／専門をきっちり学んだ上で、幅広い教養を
❖東京音楽大学 ～演奏と作曲を同時に学ぶ
コンポーザー＝ピアニストコース／ピアノ・創作コース
❖昭和音楽大学 ～博士課程&短大社会人コース
博士課程設置の経緯、研究テーマは？／社会に向けて

番外編 音楽で思考法や創造力を養う ～国際バカロレア認定校——80

❖東京学芸大付属国際中等教育学校

国際バカロレアで音楽を学ぶとは？／国際バカロレアのシステム

第6章 ライフスタイル&ボディの観点から ～自分を開き、社会を開く音楽

1. 表現する身体を創る——86

身体を動かすと、音楽が身体の内に入っていく～ロシア・フランス・日本の事例から／自然に音楽を体感し、理解するリトミック～日本の事例より／なぜ表現する身体に、人は感動するのか

2. ワーク・ライフ・バランスを柔軟に——88

本業とピアノを両立／音楽家の両立支援

3. 身体を見直して、演奏と生活習慣の向上を——93

脳科学をベースにした新しい身体教育ボディ・マッピング／美しい姿勢と気の流れを学ぶ／呼吸と身体を整え、“気”の流れをよくする／音楽医科学の発展へ

4. 生活空間・自然環境に溶け込んでいくステージ——98

生活空間の中にステージ～広まりつつあるサロン文化／自然環境に溶け込んでいく建築デザイン／これからは文化が企業の価値に

5. 社会で音楽を生かす新しいコンテキスト——103

音楽で心の支援をする／音楽で創造力を高める

6. 他の世界ともつながる、音楽の豊かなポテンシャル——106

他者ともつながる／他楽器、他世代、他国ともつながる／他分野、他世界ともつながる／次のステージの自分とつながる

参考文献——109

*文中に出てくる参考文献で、オンライン上に公開されているものについては巻末に URL を記載した。

第 1 章

社会的観点から

～グローバル化する社会の中で、音楽ができることは

はじめに ～社会は何を求め、音楽には何ができるのか

成長社会から、成熟社会へ

なぜピアノを習うの？ 音楽が好きだから！
それで十分、それが一番！

それでもあえて問いかけてみたい。なぜピアノを弾くのか、ピアノを弾くとどう成長するのか、なぜ音楽を学ぶのか、音楽は社会の中でどんな意味を持つのか、社会は何を求めているのか、これからどのように学んでいくべきか……？

今、社会が大きく変化している。特に 21 世紀に入り、IT 化やグローバル化によって社会環境は一変した。世界には情報やモノが溢れ、我々は消費や所有よりも、自己実現や他人との交流を通して心の充足感を求めるようになった。20 世紀社会が追い求めていた経済成長モデルが、精神的な豊かさや幸福感までを保証するものではない、と気づいた結果なのである。

欧州では数年前から、個人の幸福度を測る新しい指標“超 GDP”を開発し、これに沿った国家戦略が実施され始めているそうだ。国全体の経済発展よりも個人の幸福度増大を重視し、教育水準・健康度・健康寿命・安全度などを計るもので、「新指標での数字を高めることは、間接的に、迂回路を通じてではあるが、経済を発展させ、成長を続けていくことにもつながっている」（福島清彦著『ホントは世界で一番豊かな国 日本——成長幻想を打ち壊した国連調査』きんざい刊、2013 年、p.91）。アメリカも非公式ながらこの重要性を認め、独自の指標を開発しているという。

日本でもワーク・ライフ・バランスを追求し、労働時間の効率化や余暇時間の充実化を求める

人が増えている（参考：公益法人日本生産性本部『レジャー白書 2014』）。個人の幸福度を高めることが、ひいては社会や国や地球環境にも良い影響を与える。だから、ゆっくり呼吸をし、身の回りを見つめ直し、心のあり方に気を配る、そうした目に見えない価値を大事にする人が増えているのではないだろうか。これは音楽や芸術のあり方にも通じる。

教育には、より人間らしさが求められる

社会の変化によって、教育のグローバル化も進んでいる。といっても、単に英語や外国語の学習時間増ではない。世界中どこでも学べる、という学習環境の変化だけでもない。「学び方」や「評価の方法」が変わるということである。たとえばフランスでは学術資料や問いかけを通して、考察力・分析力を養う（参考：菅野恵理子執筆「質問を通して学びを深める」『子供の可能性を広げるアート教育・フランス編』）。アメリカで提唱された予習先行型の授業（“反転授業”）では、予習で知識を入れておき、授業ではグループワークを行って問題発見力・問題解決力を養う。世界中の学術情報や専門知識がオンラインで瞬時に検索できるようになり、「知識の大量暗記」よりも「知識をどう活用して問題解決するか」という思考力や考察力が評価対象となるのは、自然な流れである。現在日本で、その開発方法が検討され始めている。

このような人間本来の知能を生かす教育はますます重要になるだろう。というのも人口知能の開発が急速に進み、近い将来、一部の職業はロボットに替わるといわれている。そこで今、人間にしかできないことは何か、人間本来の感性・知能・身体をどのように生かせばいいのか、人間らしさとは何か、を問い直すときがきている。

では音楽を学ぶことによって、何が養われるだろうか。今回は「社会は何を求め、音楽には何ができるのか」という視点で考えてみたい。



1. 表現する力

表現したい本能は赤ちゃんから大人まで

人には感情や意思があり、それを伝えたい本能があり、それが身体や言語を通して表現される。赤ちゃんは手足をバタバタさせながら、お腹すいた！こっち向いて！など本能のままに意思表示する。また子どもは全身と五感を駆使しながら、遊びをとおして人や世界との関わり方を発見していく。さらに成長すると、自分の感情をより多様かつ洗練された方法で表現したい、より多くの人に意思を上手に伝えたい、もっと大きな世界を知りたい、という欲求が出てくる。その様式化されたものが音楽や芸術である。言語表現であれば文学や詩、身体表現であれば楽器演奏、舞踊、絵画などである。

表現することは、人間の成長に欠かせない。20世紀初頭の英小児科医・精神分析医ドナルド・ウィニコットは、個性の発達や民主的な市民精神の形成には、子どもにとっては遊びが、大人にとっては芸術が重要な役割を果たすとした。「人間の生における芸術の役割は、何と言っても感情移入の能力を養い、伸ばしていくことにあったのです」（マーサ・C. ヌสบaum著、小沢自然・小野正嗣訳『経済成長がすべてか？～デモクラシーが人文を必要とする理由』岩波書店、2013年、p.132）。

しかし、ときにそれが欠けてしまうことがある。その一例として著者は19世紀哲学者ジョン・スチュワート・ミルを挙げ、幼少期から言語・歴史・科学の優れた教育を受けていたが、想像力の資質が養われることがなく青年期に憂鬱になり、やがてワーズワースの詩に出会ってから自らの感情を開放し他人にも思いやりの心を持てるようになった、としている。

表現様式を知った先にある世界

では、どのように表現の世界に入っていけばいいだろうか。全身を動かして音楽を表現するリトミックは、創造性豊かな遊びから芸術体験への一步といえそうだ。スイスの音楽家エミール・ジャック・ダルクローズが創案し、心身の調和、音楽性、ソルフェージュ能力などを高めることを目指した音楽教育である。幼児の自律心や集中力の育成、他人との触れ合いなどさまざまな教育的要素を含むため、「音楽のスキルのみならず、人が人として生きていく上で大事なものの、ヒューマニズムを音楽を通して気づかせることができます」（神原雅之氏談、国立音楽大学副学長、日本ダルクローズ音楽教育学会理事）。

人は成長するにしたがって、より多様で複雑な表現を求めるようになる。ピアノやヴァイオリンなどの楽器はその可能性を大きく広げてくれる。音楽の世界には、人間の喜怒哀楽、信仰、想念、ユーモア、風刺、歴史、土地、民族、舞踊、自然、抽象的概念などあらゆるものが存在し、それが時代様式や楽曲形式にしたがって表現されている。だからこそ、その様式や語法を学ぶことによって作品の真意を知ることができる。特にピアノ曲だけでも数万曲あるが、人の表現力の幅広さ、深さ、凄みははかり知れない（参考：一般社団法人全日本ピアノ指導者協会『ピティナ・ピアノ曲事典』）。どんな小さな曲でも、それを弾くことによって、きっと今までに経験したことのない未知の世界が広がるだろう。

では、その先に待っている世界はどんなものだろうか。そこには国籍や立場を超え、心をオープンにして共鳴しあう姿がある。こちらに、2012年度リーズ国際ピアノコンクール審査員の一言をご紹介します。

ピアニストがステージに出てくるたびに、私は自分の心をオープンにし、彼らが私の心に語りかけ、自然に涙をもたらししてくれる瞬間を待っているのです。『この人こ

そ私が待っていたピアニストだ』と。そのピアニストが心から愛している曲を弾き、そこから愛情と高揚感が自然に溢れ出て、我々もそれを愛さずにはいられない、それはまさに魔法の瞬間です。

(ロバート・レヴィン氏、ピアニスト・元ハーバード大学音楽学科教授) (2015年4月24日掲載分)

2. 文脈を読み解く力、創る力

音楽家は優れた読解者でもある!?

21世紀は答えがない時代と言われる。日々、あまりにも多様な情報に接しているからかもしれない。情報が断片化された“点”のまま、読み流されてしまうことも多い。しかし点と点を追っていくと、一本の“線”が見えてくることがある。その繋がりが見出せると、その“線”が何を意味しているのかを推測できるようになり、自分なりに価値判断ができるようになる。これは文脈を発見するプロセスに似ている。「文章が全体として一つのメッセージを伝達するためには、一文一文を独立したものと考えず、それぞれが意味的に関連したものとして紡ぎ続ける読み手の努力も不可欠です。意味というものは存在するものではありません、読み手の努力で見出すものなのです」(石黒圭著『「読む」技術～速読・精読・味読の力をつける』光文社新書、2010年、p.168)。

楽曲解釈でも、文章読解と同じことがいえる。音楽は時間芸術であり、そこには時間とともに展開される文脈がある。どんな性格の曲なのか、



全体はどんな構造なのか、主題はどう展開するのか、調性はどう変化しているのか、ハーモニーはどう進行しているのか、フレーズはどう連なりどこへ収束するのか、どこが頂点か、そこからどんな文脈が導き出されるのか、音色はどう響かせるか、作曲家が影響を受けた音楽・芸術作品は何か、当時の時代背景や楽器はどうか、等々から、曲の文脈を深く読み解いていくことができる。すると音一つにしても、それが全体の中でどのような意味を持つのかによって、音量、音質、色彩、音の深さ、柔らかさや鋭さ、方向性などが変わってくる。

国際コンクールでは、このような曲全体を見る力、それを踏まえて楽想を膨らませる力が大変重視されている(参考:菅野恵理子執筆「感性の多様化、演奏の個性化へ」『2010年度第16回ショパン国際ピアノコンクールリポート』)。さらに最近ではフリープログラムが増えているが、曲の選択と配置によって新しい視点や解釈を提案したり、無名の曲に芸術的価値を見出したり、テーマに沿った選曲で自分なりの文脈を創ることもできる。ピアニストの見識の広さと力量によって、いかようにも世界を広げていける(参考:菅野恵理子執筆「どんな曲がよく選ばれているのか?」『2013年度第14回ヴァン・クライバーン国際ピアノコンクールリポート』)。

体系的な学びは、他分野にも応用できる

調性音楽はバロック・古典・ロマン派・近現代と大きく四期に分けられ、その約300年の間に時代様式・楽曲形式・楽器構造などが大きく変遷しており、これを体系的に学ぶことによって歴史的な大局観が得られる。また、一人の作曲家あるいは複数の作曲家を比較考察すること、たとえばバッハの平均律で描かれる24全調の壮大な世界観や、ベートーヴェンのピアノソナタに垣間見える熟考の推移などは、多くのことを示唆してくれる。

音楽の時代様式や楽曲形式などの体系的な理解が進むと、「この場合はこう考えればいい」



といった方法論が身につく、さらに「この楽節はこう展開するだろう」「あの曲にも応用できそうだ」といった推察力や応用力が備わってくる。

これに着目したカリキュラムを実施しているのが、マサチューセッツ工科大学 (MIT) である。現在約 2,000 名が教養科目として音楽科目を選択し、そのうち約 200 名が音楽に比重を置いた“音楽専修”である。彼らの多くは他学科主専攻だが（機械工学、数学、コンピュータ・サイエンスなど）、歌、楽器演奏、室内楽といったパフォーマンスへの関心が高く、実際に得意であることも多いそうだ。

現在音楽専修生のアドバイザーをしているエミリー・ボロック音楽学科教授は西洋音楽史入門クラス担当で、毎週講堂での講義 90 分＋小グループセッション 60 分の二本立てで進められる。1 学期で 3 本の小論文 (1,500～2,400 words) が課され、学期末に試験が行われる。「オペラであれば舞台演出が時代によってどう変遷してきたのか、交響曲であればその楽曲が時代によってどのように聴取されたのかなど、楽曲の時代背景とその意味を理解してもらうようにしています。また伝統的な音楽様式や楽曲形式といった抽象的な概念も扱います。音楽経験の少ない学生には、音楽がどのように感情・イメージ・事象・記憶を伝えているかを話し、それを彼らなりにストーリーテリングに生かしてもらいます」。

テキストのある歌曲・歌劇や、ストーリー性

のある標題音楽を取り上げることが多いそうだが、フーガやソナタ形式等の抽象的な音楽にもテンションやコントラストがあり、それが全体としてストーリーを成していることを理解してもらうという。

ちなみに MIT 構内では、廊下を歩いているとどこからともなくピアノやヴァイオリンの音が聴こえてくる。正門前ではアンサンブルグループが集まって演奏を始め、学生たちは耳を傾けながら笑顔で通り過ぎていく、という光景も目にする。一瞬音楽学校かと勘違いするほどであった。

MIT に限らず、アメリカの総合大学には音楽学科や音楽学校があり、音楽専攻生だけでなく、他学科生も教養科目として履修することができる。その数なんと、一大学あたり数百～数千人規模！ 中には音楽をまったく弾いたことも、聴いたこともないという初心者もいる。それでも音楽に興味を持って履修する学生が後を絶たないそうだ。音楽そのものの魅力に加え、こうして他分野に応用できるアプローチも採られている。

日本でも、音楽や芸術で培われる力が注目されてきている。「美術や音楽で培われるものは、その分野だけでなく、そこで培われた物の見方や考え方、処理の様式や問題解決の戦略は、他にも転移や汎化する可能性がある。対象や領域を越えて精神機能が育つということを共通認識とすべき」（参考：国立教育政策研究所『教育課程の編成に関する基礎的研究』）。

まさに音楽や芸術は、普遍的な教養体系なのである。
(2015 年 4 月 24 日掲載分)

3. 本質を問う力

リベラルアーツとしての音楽 ～知識を知力に

音楽の学び方は幅広い。楽譜を読み解いて音にする力だけでなく、音楽を通して思考力や生きるための力を養うこともできる。それは、リ

ベラルアーツ（教養）としての音楽である。

ここで再び、アメリカの大学事例をご紹介します。アメリカにおける教養とはエリート主義の残滓^{ざんし}ではなく、「知識を備えて独立心を保ち、共感の心を持つ市民を形成するのが教養」（前掲書『経済成長がすべてか?』p.24）という考え方が、今でも教養教育の伝統を支えている。そのため音楽学部開講科目の一部は、専攻生のみならず、教養科目として全学生が受講できる。ハーバードやスタンフォード、MIT などでは 1,000 ～ 2,000 人規模という。



ハーバード大学構内

たとえばハーバード大学の教養科目には『初日 ～ 5つの世界初演 (First Nights: Five Musical Premiers)』という授業がある。モンテヴェルディからストラヴィンスキーまでの5作品を取りあげながら、当時の聴衆がどのように「未知の音楽」に出会い、受けとめたのか、当時の評論記事や書簡などの一次資料をもとに考える。

- モンテヴェルディ『オルフェオ』（1607年、マントヴァ）
- ヘンデル『メサイア』（1742年、ダブリン）
- ベートーヴェン 交響曲第9番（1824年、ウィーン）
- ベルリオーズ『幻想交響曲』（1830年、パリ）
- ストラヴィンスキー『春の祭典』（1913年、パリ）

担当のトーマス・ケリー教授は、学生が“傍観者としてではなく、当事者として音楽に関わること”を目指している。そしてこの授業のた



ハーバード大学構内にあるコンサートホール。

めに毎年新作を委嘱し、その世界初演を聴いて1年間の授業が締めくくられる。つまり自分たちも「未知の音楽」が生まれる瞬間に立ち会えるのだ。作曲家の大胆な発想力や繊細な表現力に驚く人もいだろうし、芸術とは既存概念を打破し、自分の感覚や知覚を大きく広げてくれると実感した人もいだろう。リハーサル見学や作曲家との質疑応答もあり、鑑賞後はレポートが課せられる。

またスタンフォード大学では音楽、映画、絵画、彫刻、文学などあらゆる芸術作品を横断的に見渡しながら、「人はなぜそのような考え、表現したのか」「それが社会にどのような影響を与えたのか」という社会学的・哲学的視点で学ぶ。一例として、2013年に新設された『芸術へのイマージョン』を挙げてみよう。講義だけでなく実践的なプロジェクトも多い授業で、音楽家・アーティスト・学者なども外部講師として登場する（週2回講義&週2回グループワーク・討論）。このカリキュラムで音楽分野を担当する作曲家のジョナサン・バーガー教授は、次のように語る。「スタンフォードのような研究大学において、芸術の役割は複合的かつ多面的なものです。音楽学科生にとっては、学際的な繋がりの中で、音楽を含むすべての芸術の学びを深めてくれます。また全学部の学生にとっても、芸術は不可欠で不可避なものだと考えています。芸術は曖昧さを受け入れ、創造的に考え、問いかけ、また挑戦することを教えてくれます。」



スタンフォード大学構内にはロダンの彫刻がある。

学生自身の嗜好や思考の枠を超えるチャレンジでもあります」。

2014年冬学期は「厳粛さと軽妙さ」をテーマに、芸術家がいかにパロディや風刺を通して社会問題を世に訴えてきたかを学んだそうだ。資料はシェイクスピア『マクベス』、ストラヴィンスキー作曲・ニジンスキー振付『春の祭典』、マルセル・デュシャン作『泉』、ショスタコーヴィチ交響曲第7番『レニングラード』、ベンジャミン・ブリテン『戦争レクイエム』、ヴィンセント・ミネリ監督『時計』など。作品の本質を見据えながら、なぜその作品が生まれたのか、なぜその手法を用いたのか、どのような社会・時代背景があったのか、芸術と社会にはお互いどんな影響があったのかを、大局的に考えるのである。

学びがある程度進んだところで、学外へのステディツアーも実施している。サンフランシスコでは、『アゴン』（ストラヴィンスキー作曲、バランシン振付）などのバレエを鑑賞。またロサンゼルスではパブリック・アート（広場、壁画、貧困街など）や美術館見学、ロサンゼルス・フィルコンサート鑑賞、地元コメディアンとの対話、大学役員邸宅でのパーティ、などが行われたそうである。

ツアーのテーマは「芸術がコミュニティのアイデンティティにどう貢献しているか」「芸術活動にさいして、周囲の建築物や都市政策はどのように影響しているか」等を検証すること。音楽や芸術作品にはどのようなコンテキストが

背後にあるのかを、知識と五感を使いながら読み解くのである。まさしくアクティブ・ラーニングである。

リベラルアーツとしての楽器演奏 ～感覚を表現に

知識として学んだことは、アクティブ・ラーニングを通して知力に変えていくことができる（参考：菅野恵理子執筆『『感』から『知』に変える音楽の聴き方 ～フランスの小学校で行われた実験とは』『子供の可能性を広げるアート教育・フランス編』）。その最たる例は、パフォーマンスである。アメリカの大学で開講されている音楽科目には理論と演奏実技があり、アンサンブルグループやオーケストラの多くが単位認定されている。さらに楽団所属の学生に対する奨学金授与や、個人レッスンの単位化が進んでいる大学もある。

アイビーリーグの一つ、ペンシルベニア大学でもアンサンブル実技は全学生対象に開講されており、単位取得が可能である（吹奏楽、管弦楽団、バロック&リコーダー室内楽団、室内楽団、合唱団、聖歌隊、ジャズ、アラブ・アンサンブル、サンバ・アンサンブル等。オーディションが課される場合もある）。また楽器の個人レッスンは200人以上が受講しているそうだ。さらに音楽専攻生には特別プログラムがあり、地元フィラデルフィア管弦楽団奏者などが指導にあたることもある。

ピアノなどの楽器個人レッスンは、2008年秋から単位認定されている。かつては課外活動とみなされていたが、パフォーマンスの比重を



カリフォルニア大学のバロック・アンサンブル。

増やす方針に変更されたそうだ。ペンシルベニア大学マイケル・ケトナー氏によれば「アメリカ独立宣言起草委員の一人で、大学創立者ベンジャミン・フランクリンは、『学校とは思想を生み出すだけでなく、それを実践する場である』と述べています。音楽も理論だけでなく、実践されるべきということではないでしょうか」。

また全米最大規模のリベラルアーツ・カレッジであるカリフォルニア大学（以下バークレー校）でも、アンサンブル実技のクラスが全学生対象に開講されている。こちらは現代音楽即興アンサンブル、ゴスペル合唱、ジャワ・ガムラン、アフリカ系音楽アンサンブル等も含まれ、国際色豊かだ。民族音楽学の教鞭をとるボニー・ウェイド教授は、「楽器を演奏することによって、音楽に深く入り込むことができます。ですから、音楽を通じて自分の国や他の国を知ることにもなります」という。

まさにパフォーマンスは身体知であり、それが単位として評価されているのだ。

問いかけ体験して学ぶ、アクティブ・ラーニング

現在日本の教育現場でも、全科目においてアクティブ・ラーニングが模索され始めている。こちらは文部科学省による定義である。

「教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的

能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である」。

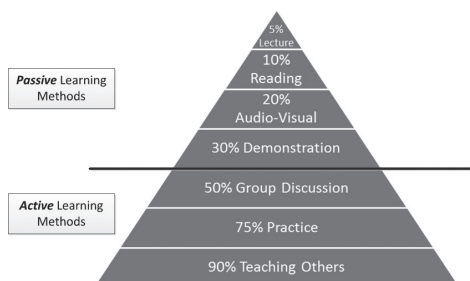
実際に学んだことを相手に教えたり、実践したり、討論することによって、学びが内在化・深化する。上図はその「学習定着率」を段階的に示したものである（数字はあくまで便宜的なものだが、講義の受講や読書が5～10%に対して、グループ・ディスカッションで50%、実習・実践で75%、他者への指導で90%となっている）。

音楽や芸術には人間の生き様が現れている。時代によって表現様式が違っても、人間の本质や物事の真理はほとんど変わらないのではないだろうか。たとえば、美しい、愛しいと感じる心、故郷を想う気持ち、喜びや苦難、自然に対する畏敬など、時代を経ても変わらない。過去の作品からそれを学び、自分の身体を使って表してみると、表現にはどのような思いや意図があるのか、表現方法がいかに多様か、などが分かってくる。

なお、2015年度ラ・フォル・ジュルネ・オ・ジャポン「熱狂の日」音楽祭では、“恋、いのち、祈り”の三つの切り口で「パシオン (Passion)」が奏でられる。作曲家や演奏家によって表現が異なるので、聴き比べてみるのも面白いだろう（参考：『ラ・フォル・ジュルネ・オ・ジャポン「熱狂の日」音楽祭 2015 年、LFJ 丸の内エアコンサート』）。

過去の智慧を学び、現在にあてはめて考え、未来に生かすこと、それがリベラルアーツ（教養）の意義である。ピアノなどの楽器や歌は、知識を知力に変えるためのアクティブ・ラーニングといってもいいだろう。

（2015年5月1日掲載分）



Learning Pyramid, National Training Laboratories
(networklessons.com より引用)

4. 協働する力

自分の役割を知り、他者とコラボレーションする

社会生活でも音楽でも、一人ですべてをこなすだけでなく、他人とともに問題を解決したり、目標を達成する場面がある。そもそも古代から、人は一緒に音楽を奏でたり歌うことで共同体意識を高めてきた。音楽によって他者と繋がること、音楽を他者とともに創ることは、自然な営みである。ソロ曲が多いピアノでも、やはりデュオやアンサンブル経験から得るものは大きい。そこで最近ピアノコンクールでは室内楽を課する場合が増えている。まさに「他者ありき」の課題だ（参考：菅野恵理子執筆『ジュニア国際コンクールの今』2012年）。



ではどのようなプロセスを経て、アンサンブルが出来上がっていくのだろうか。共演者は、国籍や年齢が異なるだけでなく、テクニック、呼吸、拍感、音質、ディナーミクの幅にも違いがある。頼れるものは楽譜だけ。そこで、まずは正確な読譜が条件となる。

その上で、どのようなチームワークで曲の流れを創り上げていくか。自分の役割を把握し、共演者の楽器特性を理解し、お互いの音色の響きや方向性をよく聴き、全員の楽曲解釈をすり合わせて一つの流れを創る、等々、とても複雑なプロセスなのである。一人一人が、主体性と客観的視点を持つことが望まれる。



さらに、お互いを信頼して個性を生かしあうことができれば理想的だ。国際コンクールでも特に印象的だったのは、ピアノが全体の流れを自然にリードしつつ、共演相手の潜在能力をも引き出しながら一つの世界観を創っていた演奏である（参考：菅野恵理子執筆『セミファイナル室内楽課題～耳の良さと対話力』『2013年度第14回ヴァン・クライバーン国際ピアノコンクールリポート』）。他楽器の発音や弓の動きを知った上で、ピアノの打鍵や響かせ方を工夫したり、共演者を尊重しながら一人一人が個性を発揮しやすい流れを作っていた。

ピアニストで室内楽の達人でもあるイタマル・ゴラン氏は、「人によって拍感や色彩、ディナーミク、強さは異なり、それによってエネルギーや音楽への投影の仕方も違います。だから私はいつも、共演者と何か新しいものを創ろうと試みているのです」という。弦楽器奏者も同様だ。『弦楽四重奏はまるで16本の弦でできた弦楽器で弾いているように聞こえなければならない』と言われますが、私はNO!と言いたい。皆が同じ本を読み、同じことを考えていたら会話は面白くありません。それぞれが確立した個人であることが大事。一人一人がしっかり個性を持っていれば、そこから議論が生まれ、互いの考えを共有することができます」（参考：菅野恵理子執筆『室内楽を通して得られること』『ムジカ・ムンディ室内楽研修会リポート』2011年）。

アメリカの大学 AO 入試で評価されるグループワーク力とは

アンサンブル能力は音楽だけでなく、学校や実社会でも生かされる。たとえば学校ではホームルーム、委員会、部活動など、あらゆる場面において協働作業の機会がある。授業でもグループワークの導入が検討されている（参考：菅野恵理子執筆「社会は何を求めて、音楽には何ができるのか」『今こそ音楽を！』2015年、第1章第1回）。大学入試においてはどうか。現在日本では約半数がAO入試で、今後さらに増えていくとされているが、全州でAO方式を採用アメリカの事例をご紹介したい。書類審査では学業成績表やSAT（Scholastic Assessment Test 大学進学適性試験）点数だけでなく、推薦文、小論文、学校内外での活動状況、パーソナリティまでが精査される。そのさいに「リーダーシップがあるか」「どのようにクラスでコミュニケーションを取っているか」「問題があったときにどのように解決するか」などが焦点になる。オーケストラやアンサンブルに所属していた場合は「その楽団内でどのようなパートや役割をどうこなしていたか」なども考査の対象となるそうだ。

アメリカ在住指揮者の原田慶太楼氏（現在シンシナティ交響楽団、アリゾナ・オペラ団、リッチモンド交響楽団各アソシエイト・コンダクター）は、以前フェニックス・ユース・シンフォニー音楽監督を務めていたさい、大学進学希望者に推薦状を毎年100枚以上書いていたという。「アドミッション・オフィサーは受験生が高校でどんな活動をしてきたかをチェックします。たとえば学級委員長や生徒会長をしていたか、成績はどのくらいか、クラブ活動では何をしていたか、リーダーシップや集中力があるか、などです。オールラウンドの人間が望まれているので、課外活動を何もせず勉強ばかりという高校生にとって難関大学合格は難しいですね。現在ユース・オーケストラの団員は400人前後います

が、音楽学校や音楽院に進むのは僅かで、アイビーリーグを希望する子が多いです。実際に入学できるのは指揮者からの推薦状を持っている人がほとんどですね」。

原田氏が推薦状を書いた学生の中で、ハーバード大だけでも7名合格した（2013年当時）。その一人、将来医者を目指すハーバード大学1年生でフルート奏者のジェニファー・チャンさんは小学生のときにユース・オーケストラに入団し、多くを学んだそうだ。「ユース・オーケ



ジェニファーさんは毎週末地域の病院で演奏するボランティアグループ MIHNUET でも活動中。こちらはブラックタイ・コンサートの様子

ストラでは他の人と力を合わせるということを知りました。全員で一つの音楽を創り上げるのが目的ですから、自分の役割を的確にこなすことが求められます。たとえば自分が伴奏の立場であれば、他の奏者や聴衆がメロディをしっかり聴き取れるように音を控えめに出すとか。常に自分の周りの人をよく聴くように努め、そしてときには自分の意見を恐れずに伝え、仲間の意見や批判も真剣に受けとめて考える習慣ができました。音楽をより良いものに高めていくためには率直に意見交換することも必要です。勉強も同じですね。大学の授業ではチームで学術プロジェクトに取り組むことになりますが、良いチームメイトであるほど大きな貢献ができると思います」と語っている。現在はハーバード・ラドクリフ・オーケストラでフルートを担当している。

PISA 新指標はアンサンブル力で培われる？

昨今、世界の学習評価基準も変わってきている。OECD 経済協力開発機構が 15 歳児を対象に実施している PISA 学習到達度調査では、2015 年度から「協同型問題解決能力」が追加される（その他「読解力」「数学的リテラシー」「科学的リテラシー」）。

ここにサンプルテストをご紹介します（参考：OECD “Programme for International Student Assessment 2015”, p.49-89）。パート 1 は「海外からやってくる外国人学生グループに地元を案内してもらいます。クラスメート 3 名とともに、その案内先を 3 つの選択肢から選びなさい」というお題。チャット形式で会話を進めていき、「あなた」ならどのように答えるか、最も適当だと思えるものを選んでいく。

第 1 問目では、「何から話し始めようか？」に返答する形で、まず解決すべき課題を明らかにする。続いては、およそ以下のような流れである（ここでは三つの選択肢を A、B、C とする）。

- 何から話し始めようか？（課題の抽出・明確化）
- “地元” とは何を指すのか？（理解の共有化）
- 決められた行動時間内に行ける場所はどこか？（約束事の確認）
- 脱線した意見が出たので、課題を再確認しよう（チーム役割分担の観察とフィードバック）
- A についての情報確認 → 却下、B、C も検討しよう（チームメンバーとの協働）
- B、C ともに “地元” を感じさせてくれる

The screenshot shows the PISA 2015 interface. On the left, there's a 'Part 1 - Directions' section with instructions. In the center, there's a 'Messages' section with a chat log. The chat log shows a conversation about a museum visit, with a student asking for recommendations and a teacher responding with suggestions. On the right, there's a 'Help' section with a 'To:' field and a 'From:' field.

（理解の共有化）

- C への反論に異議あり。B と C をきちんと比較検討しよう（グループワーク促進と複数選択肢の検討）
- C の場所が遠いが時間内に戻ってこれるのか？（新たな問題発見）
- C についての情報確認 → 却下（理解の共有化、問題の内容検討）
- 全会話の要約
- 会話から判明した事、および最終案を担任に報告する（計画の実施と約束の遵守）

パート 2 では「どの学生がどのグループのガイドにふさわしいか、何を基準にどう選べばよいかを考えよ」、パート 3 では、「学生の一人が急に帰国しなければならなくなった。誰が何時までに空港までどのように見送りに行くか」を、同じく会話形式で進めていく。

このように段階を追って、前提条件、関わる人数、時間や場所の制約、予想外の展開、新たな課題などが増え、難易度が上がっていく。評価指標としては、「チームメンバーの考え方や能力を把握しているか」「チームメンバーがどの程度理解しているかを確認し、適宜修正できているか」「行動結果を観察し、問題解決の達成度を判断できているか」「チームとして機能しているか」などがある。まさにアンサンブルでも同じことが言えるだろう。



今日日本でアンサンブルが着実に広まっている。毎年全国 500 地区以上、4 万人以上が参加するピティナ・ピアノステップでも、アンサンブルは 75 地区(2014 年度)で増加傾向にある。

一度でも経験すると、音楽の見方や関わり方が変わるだろう。

また演奏に限らず、運営面でもアンサンブル力が発揮されている。ステーションでは、各地の特色を生かしたステップ運営や地域音楽活動への波及が見られるが、これはまさにピアノ指導者の先生方が持つ協働・協創する力である。これについては後の章で述べたい。

(2015年5月8日掲載分)

5. 世界とつながる力

若い頃から身につく異文化受容力

世界は周囲との関わりによって築かれていく。家族、友人、学校、音楽教室、街、他の街、他の国……、行動範囲が広がるにつれて周りの世界はどんどん広がっていく。そのたびに、自分とは違う価値観や世界観に出会うことになる。では自分と違う世界をどう受け入れ、繋がって行くのか。

音楽は、一瞬にして、遠い国へ思いを馳せたり、心を寄せることができる。ただ聴いたり、弾くだけで。実際、ピアノや音楽を学ぶ人は、異文化に早くから自然に触れることになる。たとえば子供用の小品には、世界中の国々の舞踊や民謡を元にした作品も多い。一例として、2015年度ピティナ・ピアノコンペティション課題曲を見てみよう。A2～A1級（未就学児～小学校2年生）では、ドイツ、オーストリア、デンマーク、アメリカ、オランダ、ロシア、ポーランド、スペイン、日本の作品・作曲家など、多様である（参考：一般社団法人全日本ピアノ指導者協会『2015年度ピティナ・ピアノコンペティション課題曲』）。

そして旋律、ハーモニー、音色、リズムなどには、その国らしい雰囲気やにじみ出る。「あ、綺麗だな」「楽しそう！」「なんか不思議な感じ」という感覚は、その国や文化に対する興味を抱くきっかけになる。特にA2～A1級は脳が急



ペルーの小学校に鍵盤ハーモニカ 20 台を届け、指導や演奏も披露した久保山菜摘さん

速に発達すると言われる7～8歳にあたり、この時期に多様な音色に触れることは、将来的に多様な価値観の受容へと繋がるだろう。

これは子どもの環境創りにも通じる。心理学者ミハイ・チクセントミハイ氏（元シカゴ大学心理学主任教授）は天才の創造力などについて研究しているが、幼少期の親の関わり方についてこう述べている。「子どもにこの世界の美しさと多様性を気づかせることはとても大事です。将来頭角を現す分野に興味を示すのは、それからでもいいのです」（“Creativity-Flow and the Psychology of Discovery and Invention”, Mihaly Csikszentmihalyi, Harper Collins Publishers 1996）。

世界の音楽仲間に出会い、関わること

では、音楽があれば世界に飛び出していけるだろうか。「そんなのムリ」「私にはちょっとできないかな……」と考えて、行動に結びつかないことは誰にでもある。人は身体の限界より、意識の限界を先に感じることもあるもの。しかし恐れや失敗を回避する気持ちより、興味や好奇心が優ったとき、音楽はその壁をぱっと飛び越えてしまうことがある。

「武術でも音楽でも、すべての人に能力は潜在していて、違いはリミッターを外せるかどうか」（甲野善紀・茂木健一郎共著『響きあう脳と身体』木星叢書、2008年、p.61）という説もある。これは普段無意識のうちににかかっている制約がはず

れ、限界まで能力が引き出されることを言う。

最近では、積極的に世界中の音楽家と関わる若手も増えてきた。たとえば久保山菜摘さん(23)は小学生の頃からピアノ演奏を通じたボランティア活動を続けており、昨年は鍵盤ハーモニカ 20 台をペルーまで届け、クラシック音楽を聴いたことのない児童相手に演奏や指導を行った(参考:一般社団法人全日本ピアノ指導者協会『ピティナ CrossGiving』)。また阪田知樹さん(21)は欧州渡航のたびに新しい楽曲や音楽家に刺激を受け、2013 年ヴァン・クライバーン国際コンクール最年少ファイナリストとなったさいには、第一次予選にてリスト『ラ・カンパネラ』の 1838 年初版を弾き、会場やネットでも話題となった。あまり知られていない曲の面白さや美しさを発見し、今度は自らそれを伝えたい、という意志を感じる。

やはり小さい頃から音楽に触れ、音楽を通して世界を広げてきた人ならではの異文化受容力や世界と関わる力がある。行動に繋げることができた人は、より広い世界の中でまた同志を見つけることができるだろう(前掲記事『ジュニア国際コンクールの今』)。

さまざまな世代と接すること

音楽は身近な異文化・異世代を結びつけることもできる。特に最近は世代間交流が減っていると言われるが、音楽はそれを回復し向上させることができるだろう。

2004 年に実施された高齢者対象の調査研究『シルバー層の世代間交流の実態と意識』(参考:北村安樹子著『シルバー層の世代間交流の実態と意識』第一生命経済研究所、2004 年)によれば、回答者の 7 割以上が子どもとの交流に関心があるが、ふだん子どもと接する機会を持つ人は 3～4 割程度にとどまるとしている。

子どもとの交流に関心がある理由としては、「子ども世代の考え方や文化を知ることができるから」(67.1%)、「子どもとのふれあいは、日々の生活にはりあいや楽しみをもたらすから」

(51.4%)、「子どもとふれあうと、若々しい気分になるから」(48.1%)と、子どもとのコミュニケーションが生きがいや若々しさの実感に繋がるとしている。これは生きるための大きなモチベーションであろう。

一方、関心がない理由としては「子どもとは活動のペースが合わないと思うから」(38.4%)、「忙しくて時間が合わないから」(31.5%)、「興味の対象が違うと思うから」(28.8%)と、初めから世代差を懸念する傾向もみられるが、活動や興味の対象が似通っていればその差は比較的容易に埋まることも想像される。



ではピアノや音楽という同じ趣味や特技を持っていた場合、世代間交流は活性化できるだろうか。さまざまな世代がステージに立つ場として、ピティナ・ピアノステップを例に挙げてみよう。これまで 1 歳から 100 歳までのピアノ学習者数十万人が参加しているが、シニア・シルバー世代の参加も少なくない。そこで、最近一つの動きがあるという。当日のスケジュールを組むさいに、以前はほぼ世代別にグループ分けされていたのが、最近は異世代を同じグループに入れているそう(全体の 6 割程度)。それによって子どもが大人の演奏を、また大人が子どもの演奏を聴くことになる。年齢や世代は違っても、同じ表現者・演奏者として共感するとき、言葉を交わさなくても心が通じる瞬間がある。中にはコミュニケーション用紙を交わした人もいたかもしれない(例:鳥栖基山ステップ)。

前掲の調査研究によれば、シニア・シルバー層が接する機会が比較的多い順に、①大学生を含む 20～30 代 (54.0%)、②小学生 (45.6%)、③就学前の子ども (42.6%)、④中高生 (31.8%) という結果が出ている。ピアノに限って言えば、②④が一番多い。高齢になってもなお若年代と同じステージに立つ機会があることは、超高齢化社会を活気づける要因になるだろう。また子どもにとっても、自分と同じく健闘する上の世代を見て、勇気づけられたり、未来社会に対して肯定感を持つことができるだろう。

なお世界中のコンサートホールでは、60～70 代のベテランと 20～30 代の若手による異世代共演などはよくみられる。才能ある若手演奏家にとって巨匠との共演は至福の喜びと学びであり、巨匠にとっては若い感性との出会いで新たな靈感を得ることもあるだろう。音楽には、地域も世代も超えて、双方に新しい世界観をもたらす力がある。

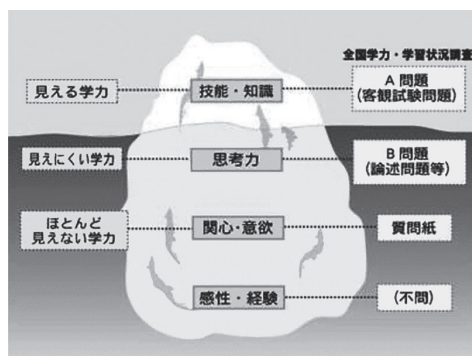
(2015 年 5 月 15 日掲載分)

6. 見えにくい力を評価すること

音楽や勉強での見えにくい力とは

本当に大事なものは何か？ たとえそれが分かっているとしても、目に見えないと見過ごされてしまうことがある。今、その目に見えない価値を視覚化して、積極的に評価しようという流れがある。

次図は「確かな学力の冰山モデル」(梶田勲一



「確かな学力」の冰山モデル(梶田勲一)

「確かな学力の冰山モデル」、松下佳代著『新しい能力』と学習評価の枠組み』京都大学・高等教育研究開発推進センター、2013 年)である。これは 21 世紀に必要な“新しい能力”をどう規定し評価するか、という調査の過程で引用されたモデルである。これによれば、「技能や知識」は見える学力、「思考力」は見えにくい学力、さらに「関心・意欲」「感性・経験」は氷山の底にあり、なかなか見えない力とされる。

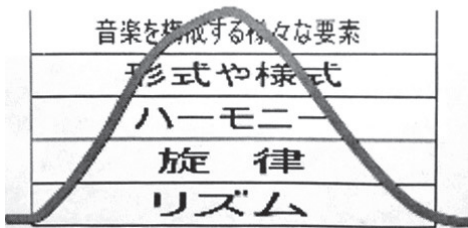
「技能や知識」はまず物事を覚えることから始まる。暗記できているかどうかで判断できるのは、見えやすい学力である。一方、「思考力」は文脈を理解したり、知識をもとに自分の考えを述べるなど、物事の本質を読み解いて応用する力である。この力があれば、新しい課題に出会ったときでも、自ら解決に導くことができるだろう。さらに「感性」は、物事全体のイメージや性質をぱっと把握したり、直感や想像力を生かして新たな視点からその本質をつかむ力にもなる。「思考力」や「感性」を測るのは難しいが、その力量次第で学びの深さが変わってくる。

同じことが音楽にも当てはまる。新しい曲を弾くときに、以前学んだ知識や考え方をどのように生かし、自らの力で読み解くことができるかは、学びの深さと比例する。それが、国際コンクールなどで審査の対象となる(参考:菅野恵理子執筆「個の力を引き出す審査システム」『2010 年度エリザベート王妃国際音楽コンクールピアノ部門リポート』)。

次図は「個体内の音楽的発達」の図である(「ピアノにつながる! リズム⇨旋律⇨ハーモニー⇨形式や様式⇨音楽を構成するさまざまな要素、の順に学びが進んでいくという図式である。これは自然の摂理に適っているだろう。なぜなら、音楽の歴史の変遷とほぼ一致している。

まずリズム、旋律はどちらも人間が原初的に持つ力といえる。リズムや声の調子は人間の内的律動に直結した根源的なものであり、古代ギ

5. 個体内の音楽的発達



リシア詩人は韻律と旋律によって詩を語り継いだ。一方、ハーモニーや形式・様式は、より体系的で知的な営みを象徴している。ハーモニー（調和）の概念は古代からあったが、ハーモニー（機能と声）の進行が楽曲の骨格を成すようになったのはバロック時代以降の調性音楽である。さらに時代を経て、今では形式・様式などを体系的に学ぶようになったことで、楽曲全体の構造や時代背景を読み解き、さまざまな楽曲解釈に応用できるようになった。

楽譜を読むということは、楽曲本来の姿を浮かび上がらせること。だからこそ、部分的な音の美しさや正確さだけではなく、その音がどのような時間的推移や時代的背景の中で生まれたのかを考えることで、より本質に迫ることができる。

この音楽的発達モデルと学力モデルを逆にして重ね合わせてみると、似通っている部分がある。「リズムや旋律」は見える学力、「ハーモニーや形式・様式」は見えにくい学力に相当すると言えるだろうか。音楽においても、後者の力を身につけたとき、学びが深まった状態だと言えるだろう。さらに知性と感性で「音楽を構成するさまざまな要素」を有機的に統合できれば、



独自の美が生まれる。

音楽を含む全人的教育では、問いかけが鍵に

思考力や問題発見・解決力など、見えにくい力を重視する教育プログラムがある。国際バカロレア（International Baccalaureate®、略称：IB、本部：ジュネーブ）はその一つだ。全人的教育をめざし、初等教育から高等教育まで主要科目を万遍なく学び、その一環として芸術や音楽も含まれる（参考：菅野恵理子執筆『グローバルネットワーク校の地域色生かした教育～ウィーン・アマデウス音楽学校』2014年）。現在 147 カ国 3,700 以上の学校で導入され、117 万人の生徒が学んでいるそうだ。近年は特にアジア各国での普及が進み、日本でも大学入試での IB 活用促進の方針を打ち出した。東大では推薦入試（2016 年度より導入予定）で、推薦要件を満たす根拠として IB の成績証明を認めている学部もある。

国際バカロレアは年齢別に 3 段階に分類される。PYP (Primary Years Programme) は 3 歳～12 歳、MYP (Middle Years Programme) は 11 歳～16 歳、DP (Diploma Programme) は 16 歳～19 歳。学際的に学んでいくシステムで、例えば PYP では下記のようなテーマを掲げている。「私たちは誰なのか」「私たちはどのような時代と場所にいるのか」「私たちはどのように自分を表現するか」「世界はどのような仕組みになっているのか」「この地球を共有すること」ということ……。

この問いかけは統合的かつ普遍的なものであり、どの教養科目においても、深く学ぶ力を引き出してくれる。実際、IB 校のカリキュラムは総合的な成績向上にも繋がっているという報告がある。アメリカの IB 修了生対象に実施した調査によると、アイビーリーグ（ハーバード、イェール等、8 大学）において IB 修了生の合格率は当該大学における全体合格率と比べて 3～13% ポイント高く、またアメリカ共通テスト（SAT、ACT など）においても全米平均スコアより高いそうである（「国際バカロレア日本アドバ

イザリー委員会報告書」2014年、p.33)。

またこのような問いかけは、学ぶ意味や方法を見つめ直すきっかけになる。現在、日本で進められている大学入試改革では(参考:文部科学省『高大接続改革実行プラン』2015年)、個人個人の多様性に富む学習成果や能力を反映させるべく、新たな大学入学者選抜ルールが構築されている。その一つとして新テストの実施が検討されているが、従来の「教科型」だけでなく、新たに「合教科・科目型」「総合型」の学力評価方法が導入される(参考:文部科学省『「合教科・科目型」や「総合型」を導入する必要性』高大接続特別部会資料、2014年)。「合教科・科目型」「総合型」では、どの科目にも応用できるような力、すなわち問題解決力や分析力などが評価の対象になる。このような見えにくい力をいかに評価するか、その指標の開発が現在進められている(ルーブリック評価など)。

言葉になる以前の、感じる力

全人的教育は、人間のあらゆる能力を統合的

に伸ばしていく考え方である。知識や技能を実社会で生かすときに、専門科目の知識だけではなく、幅広い教養という土壌から多彩な花を咲かせてほしいという願いが込められている。そして地下水脈のようにあらゆる領域をつなぐのが、「人間とは？」という問いかけである。

では、なぜ全人的教育に音楽や芸術が含まれているのか。

音楽や芸術には、言葉になる以前の曖昧で複雑な感情を受けとめ、包み込み、解き放つ力がある。言葉にするには感情を客観視しなければならないが、音楽はただ“共にいる”“共に感じる”ことができる。そして、その中で本当に大事なことに気づくことがある。それは小さな心の声かもしれないが、それが実は豊かな社会の原点でもあり、人類にとって最も大事なことであったりする。

それを感じ取る「感性」は、冰山モデルの底にある。つまり、その人自身を支える「根」だ。その根を豊かに伸ばしていくのが、音楽・芸術なのである。

(2015年5月21日掲載分)

第2章

歴史的観点から

～古代から現代まで、リベラルアーツとしての音楽は
どう変遷してきたか

1. 古代・中世では、音楽を教養として

古代ギリシアの教養人＝リラが弾ける人だった

音楽は人類とともに生まれ、エジプトやメソポタミアなど古代文明でも盛んであったが、基礎教養として学ばれた源流は古代ギリシア、ローマにある。リベラルアーツとはラテン語でアルテス・リベラーレス (artes liberales) と言い、自由人のための諸技芸、自由技芸と訳される。自由人とは非奴隷の自由市民を指し、肉体労働から解放され、知性を磨いて精神を高めることが重んじられた。これに対してアーツ・メカニケ (artes mechanicae または artes serviles) は、手工芸、農業、料理、絵画、楽器演奏などの身体を使う実践的技芸を指す。



古代ギリシアでは、音楽は社会生活や教育などあらゆる場面に存在していた。アテナイの成人男性市民は饗宴の席で歌い楽器を演奏できることが嗜みとされており、リラを弾けることはリベラル教育の証でもあった。そのため少年時代から音楽教育も受けたのである。学校で読み書きを教わり、その後楽器を携えて音楽の学校へ行き、楽器奏法を習った。まず楽器の奏法を覚え、ある程度弾けるようになると詩人の作品を教わった (Freeman, Kenneth John, & Rendall, M. J. "Schools of Hellas; an essay on the practice and theory of ancient Greek education from 600 to 300 B. C.",

1907)。

儀式、祭事、演劇などで音楽が奏でられるだけでなく、市民は普段からリラなどの楽器を嗜んだ。酒宴では第一部では食事を楽しみ、第二部では酒を嗜みながら座談や会話が交わされる。そのさい、神々に対する儀式が行われ、笛の演奏が伴ったという。リラが手から手へと渡され、サフォーやシモニデス等の詩を歌い、座談を楽しんだ。紀元前4世紀に哲学者プラトンが創設した学園アカデメイアでも、師弟とともに飲食をしながら真剣な談義をする饗宴 (シュンポシオン) がよく開催されていた。単なる酒宴ではなく教育的効果を持たせるため、会話、飲食、音楽の順序が定められていたのではないかとする説もある (廣川洋一著『プラトンの学園アカデメイア』講談社学術文庫、1999年、p.130)。

プラトンがなぜ音楽を重視したか、それは紀元前5世紀の数学者ピュタゴラスに端を発する。ピュタゴラスは8度、5度、4度の協和する音程が単純な周波数比で成り立っていることを発見し、後世の哲学者や天文学者などに大きな影響を与えた。プラトンもその一人で、学園アカデメイアでピュタゴラス派のカリキュラムを取り入れた。それが、自然の創造物を数によって解き明かす4学科 (数学、幾何学、天文学、音楽) であり、これに弁証法が加わった。この場合の音楽とは、調和 (ハルモニア) の理論であり、調律によって協和する音を生み出すように、肉体と精神を調和させることが人間形成において必要だと説いている。

なおアカデメイアでは音楽を含む数学諸科を予備学問として、17～18歳まで自由に学習するようにカリキュラムを組んでいた。そして20～30歳で諸学を総合的に見る視点を磨き、30～35歳で哲学的問答を通じた学びを経て、50歳までに公務に就き、それ以降は選ばれし少数の者がアイデアに達することを理想とした。

また道徳・倫理教育などにも音楽は使われていた。たとえば悲しみを表現する混合リディア調か高音リディア調はとりわけ男子には排除す

べきとし、またイオニア調は柔和で弛緩した調べとして酒宴用だと見なしている。一方、勇敢さや節度といった性質を表すのはドリア調やフリギア調で、勇敢な戦士や運命に毅然と立ち向かう人にふさわしいとした（プラトン著／藤川令夫訳『国家』岩波文庫、1979年、p.232～234）。戦が隣合わせにあった古代ギリシア社会を象徴しているようだ。プラトンの弟子で万学の祖と言われるアリストテレスはより柔和な音楽を好み、リディア調を「教育上好ましい」としている（前掲書“Schools of Hellas” p.242）。このように音楽は、古代ギリシア特有の道德観念と結び付けられた一面もある。さらに「フリギア調で奏でる笛の音は心を癒す」など、音楽療法の考え方もあった。

やがて数学、幾何学、天文学、音楽（数学に関わる4科）は、文法・修辭学・弁証法（言語に関わる3科）とともにリベラルアーツに組み込まれた。これを自由七科ともいう。ローマ帝国崩壊後、リベラルアーツはカトリック系修道院を通じてヨーロッパ各地に広まり、9世紀にはフランク王国カール大帝の命によりさらに広域へ普及した。この大帝が招いた学者が高等教育の基礎、つまり教養学を作ったと言われる。それが典礼聖歌を学ぶことと、リベラルアーツを学ぶことであった。

音楽の主要教書として、6世紀の哲学者ボエティウスによって著された『音楽教程』が中世まで読み継がれた。原本には声楽に関する解説が少ないが、各時代に合わせて注釈や図解が加えられていき、後にはローマ・カトリック教会の典礼聖歌を学ぶための音楽書とされた（Inscribing Sound: Medieval remakings of Boethius' s “De institutione musica” Elizabeth A Mellon, University of Pennsylvania, 2011）。ボエティウスは音楽を「ムジカ・ムンダーナ（宇宙の音楽）」、「ムジカ・フマーナ（人間の音楽）」、「ムジカ・インストゥルメンターナ（器具の音楽）」の3種類に分けて論じた。「人間の音楽」では、精神と肉体を融合するのは調和の力であるとして、プラトンやアリスト

テレスの思想を踏まえている。また真の音楽家とは、実践的な演奏技術よりも、観念的・理性的に音楽を理解している人だとした。これは古代から中世にかけて支配的な考えであった。

中世では、音楽を大学教養課程として学んだ

中世になると、1018年ボローニャ大学を始めとしてヨーロッパでは大学が次々に創設された。リベラルアーツ、すなわち自由七課は学芸学部（または人文学部、教養学部）となり、上位3学部（神学部・医学部・法学部）へ進学するための基礎教養として必修となった。これが中世大学の学修モデルとなる。

1410年ライプツィヒ大学の資料によれば、学芸修士履修科目として数学の中に音楽が含まれており、ヨハネス・デ・ムリスの著書が教材となっている。14世紀の数学者・天文学者ムリスの著作にはアルス・ノヴァの記譜法について論じた『計量音楽の書』『ボエティウスに基づく思弁的音楽』などがあり、いずれかが教科書として指定されていたと考えられる。カリキュラム全体としては「七自由学芸がふえており、全体としていっそう均衡のとれたものになっている」（チャールズ・ホーマー・ハスキンス著／青木靖三・三浦常司訳『大学の起源』八坂書房、2009年、p.198～199、p.205～207）と見られるが、音楽に着目すれば理論のみで履修期間も1か月足らずと短かった。つまり中世においてもリベラルアーツとしての音楽は、歌や楽器演奏などの実技ではなく、音楽理論に限定されたものだった。（2015年5月29日掲載分）

2. 近代では、音楽を専門&教養教育として

ドイツからアメリカへ渡った音楽教育

近代の大学でも音楽が教えられていたが、その内容は中世の大学とは異なる。それはある思想の大転換と関わっていると考えられる。ヨー

ロップ大陸では14世紀～15世紀半のルネサンス、17～18世紀の啓蒙主義や科学の発達を経て、神を中心としたキリスト教的世界観から、人を中心とした世界観への変容を経験した。こうした啓蒙思想を積極的に取り入れる新しい種類の大学が各地に登場し、学問的中心も神学部ではなく、新しいカリキュラムの導入が行われるようになった。

その一つ、1737年に創設されたゲッティンゲン大学では「教育の自由」を掲げ、教会からの思想的な影響を受けることなく、独自の裁量によって科学的研究と教育が行われていた。この大学で1772年より、音楽学者ヨハン・ニコラウス・フォルケルが私的にではあるが和声の講義を始めている(“Forkel Johann Nikolaus” musicologie.org)。数学でもない宗教でもない、音楽を実践するための音楽理論と演奏技術がドイツの大学で学ばれるようになったのは、このフォルケルに拠るところが大きいだろう。あるいは彼に多大な影響を与えたJ.S. バッハか。フォルケルは啓蒙主義時代において、哲学者や歴史学者と同様に、文化人類史の中で音楽を捉え直した。「人間はどのように音楽を発見し、発展させてきたのか」、つまり人間が築き上げた文化とともに発達した音楽、という視点で捉え直したのである。そして音楽の発展を三つの時代に区分した。第1段階を先史時代における音とリズムの誕生、第2段階を古代ギリシア・ローマにおけるメロディの誕生、そして第3段階を16世紀以降のハーモニーと調性の誕生として、その頂点をJ.S. バッハとした(Vincent Duckels, Johann Nicolaus Forkel: The Beginning of Music Historiography, Eighteenth-Century Studies Vol.1, The Johns Hopkins University Press, 1968, p.283)。

同じころ、新大陸アメリカでの高等教育はまだ中世の延長にすぎなかった。1636年に米国で初めて創立されたハーバード大学は、英ケンブリッジ大学卒業生によって設立されたもので、当初はイングランド式高等教育によってカ

リキュラムは厳格に定められていた。ピューリタンであった彼らは聖書を直接読むことに重点を置き、授業も朗読を繰り返すだけであった。しかし音楽の授業こそないが、カレッジ内の教会や日常生活の中に音楽は息づいていた。1808年に何名かの学生が集まってピエリアン・ソダリティと呼ばれる小さな室内楽団をつくった。これがハーバード＝ラドクリフ・オーケストラとして現在に至る。

なお偶然にも、世界初の音楽学士号は1464年にケンブリッジ大生に授与されており、その2世紀後に同大卒業生がアメリカに渡ってハーバード大を設立し、その2世紀後に全米初の音楽学科が生まれたのである。

ハーバード大でカリキュラム近代化・自由選択化へ

19世紀半ばになると、社会にも大学にも近代化の波が押し寄せる。ハーバードではベルリンやゲッティンゲン大学などドイツ留学経験のある若手教授を筆頭に、カリキュラムの大幅改革が声高に主張され始めた。さまざまな紆余曲折を経て、19世紀後半に自然科学、歴史、政治経済学を重視したカリキュラム近代化へと踏み出す。音楽学科が創設されたのも、その最中である。やはりベルリンで音楽を学んだジョン・ノウルズ・ペイン教授による貢献が大きい。彼は帰国翌年からハーバード大学の講師となり、1863年に楽式論と対位法・フーガの講義を受け持った(Spalding, Walter Raymond: Music at Harvard, A Historical Review of Men and Events, N.Y. Biblio Bazaar Coward-McCann, Inc., 1935, p.159-167)。当時の学長トーマス・ヒルは芸術の造詣深く、その後押しがあったとされる。1869年に学長就任したチャールズ・エリオットはカリキュラム近代化を強く推し進め、幅広い科目選択が可能になった。1871年には音楽が選択科目として正式認定され、音楽史、和声学、通奏低音、対位法、音楽史、音楽理論、作曲法、ソナタ・管弦楽楽式論、管弦楽法などが次々と科

目に加わった。1875年にペインは正式に専任教授となり、全米初の音楽学科長に就任する。この時点で音楽学科は19名まで増えた。

こうした経緯を経て、「作曲家または指導者になるべく音楽を専門的に学ぶ生徒」と、「教養として学ぶ一般学生」と、2段階で教えられるようになった。前者には和声学、対位法、声楽作曲、カノンとフーガ、オーケストレーション、自由作曲などを、後者には音楽史と音楽鑑賞を教え、後者の割合が増えていった。音楽の学び方が多様化した証であり、それが現在の大学音楽学科の原型となった。

この背景には、産業革命や商工業発展による富裕市民層の拡大など、社会の近代化がある。音楽や芸術を学ぶことが教養であるという意識も高まってきた。音楽が学問として体系的に学ばれるようになったのは、「豊かな生活の象徴としての音楽」という文化思潮が定着してきた兆しと言えるかもしれない。

これ以降ハーバード大学に倣い、全米の総合大学に音楽学科および音楽学校が付設されることになる。そして現在に至るまで、音楽が専門科目および教養科目として開講されている。

(2015年6月2日掲載分)

3. 日本では、音楽を専門および師範教育として

日本に西洋音楽を導入したのは

では日本ではどのように音楽が学ばれてきたのだろうか。奇しくもハーバード大学で音楽学科が軌道に乗り始めた頃、そのすぐ近くで、日本の音楽教育創生期に大きな役割を果たすことになる二人が知り合った。伊澤修二とメーソンである。

1879年(明治12年)、日本の音楽教育に関する調査研究・教員養成を目的として、文部省に音楽取調掛が設立された。その御用係となる伊澤修二は、1877年にアメリカのニューイングランド・ノーマル・ミュージカル・インスティテュートの夏期学校に参加した。そこで米音楽教育家ルーサー・ホワイティング・メーソンと知り合い、のちに日本政府雇外国人教師として取調掛に迎え入れることになる。彼が愛用していたピアノとともに。

1883年より、取調掛では専門教育および師範教育のための伝習生(学生)を募った。創設当時は伝習期間1年であったが(前半はピアノと



楊州周延『欧州管絃楽合奏之図』(1889年、神戸市立博物館蔵)

唱歌、後半は音楽教育実習)、欧米の音楽学校制度を研究し、4年制カリキュラムへ移行した。そして修身(教育勅語発布から第二次世界大戦終結まで続いた当時の道徳教育を指す)、唱歌、洋琴、風琴、箏、胡弓、専門楽器、和声学、音楽論、音楽史、音楽教授法の科目履修が義務付けられるようになった(東京芸術大学音楽取調掛研究班編著/浜野政雄・服部幸三監修『音楽教育成立への軌跡』音楽之友社、1976年、p.27)。

中でもピアノに最大の比重が置かれ、4年間全学期においてピアノ実習が行われた。1年次にはバイエル、2～4年次には「ウルバヒ」(Karl Urbach)という教則本が使われていた。このウルバヒ教則本を日本に紹介したのは、1878～1881年にニューヨーク州ヴァッサー女子大学音楽科に留学し、後に日本初の本格的なピアノ教授となった瓜生繁と見られている。内容としては、ハノンの指訓練から始まり、民謡、クラーマーなどの小品、クーラウ、クレメンティなどのソナチネ、和声学の簡単な解説と用例、カデンツの形成法、コラルの楽節、シューベルトの歌曲、モーツァルトやウェーバーのオペラからの編曲、連弾などが含まれていたようだ。明治時代に、このような多角的に音楽を学ぶ教則本も存在していた。

その後瓜生は病欠となり、その代講をした奥好義はのちに『洋琴教則本』を上梓し、それがのちに東京音楽学校初期の教材として用いられるようになった。これはバイエル第1～106番、簡単な楽典、民謡の小品をまとめたものである。恐らくこれが契機となり、その後長らくバイエルがピアノ教則本の中軸をなすことになったと考えられる。

近代から現代へ至る歴史の中で

1887年に音楽取調掛は東京音楽学校へ改組し、伊澤が初代校長に就任した。東京音楽学校は本科・師範科に分かれ、本科は修業年限3年で、ピアノを含む器楽部は、修身、器楽、唱歌、器楽合奏、音楽理論、音楽史、国語、英語また

は独語、体操で科目構成されていた。師範科は全国小学校の音楽教員養成のため特に唱歌教育に力を入れ、その伴奏として使われたのがオルガンやピアノであった。本科入学試験では、ピアノ専修受験生はソナチネアルバム第1巻のソナチネまたは簡易なソナタ、師範科ではバイエルが課されていた(職業指導研究会編『音楽家になるには』良国民社、1933年、p.49～57)。またこの音楽学校で幸田延に師事し、日本人女流ピアニスト第一号と称賛されたのが久野久である。彼女は1918年にベートーヴェン作品で演奏会を開いて成功を収め、その後国費留学生としてウィーンへ派遣されるが、エミール・フォン・ザウアー教授に基礎をやり直すよう指摘されたことを苦に自死した。しかし教授は、ここまで日本人がピアノを習得したことに驚いたともいわれる。

明治時代の欧化政策、大正時代の自由主義的な雰囲気の中で、西洋文化も親しまれた。留学先や理論書などの教材入手先は、次第に米国からドイツが主流となった。日本に西洋音楽が輸入されて50年が経つ頃には、私立音楽学校も何校か開校され、学習者も増えていたようである。そんな中、10代前半で渡仏した原智恵子はパリ国立高等音楽院を首席で卒業し、1933年に帰国後初のピアノ独奏会を開いている(1937年にはショパン国際コンクール日本人初入賞15位)。しかし同年、日本はドイツとともに国際連盟から脱退し戦争の道を突き進み始めることになる。そして戦時下においては“文化指導”の名の下に国粹的な文化統制が行われ、西洋文化排斥運動も起きた。クラシック音楽は同盟国ドイツのものが主であったため、英米言語・文化ほど排除の対象にはならなかったが、自粛を余儀なくされた。



戦後はふたたび、多様な芸術文化が戻ってきた。1949年には東京音楽学校と東京美術学校が統合され、東京藝術大学が設立された。このとき、楽理科なども設置されている。以後音楽の高等教育は、同大をはじめとする諸音楽大学を主な担い手として行われてきた。西洋音楽の探究や習得のために重ねられた不斷の努力によって、ピアニストなど多くの優れた演奏家や作曲家を生み出した。

日本に西洋音楽が導入されて100年が経つまでには、主要国際ピアノコンクール入賞者も現れ、1950年代は田中希代子、1960～1970年代は中村紘子、内田光子、野島稔、海老彰子の各氏等、日本人が優秀な成績を収めている。また学習者や愛好者の急増にともない、楽器の製造数や教材の種類も増えた。現在はピアノ学習者人口だけでも100万を超えと言われる。

社会における音楽のあり方も年々多様化し、近年では新たな試みも出てきている。たとえば東京芸術大学では映像芸術・舞台芸術までを包括した総合芸術大学への改革、修士・博士課程において音楽学から音楽文化学への改組、音楽音響創造研究分野・芸術環境創造研究分野の設置、社会連携センターの設置・整備など、より幅広い社会的文脈の中で音楽を捉える試みがなされている。他の音楽大学でも新しい動きがみられる（参考：菅野恵理子執筆「大学カリキュラム編」『今こそ音楽を！』2015年、第5章）。

あらためて日米の高等教育機関での音楽教育創成期を振り返ると、アメリカでは“専門と教養”、日本では“専門”（演奏と師範）という2段階で教育がなされていた。今後日本でも“教養”の要素が広がっていくかもしれない。

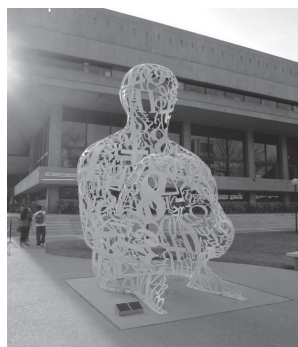
大学教養教育に音楽を取り入れる新たな動きも

ここで、総合大学における教養教育の経緯を見てみよう。戦後アメリカに倣い、「民主的市民の育成」を目標として大学に教養教育が導入された。が、経済界などから専門教育重視の要

請が強まり、1970年代には教養教育の形骸化が叫ばれるようになり、1991年大学設置基準の大綱化によって、一般教育（教養課程）の履修区分や単位数規定が廃止された。これによって教養課程の解体が急速に進んだとされる（参考：日本学術会議著『21世紀の教養と教養教育』2010年、p.10～11）。

成長社会から成熟社会へのグローバルな変化の中で、教養教育の重要性も見直され、最近ではその一環として音楽・芸術科目を取り入れる動きもある。たとえば慶応義塾大学では合唱や弦楽などの授業が開講されている。また東京音楽大学と上智大学には単位互換協定があり、東京音大生は上智大の教養科目を、上智大生は東京音大の音楽科目を履修できる。従来からミッション系や教育系大学で音楽を学ぶ機会があったが、教養教育として広く全学生に開講されている大学はまだ少ない。現在は約780大学中の数校～十数校かもしれないが、将来的にこのような学びが増えていくのではないだろうか。大学間の単位互換やコンソーシアム（複数の組織や企業で成り立ち、共通の目的のために資源を共有したり活動する団体）もその一助となるだろう。音楽資源を学生全般の教養を高めるために生かすことは、考え次第でいくらかでも広がる可能性を秘めている（参考：菅野恵理子執筆「本質を問う力」『今こそ音楽を！』2015年、第1章第3回）。

米国では文理問わず、すべての学生に教養課程は必要であるという考え方だ。ここに世界トップの科学技術系大学、MIT マサチューセツ



MIT キャンパスにあるモニュメント

ツ工科大学の理念をご紹介したい。

「MIT の強みは科学技術界のために創造性とイノベーションを育むだけでなく、科学や技術が生まれる土壌、すなわち社会文化環境をより豊かにしていくフロンティア的存在でもある。世界の難題に立ち向かうには技術や科学的創造力に加え、文化・政治・経済活動を営む人間そのものの複雑さに対する理解が必要である」(Massachusetts Institute of Technology : 2013-2014 Bulletin for the School of Humanities, Arts, and Social Sciences)。

未来社会創造の一担い手として、科学と人間理解を等しく尊重していることが伺える。MIT では 1865 年創設時から人文・社会科学の重要性が言われ続けており、1930 年代には人文学部が設立され、1980 年代後半から芸術科目が増えはじめ、2000 年代には人文学・芸術・社会科学学部へと名称変更された。音楽・芸術が教養科目として開講されている様子はこちらをご参照頂きたい(参考：菅野恵理子執筆「文脈を読み解く力、創る力」『今こそ音楽を！』2015 年、第 1 章第 2 回)。

アメリカでは“STEM (Science-Technology-Engineering-Math)”と呼ばれる理数系科目に力を入れる政策もあったが、これに対して、Arts を加えた“STEAM”にすべきとの政策提言が多くなされた。「人間とはなにか」という根本理念は、どの時代も変わらないはずである。

(2015 年 6 月 12 日掲載分)

4. 民間が担ってきた教養としてのピアノ学習

現在音楽は広く日本全国で学ばれ、親しまれている。音楽の中でも学習者人口最多はピアノであり、今でも習い事ランキング第 1 位、または上位に挙げられることが多い。専門家だけでなく、教養や趣味としてのピアノ学習が普及した証である。戦後これを先導したのは民間であった。

ピアノの普及に伴い、1954 年にはヤマハ音楽教室(前身：ヤマハオルガン教室)、1956 年にカワイ音楽教室、1966 年には全日本ピアノ指導者協会(前身：東京音楽研究会)……と、ピアノ学習環境が急速に増加し、整備されていった。また教材・教則本研究も進み、バイエルその他、フランスのメトードローズ、アメリカのバスティン・ピアノメソッド、日本の miyoshi メソッドなど、開発者の個性や特徴を生かした教材が普及した。また海外からの演奏家・指導者の来日増加、国内外コンクールの増加など、いずれも日本のピアノ業界拡大普及に果たした役割は大きい。

その中で全日本ピアノ指導者協会(ピティナ)の活動は独特で、中長期的に指導環境や学習環境を整えることで、自ら指導力研鑽や演奏水準の向上に繋がるように導いた。このような学習環境整備は、どのように一人一人の指導者・学習者の内なる力を引き出してきたのだろうか。

環境の変化によって、つながり支え合う指導者たち

セルフ自己啓発の時代

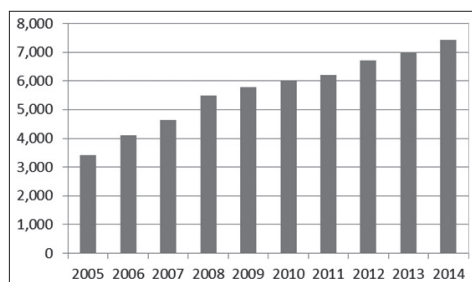
ピティナは当初邦人作品普及のために設立されたが、日本全国のピアノ指導力研鑽を目指し、1977 年にピティナ・ピアノコンペティションを設立した。また指導者賞授与、指導者検定やセミナー開催、指導者海外研鑽ツアーの実施等を通して、指導者が自ら自己啓発する機会を増やしていった。指導者の全国ネットワークも着実に拡大し、支部活動による地域連携も増えたが、1990 年代頃まではまだお互いに繋がりがあっている感覚は薄く、「セルフ自己啓発の時代」であった。

コミュニティ協同啓発時代

1997 年から始まったピティナ・ピアノステップ実施のためのステップ・ステーション設立は、ピアノ指導者にとって新たな章の始まりであった。都市単位の緻密なネットワークが構

築され、地元指導者がお互いに協働し、学びあう場が増えた（ピティナ・コミュニティ）。そしてステップ実施にあたり、ピアノ指導者であるとともに、演奏者、編曲者、広報・企画者、運営者……と、何役もの役割をこなすようになった。またIT普及に伴い、地域を超えた同志のコミュニティも生まれている。

また生涯学習の広まりに伴い、ピアノにおいても継続学習（下図）が盛んに推奨されるようになる。学習の軌跡と成果を記録に残すことで、自己成長を促すようになった（ステップ・パスポート）。コンクールのような相対評価ではなく、絶対評価が新たな学習動機となったのである。



継続参加賞発行数

さらに最近ではソーシャルネットワークが汎用化され、個人個人がより有機的に交流するようになり、お互いに学び合うだけでなく、支え合う機会も増えた（ピティナ CrossGiving、寄付実績）。コミュニティの範囲は地元だけでなく、同じ志を持つグループであったり、ともに未来を迎える音楽界であったりと、確実に広がっている。

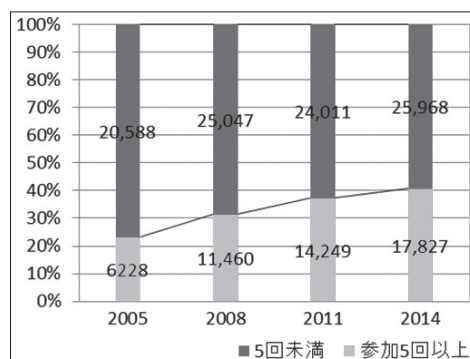
コミュニティ協同開発時代へ

成長社会から成熟社会へ移行した日本では、これからピアノや音楽を学ぶ人がさらに増えていくだろう。ピアノを専門的に学ぶだけでなく、趣味、特技、または教養として学ぶ人が増えると、指導者に求められる能力や資質も高度化・多様化すると考えられる（2015年度より指導者ライセンス制へ移行）。また今後は地域連携のみな

らず、多様な分野や領域とのコラボレーションも緩やかに増えていくだろう。今あらためて音楽資源が持つ価値を見直し、社会の中で何ができるのかを考えたい。

学習者環境の整備によって、動機づけが変わった

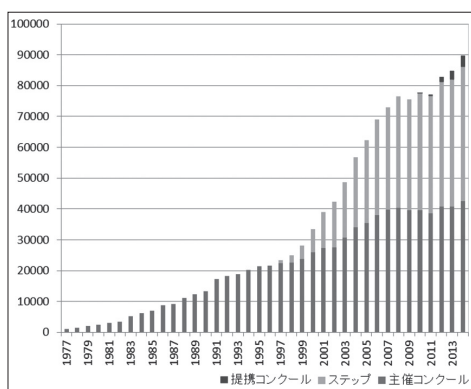
指導環境に加えて、学習環境の整備が進むと、学び方そのものが変わっていく。たとえば地域コミュニティインフラの整備により、全国各地500か所以上でステップが開催されている現在、継続学習の習慣（下図 ステップ参加5回以上のグラフ）が定着するようになった。また他県・



ステップ参加5回以上の参加者の比率

他地域への参加、楽器、ホール、アドバイザー（2014年は520地区にアドバイザー1,769名が派遣）、トークコンサート有無（2014年度は233地区）などによる参加地選択、ご当地シールの収集など、ステージ演奏だけでなく、その周辺要素に対する関心も高まっている。「より自分らしくステージを楽しみたい」という気持ちは、プログラム構成にも現れており、最近ではフリープログラムを選択する参加者が増えている（フリーステップ比率：2005年21.6%→2014年45.0%）。

その背景には、学術情報インフラの拡充がある。たとえばピティナにはピアノ曲事典のほか、研究レポートや記事が多数寄稿されている。また音楽を含むさまざまな分野において、学術研究が日々公開されるサイト（アカデミア・エデュ等）、オンラインで授業が受講できるサイト（コー



コンペ・ステップ・提携コンクールの参加者数

セラ、カーン・アカデミー等)もある。いつでもすぐに学術情報にアクセスできると、思考の幅が広がる。「今何が必要で、どんな資源があって、自分の能力でどこまでできるのか」といった問いから、新しい価値観が生み出される。

また公開録音コンサートでは、「今まで弾いたことのない曲を、どのように興味深く聴いてもらえるか」という命題を演奏者各自が考えるようになり、プログラム構成にもさまざまな工夫がみられるようになった。「まだ録音されていない音源を弾く」という事業方針に加え、公開演奏のアーカイブ化、ピアノ曲情報網羅化というインフラ整備が、それを支えている。

音楽環境はどんな学びの変化をもたらしたか

学習者にとって、かつてステージは限定されたものだった。1990年代までは年1～2回の教室発表会、またはピアノコンクール出場が主な公開演奏の機会であった。しかしピティナ・ピアノステップの誕生により、ステージはすべての人に開かれるようになった。またピアノコンクールも新人登竜門的な意味合いから、継続的な学習機会として活用されることが多くなったといえるだろう(上図)。ステージはオンライン上にも開かれ、YouTubeに演奏動画を公開して、世界中からアクセスが集まることも最近では珍しくない。

さらに、“日常にステージ”という時代が到

来しつつある。たとえば個人宅サロンや職場で、家族、ご近所、同僚などを集めたコンサートなど、生活の場がステージに代わることも増えるだろう。そんなとき、楽器を演奏する力があれば、いつでもソロやアンサンブルを始められるのだ。まるで古代ギリシアのシュンポシオンや、ロマン派時代のサロンのように。今は、誰もが芸術の創り手になりうる時代なのだ。

(2015年6月19日掲載分)

5. 専門と教養が融合するとき～ 数学教師&ピアニスト・金子一朗 さんインタビュー

古代ギリシア・ローマ、中世まで、音楽は数学とともにリベラルアーツとして学ばれていた(参考:菅野恵理子執筆「古代・中世では音楽を教養として」『今こそ音楽を!』2015年、第2章第1回)。両科目に共通することはなにか、あるいは音楽でこそ学べることはなにか? ピアニスト・数学教師である金子一朗さん(2005年特級グランプリ)に、両者に深く精通している立場からお話を伺った。「なぜ音楽が教養となるのか」を考える機会になれば幸いである。



音楽と数学は何が似ているのか?

(1) 構造が似ている

数学と音楽の体系はほとんど同じだと思います。まず「分野としての構造」、そして「分野を身につけていく過程」、さらに「歴史的変遷」、この三つに集約できると思います。

小中学校で勉強する幾何学(図形の性質を求める学問)は、古代ギリシア時代に相当深く追究されています。皆が無条件で成立を認める公理(平行な二直線は交わらない、等)に基づいて作

られているため、論理的にきちんとした構造になっています。測量などに用いる実用性の高い定理が発達した一方で、古代ギリシア特有の美意識に基づいたもの、図形の美しさからくる諸性質・定理（後の時代に作られた九点円の定理などに類するもの）を追究していく側面もありました。日本も江戸時代を中心に、和算という形で数学は独自の発展をし、美しい図形の問題を作って神社に奉納する算額という習わしがあります。

その後、幾何学は歴史的に進化を遂げ、16世紀頃から座標軸上に図形を配置して計算によって結果を出す解析幾何学、さらに19世紀頃には解析幾何学を内包しつつ発展したベクトルを用いた幾何学が誕生しました。19世紀末には集合論が編み出され、今やこの概念なしに語れる分野はないほど我々の思考に深く根ざしています。

古代ギリシアの数学は、それ自体を内包しながらより高度な処理や論理が使えるように発展していった、つまり前の機能を持ったまま拡張されていきました。これを数学の一つのモデルとしましょう。

音楽には「演奏する」「作曲する」という二つの大きな行為があります。たとえば作曲行為に用いられた音は、ヨーロッパの中世までは自然倍音の第4倍音までで、最初は単旋律、後に平行オルガヌムが4度、5度進行するようになりました。ルネサンスになると第5倍音が使われるようになり、3度の出現によって和音が豊かになりました。バロックになると第7倍音まで、古典・ロマンになると第11倍音まで、さらに近代のスクリャービン、ラヴェルなどになると第13倍音くらいまで増えていきました。その後、調性が崩れていくことになります。

和音の個数や連結の仕方、旋律のつながり方、調性にも各時代特有の方法があります。中世・ルネサンス時代には教会旋法がいくつかあり、バロック時代にはそれが長調と短調の2種類に集約され、ロマン派後期から近代にかけて教会旋法がまた復活し、さらにスクリャービンに端

を発し、メシアンによって体系化された移調の限られた旋法などの新しい人工的な旋法や、シェーンベルクなどによる12音技法などが出現しました。

また古典派の和音の種類や連結の仕方は大体決まっていて、VのあとはIかVI、IIのあとはV、カデンツ……そのような構造を一つの文として、和声フレーズがいくつか組み合わせられて全体を作っています。数学の公理と同じく、和音連結のルールもその時代の美意識であり、誰もが認めるものです。

近現代になるほど和音や楽器の種類が増え、音域も広がり、複雑化しているとはいえ、おおむね前の時代の作曲語法を内包しつつ拡張されています。数学も音楽も、全員が認める何かを見出し、そこから性質を作り拡張していくという流れは同じです。それが古代ギリシア時代に音楽と数学が同じカテゴリであった理由ではないでしょうか。

(2) 学習のプロセスが似ている

数学を学ぶプロセスと、作曲や演奏ができるようになるプロセスも似ています。

小学校の算数はつるかめ算、流水算、旅人算など、身近にある素材を使って問題の答えを見つけていきます。中学校の数学では方程式が登場し、それらがすべて一発で解けるようになります。

ピアノの演奏を考えてみると、子どもは理屈なしに小品を1曲ずつ暗譜して弾いてしまいます。しかし段々と規模が大きくなり、複雑かつ多様な様式の曲を勉強するようになると、どこかで限界が訪れます。そこで統合的にまとめて一通りに処理できる“方程式”の登場です。ピアノでいえば技術と作曲語法ですね。作曲語法は、誰もが美しいと感じる定理と組み合わせ方のパターンがあり、音の連結の仕方（限定進行音、禁則など）、楽式論（二部形式、ソナタ形式など）、旋律の組み合わせ方（対位法など）など、作曲家はほぼ例外なくそのルールに従って作曲してい

ます。

一つ一つの曲を独立して演奏できるようにするのは算数の数ある計算法で答えを出すことに似ています。でもバッハの平均律にしてもベートーヴェンやショパンの作品にしても、「こうきたら次はこうなる」という一定のルールがある。例外はありますが、ルールが分かれば自動的に流れが見えてきます。直列的に音楽史上の変遷を見ていくと、同じ時代の中にもあります。ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェンなどは同じ潮流の中にいるので、ソナタ形式の構造を理解すれば、同じような処理ですべて弾けるようになります。算数の計算法から数学における自動的な処理の変化に似ています。

そのことに気づいたのは大学3年生のときです。自分が音楽的に弾いているつもりの表現が、果たして正しいのか、どこにその根拠があるのか、どういう規則で音が配置されているのか、それらを知りたくって作曲語法を勉強始めました。あとづけであろうと、何で美しいかを論理的に説明できるようにしたいのです。今でも一晩のリサイタルの分量であれば、仕事の合間でも2か月で暗譜できます。語法を知っているのです、記憶する部分は極めて少ないからです。

(3) 歴史的変遷が似ている

音楽でいえば楽器の変遷、数学でいえば機材の変遷が、学問自体を変えていきました。

数学ではさまざまな記号を駆使して処理して



ツィンバロン（画像：wikipedia より）

いくのは19～20世紀初頭までで、その後自動計算器が発明され、戦後にはコンピュータが発明されました。それが数学の思考自体を大きく変えていったのです。コンピュータの計算処理能力が上がり、金融工学、物理学、経済学関連、軍事産業、オペレーションズリサーチ等、多分野に対しての応用性が出てきました。

ピアノの本質的な響きの感覚はここ100年ほどあまり変化していませんが（最近ピアノ会社ファツィオリは4本ペダルで新たなモダンピアノの可能性を追究していますが）、その前は劇的に変化しています。ピアノの原型となった鍵盤付きの楽器の一つはチェンバロで、プサルテリウム、ハープ、リュートなどの撥弦楽器から生まれました。引っ掻く動作を自動化したもので19世紀初頭くらいまでは実用的な楽器であり、たとえばベートーヴェンのソナタだと第15番までは「フォルテピアノまたはチェンバロのためのソナタ」という副題がついていました。そのあとにチェンバロとクラヴィコードなどが融合した形で生まれたのがフォルテピアノで、打弦楽器ツィンバロン（木琴や鉄琴のようにパチを叩いて弾く）に鍵盤をつけて自動化したようなものです。それによって強弱が表現でき、同時に出せる音も増えました。クラヴィコードもタンジェントで弦を叩いて音を出しますが、チェンバロとは根本的に構造が違います。

1800年からの100年で鍵盤楽器は劇的に変化を遂げ、音楽の姿もどんどん変わっていきました。リストやドビュッシー、ラヴェルの音楽がバロック時代にあるとは考えられません。楽器の変化によって音楽も変化しているからです。これは、数学の計算処理能力の変容によって学問体系そのものが変化したのと似ています。

今では古楽器研究者が当時の文献を紐解き、楽器や演奏法の検証を行い、それがスタンダードとして理解されるようになりました。この10年ほどで、当時の楽器様式の響きをどうモダンピアノに反映させるかを考えながら弾く人

が増えてきました。個人的にはフォルテピアノ、チェンバロ、クラヴィコードも弾くのが好きで、そのニュアンスを可能な限りモダンピアノに反映させようとしています。(2015年6月23日掲載分)

全員が弾く時代に、音楽の何を学ぶべき？

昔はいわゆる「伝説のピアニスト」がいましたが、今は小学生でもショパンのエチュードを弾くようになり、演奏ができることの希少性がなくなってきました。弾くノウハウが体系化され、蓄積されてきている証でしょう。聴く側も体系化した学び方を知ると、弾く側に変わるのではないのでしょうか？ 皆で太鼓を叩きながら踊るという全員参加型の民族音楽のように、ピアノがまさに全員参加型の民族音楽に近づいていると思います。今日本中でアマチュアサークルがあり、ピアノ弾き合い会の後に飲み会をするんですが……楽しいですよ！ そうなると指導者がたくさん必要になります。今、歴史的な変わり目にきていると思います。

ただテクニックに関する部分は進化していますが、ピアノと一緒に、ソルフェージュや作曲語法までをきちんと勉強するシステムにはなっていないように思います。広義のソルフェージュとは和声や対位法などのすべてを含むものです。初歩の段階では聴音もありますが、その意味や、どう響かせると美しいのかを含めて考えると機械的なものとは程遠いですね。私は楽典を小学校4年で終えた後は音大の入試問題を解いていましたが、その先、作曲を本格的に学ぶには時間がかかりました。

文法の知識がないと高度な文章を読んだり話したりできないように、たくさんの音を用い、表現が複雑なピアノ作品は文法を知らなければ十分に表現できません。秋山徹也先生をはじめとする先生方は昔からなさっていますが、今楽曲分析などを勉強するのが潮流になってきているのは歴史的に自然な流れですね。

バロック時代までは、作曲と演奏は同一の行為でした。その後楽器の進化とともに演奏技法

に関心が移ってしまったので、これについてショパンは「ピアノを弾く時間と同じ時間だけ作曲を勉強しないと上達しない」と警鐘を鳴らしています。ショパンが活躍し始めた1830年頃といえば、演奏家と作曲家が分業になり始めた時代です。そして同時代のリストが活躍し始めてから第二次世界大戦までの約100年で、演奏家のエンタテインメント性が脚光を浴び、ホロヴィッツのように作曲・編曲できる人も現われました。一方フランス近代の作曲家やバルトークなどは、演奏者が自分勝手に弾くことを嫌っていました。ルービンシュタインなどは楽譜通りに弾き、かつ書かれていないけど作曲語法的に当然という部分はすべて表現している、まさに正統派だと思います。そのような二つの潮流が混ざりあう1960年代以降は、古楽器の復興もあり、時代様式や作曲語法を勉強して演奏に反映させることを学ぼうという機運が生まれました。

東京音楽大学のコンポーザー＝ピアニストコースなどは、まさにこれらを実現するものです。チェンバロなどの古楽器も学ぶと、バスラインから上の音を構築していくバロック、古典の作曲語法が分かるので、ロマン派、近現代はそれを拡張していけばいいわけです。和声法、対位法などの知識と実際の演奏が融合した形で、ヨーロッパの基本的な音楽構造と楽器変遷を体得できるでしょう。

音楽・数学・歴史・すべてを関連づけながら学ぶこと

私の勤めている早稲田中学校・高等学校の数学科では歴史の変遷を意識した授業体系になっていて、文系の学生に授業するときは「経済学ではここで使う」「この時代は産業革命が起こっていた」など、常にリンクさせることを意識しています。

数学や世界史など他分野も勉強して音楽とリンクさせてみると、理解が深まって記憶も定着します。作曲語法の理論書と数学の理論書は読

み解く上での基本的な構造は変わりません。アマチュアで凄く上手い方は、皆さん教養が豊かです。

私自身はピアノを弾くのに他分野の知識が生きていると思っていましたが、今では小さい頃からピアノをやっていたからこそ、音楽の体験が色々な分野の理解、更には学校教育の現場にも役立っているのではないかと考えています。双方向ですね。たとえばある作品を仕上げなくてはならない場合、いかに練習を効率化させるか、できない箇所を抽出して重点的に学ぶか、また根気強く勉強するか、物心がついたときに

はそのようなやり方をしていました。そういったことが色々な分野の勉強や教科教育に生きています。

中学や高校でも全教科を浅くてもいいからきちんとかなすことが大切だと思います。音楽教育も基礎教科としてしっかり学習し、その中にピアノも組み込まれていくといいですね。ピアノは一人で旋律も和音も勉強できる、大変良い楽器なのですし、他の分野の勉強にもこういった形で大変役立つのですから。

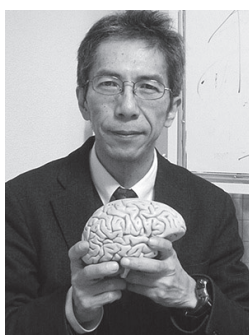
(2015年6月24日掲載分)

第3章

脳科学的観点から ～音楽は脳にどんな影響をもたらすのか

1. 「ピアノで脳の構造が良い方向に変わる」～脳科学研究者・澤口俊之先生インタビュー

「ピアノを習うと頭がよくなる」と昔から何となく言い伝えがあったが、昨今、科学の発達によりそれが実証されてきている。脳科学者として全国的に知られる澤口俊之先生（人間性脳科学研究所所長、武蔵野学院大学・大学院教授）は、「人生の成功に関係するすべての基礎がピアノで高められる」と力説する。人生の成功に関係する要因とは何か、それがなぜどのようにピアノで高まるのか、等々、豊富な実証データを挙げながら静かに熱く語って下さった。ピアノが持つ潜在力をぜひご覧頂きたい。



音楽は進化的に古いので、幼少期が重要

音楽や音声言語は進化的に古く、臨界期¹⁾があるので、幼少期から始めた方がいいですね。たとえば両眼視には4千万年の歴史があり、4～5歳が臨界期と言われています。たとえば幼少期に5年間片目で過ごした場合、その後ある程度能力を回復させることはできますが、訓練が困難になります。

音声言語に関しては進化的に400万年と言われ（200万年という説もあり。また現代文法を持っているという意味では10～20万年）、8歳、10歳、または思春期前が臨界期と言われています。

その流れで、音楽も進化的な要素が強いです。最古の楽器は3万年前の獣の骨で作ったフルー

トだと言われていますが、それ以前から音楽があるとされています。その根拠として、音楽がない民族は恐らく1、2民族しかありません（マンダ族は宗教上の理由でなぜか楽器を使わない）。絶対音感に関しては8歳、9歳くらいが臨界期です。ドレミ……という音高が正確に分かること、和音の中から個別音を聞き分けられること、この二つを伴って科学者は絶対音感と定義しますが、遺伝子を持っている人が8歳頃までに訓練を受けた場合に絶対音感を持ちます。つまり音楽は進化的に古いので、幼少期が重要であると言えます。

一方、文字言語は6,000年ほど（日本は3,000年）の歴史なので臨界期はありません。年齢とともに学習能力が低下するので時間はかかりますが、大人になってからでも習得できます。

ピアノでワーキングメモリがぐんと伸びる

実は、ピアノ演奏は驚くほど脳に良いのです。我々が幼少期で重視しているのはHQ＝人間性知能²⁾なのですが、一般知能gF³⁾がHQの中心的な脳機能であるワーキングメモリ⁴⁾と関連します。ワーキングメモリは問題解決能力、社会性、創造性など、人生の成功に関係するすべての基礎となります。これがピアノで伸びます。

ピアノが脳を発達させるという実証データはたくさんあります。たとえば学習塾、英会話、習字、スポーツ系など、ほとんどの習い事においてHQはほぼ変わりませんが、ピアノだけ突出して高いです（図1）。なぜピアノを習ったお子さんだけがこれだけ高いのか？ 私のピアノに関する研究はここから始まったのです。そこで小学生100人を対象に日常習慣的に何を

2) 前頭前野の脳間・脳内操作系が人間性をつくる。その能力を人間性知能 (Humanity Quotient)、略してHQと呼ぶ（前掲書 p.77 参照）。

3) 一般知能gFは、個別的なIQ（言語性IQ・空間性IQ、行為性IQなど）の上位に立つIQであり、HQの重要な役割の指数である。欧米で主に使われているIQ知能検査では一般知能を測る（前掲書 p.82、p.84 参照）。

4) ワーキングメモリはHQの中心となる脳機能。情報を一時的に保持しつつ活用して答えを導く働きがある（前掲書 p.172 参照）。

1) 臨界期は「EEE（進化的に予測している環境）において学習すべき事柄」を学習する際に決定的に重要な期間である。その期間は当然幼少期にあり、その期間を過ぎると、その事柄を学ぶことは不可能か非常に困難になる（澤口俊之著『「学力」と「社会力」を伸ばす脳教育』講談社＋α新書、2009年、p.37）。

HQと習い事(小学生低学年)

ピアノを習っている子どものHQが最も高い

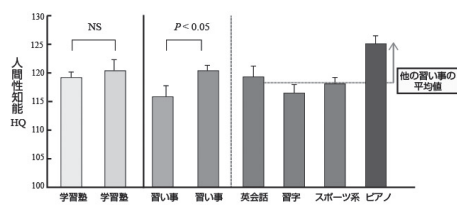


図1 HQと習い事(小学生低学年)

HQ発達に寄与する日常習慣(小学生)

ピアノ稽古がHQ発達に最もプラスに作用

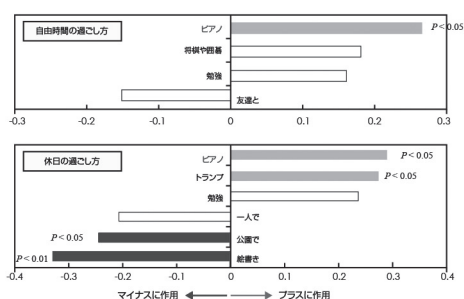


図2 HQ発達に寄与する日常習慣(小学生)

しているのいいのかを調べたところ、自由時間や休日にピアノを弾いているお子さんはHQが高く、プラスに寄与しているという結果が出ました。ピアノがトップです(図2)。HQはワーキングメモリ、一般知能、自己制御、注意力などを含んでいます。

またピアノは夢を持つことにも寄与します(図3)。夢を持って努力することはとても大事です。幼少期に夢を持っていると、大人になってから社会的に成功している人が多い。アメリカの研究では、大学生の頃に夢を持つと後に年収が高くなるというデータもあります。

2000年に発表された論文では「ピアノの稽古は問題解決能力(HQの要素)を向上させる」ことが証明されています(図4)。これは8～10歳の小学生を対象にしたヨーロッパの研究で、あるクラスにはピアノ、別のクラスには演劇のレッスンを1週間に1回行い、4か月後、8か月後にその経過を調べたものです。また

ピアノ稽古は「夢への努力(HQの主要要素)」にも最もプラスに作用

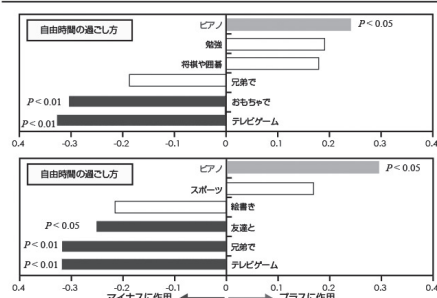


図3 ピアノ稽古は「夢への努力(HQの主要要素)」

ピアノ稽古は「問題解決能力(HQの要素)」を向上

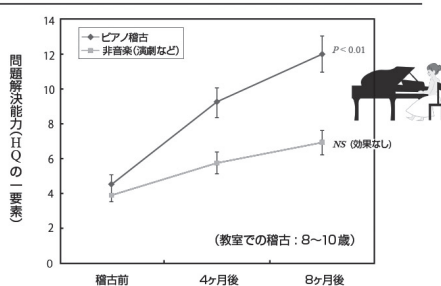


図4 ピアノ稽古は「問題解決能力(HQの要素)」を向上

さらに…ピアノ稽古は(HQ向上方法と同様に)一般知能gFも向上させる

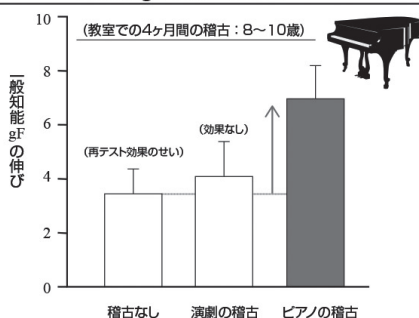


図5 ピアノ稽古は(HQ向上方法と同様に)一般知能gFも向上させる

2012年のヨーロッパの研究では、一般知能が本当に上がっていることが証明されました(図5)。IQテストは一度やると慣れるので再テスト効果で上がる傾向にあるのですが、ピアノだけがそれよりも向上しています。つまり偶然ではないということです。

おそらく、ピアノは両手で微妙に違う指の動きができることと、譜面を先読みして覚えてあと追いしながら弾くことが主な理由だと考えられます。片手で弾くピアノに同じような効果はなく、両手の動きがまったく違うヴァイオリンにはまだ明確な証拠がありません。

また、幼少期にクラシックを聴いて頭が良くなるというデータはほぼありません。モーツァルト効果についての研究論文(1993年)は、「モーツァルトのソナタ K.448 を聴くと空間性 IQ だけが数十分間あがるが、元に戻る」というのが本来の結果です。また大学生に毎日クラシック音楽を聴かせたところ、IQ は一時的に上がりましたが落ちてしまいました。

一般知能は、音楽を聴くと一時的には上がりますが、ピアノを弾くと恒常的に上がるのです。

(2015 年 7 月 29 日掲載分)

ピアノを習うと脳のワーキングメモリがぐんと伸び、それが人生の成功に関係するさまざまな基礎的要因と関わるという。では、なぜ一般知能が一時的ではなく、恒常的に上がるのだろうか……!?

ピアノで脳の構造が良い方向に変わる

ピアノの稽古をすると語彙が増えるという論文もあります。左右の脳を繋げる脳梁という神経束の一種がありますが、ピアノをしよう言語に関係する神経束(軸索)が5倍くらい太くな

ります。音楽家にとっても前頭前野や頭頂葉だけでなく、この脳梁は重要です。さらに平衡感覚や感情や思考に関係する小脳や、記憶に関係する海馬も、ピアノ練習時間の総量を増やせば増やすほど機能的に良くなるというデータがあります。本来脳は抑制と活性のバランスで動いているのですが、ピアノの即興をするときも前頭前野や頭頂葉がダイナミックに活動しています。これらは創造性や社会関係などに関係しています。つまりピアノによって脳の構造が良い方に変わるのです。科学的に実証されているものの中で、ピアノほど良いものはありません。

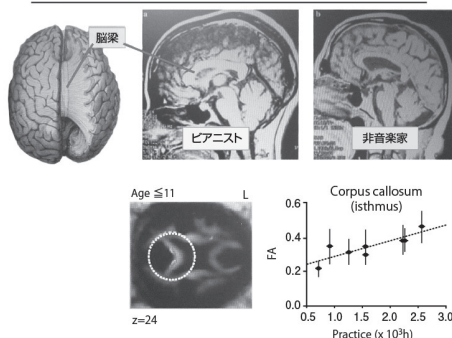
形としては、恐らく古典的な稽古の仕方がいいと思います。楽譜を見ながらではなく、ちょっと先を見ながら弾く、やがては見ないで弾く。これはワーキングメモリに相当負荷がかかります。この形を崩さないで通常の稽古をして頂きたいです。子どもは2~3年、大人でも6年くらい続けてほしいですね。

発達障害者や高齢者にも効果を発揮する

ピアノを弾くことで ADHD (注意欠損多動性障害) などの発達障害が改善されることも実証されています。以前重度の自閉症のお子さんを小学校の普通学級に入れたというご両親の希望を伺って、ピアノを提案したのですが、半年後には言葉が増えてきて、小学校1年生でまったく問題なくついていくことができました。そのときはピアノだけでなくもう一つの訓練もしたので、何が一番効果があったのかは分かりませんが、ピアノができるお子さんにはお勧めしています。もしピアノ教室に障害児のお子さんが来たら、ぜひ彼らを受け入れて頂きたいです。最初は5分間座って弾くところからでもいいんです。

また一般知能が高いと、環境適応能力が高いので不登校になりにくいです。そのような能力を鍛えるにもピアノが一番良く、二番目は算盤、サッカーです。脳トレの中には良いものもありますが、面白くないと長く続きません。ピアノは

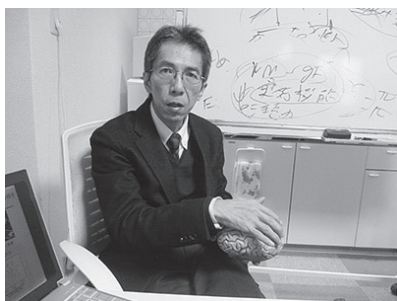
ピアノ稽古は脳梁を太くする



上達していく面白さがありますね。また高齢者でも6年間くらい楽器を演奏すると、衰退している部分の脳の大きさが保たれます。

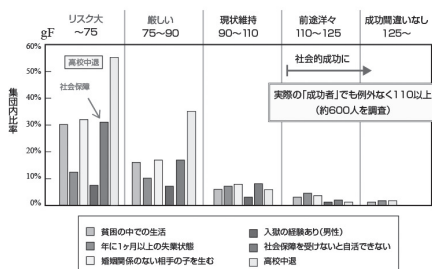
日本全体の一般知能が上がると、GDP も上がる

私は以前から、ピアノを小学校の必修科目にと提唱しています。開成中で1～2年生にピアノの授業があるというのは、ちょうどいいですね（参考：菅野恵理子執筆「創作を兼ねたピアノ指導」『開成中では全員がピアノを弾いている！』2013年）。まだ脳が変わる時期なので理に合っています。またピアノは空間性ワーキングメモリを鍛えるので、数学を解くための地頭を鍛える効果があります。



ピアノは脳を良い方向に変えるので、一般知能が高まると、勉強ができるだけでなく社会でも通用するでしょう。我々は勉強だけでなく、社会に出た後のことも重視しています。一般的に欧米では、欧米式 IQ が 110 以上で成功と言われています（ビルゲイツは 140）。日本人は子どもが 110 くらいで平均値が高く、東アジアが世界で最も高いというデータがあります。

欧米式IQ（一般知能gF）と社会的リスクとの関係



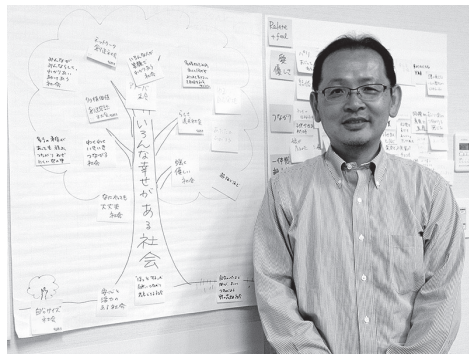
（アメリカのデータ@1998年）

一般知能は GDP とも関連します。たとえば全米各州の一般知能平均値と年収平均値は関連しています。Google では入社試験で一般知能テストを導入していますが、一般知能が高いと地頭がよく、環境にも適応できて、コンピュータ経験がなくてもすぐに習得できてしまう。他の企業もそのようになっていく可能性があります。日本全体の一般知能が高まれば、日本全体の GDP、国力も上がるでしょう。その方法論は色々ありますが、楽しみながら長く続けるには、くどいようですが（笑）ピアノが一番いいです。

（2015年7月31日掲載分）

2. 「美しいものの創造に関わる人は幸せ」～幸福学研究者・前野隆司先生インタビュー

ピアノや音楽を習っている人は「音楽をやっていて幸せ！」と感じる瞬間が多いだろう。ではなぜ幸せになるのか、音楽や芸術は人々の幸せや社会にどう貢献できるのだろうか？『幸せのメカニズム』の著者であり、幸福学の第一人者である前野隆司先生（慶應義塾大学大学院教授）は、幸福を体系的・科学的に解明し、人間社会システムデザインなどに応用している。音楽の価値をあらためて考えるために、その前提となる「幸せとは何か」についてお話を伺った。



幸福の四つの因子とは？

——ご著書の中に「幸福の形はさまざまだが、

その基本メカニズムは単純なのではないか」とありました。先生が提唱されている「幸福の四つの因子」について教えてくださいか？

「どうすれば自分が幸せになるのか」という問いに対し、経験知や思い込みではなく、客観的な統計的データをもとに、幸福になるメカニズムを考えました⁵⁾。この四つの因子が本来の意味で幸福に関連しているのではないか、という結果が導き出されました。

一つ目は「やってみよう」因子で、自己実現と成長に関わります。目標を達成している人、そのために努力や成長している人が持っています。たとえばピアノを上手になりたい、そのために努力しようとする人。また、目標や夢を持っているだけでも幸せです。二つ目は「ありがとう」因子で、繋がり、感謝、利他性などに関わります。友人を多く持ち、しかも多様な友人を持つ方が幸せです。また、社会貢献している人や他人のために何かしている人の方が、自分のために何かをしている人よりも幸せです。三つ目は「なんとかなる」因子で、前向きと楽観性に関わります。くよくよするよりも練習すれば何とかなるさ、といった前向きな気持ちを持てる人は幸せです。四つ目は「あなたらしく」因子で、独立性やマイペースに関わります。人と比較して勝ち負けを争うより、自分自身と闘ったり、自分の夢を追い求めることが幸せに繋がります。

目標や夢があって、それを信頼して支えてくれる家族や先生がいて、これはやれるぞと思って取り組み、たとえ他人の方が上手くても気にしない。この四つの因子をもっていると、自然に「幸せ」になろうという力がふわ～っと出てきます。そして幸せな人の周りには幸せな人が集まります。

ピアノを練習して上手になりたい気持ちは、

恐らく10～20代が強いですね。利己心は20代が一番高いのですが、それは「自分を磨こう！」という思いが強いから。その後は年齢とともに利他心の値が上がっていきますので、他の人に教えたりするようになります。人間が上手く幸せになるために一番の方法は、20代までに成長して、後継者に教えて、幸せな老後を迎えることではないかと思っています。

幸せになる方向に向かっているか？

——音楽やピアノを習っている人は主観的幸福度が高い印象があります。一方で、コンクールなどではどうしても他人との比較や順位にこだわってしまう面もあるようです。結果がどうであつても、そこから多様な価値を見出していくことが大事ですね。

実際に幸福度そのものに関係するわけではないのに、それを追い求めなければ幸福になれないと誤解している人は多いです。これをフォーカシング・イリュージョン (focusing illusion⁶⁾) といいます。目指す方向が間違っている (幻想である) という意味です。

たとえば負けたらすぐ気持ちを切り替えて、「いいことも色々あった」というのがスポーツマンシップの考え方です。パッと気持ちを切り替えられる人は幸せですね。逆に、順位にこだわり過ぎるからこそ1位になれないという面もあります。

失敗する人は人間的に成長しています。たとえば浪人生も1年間苦労すると、人間的に大人になります。何も失ってはいないのです。ピアノのコンクールも同じで、実は3位は1位よりも学ぶことが多いかもしれません。ちゃんと負けて学べば人生の勝ち組になれるのです。実は

5) 過去の幸福研究から、幸せに関連する項目を徹底的に洗い出し、それをアンケートにして日本人1,500人に回答してもらい、その結果をコンピュータにかけて多変量解析によって求めた四つの因子 (前野隆司著『幸せのメカニズム 実践・幸福学入門』講談社現代新書、2013年、p.112)。

6) ダニエル・カーネマン (プリンストン大学名誉教授・ノーベル経済学賞受賞者) が提唱した概念。「感情的幸福」は年収7万5千ドルまでは年収に比例して増大するのに対し、それを超えると比例しなくなる、などの研究結果を得ている。また経済学者ロバート・フランクによれば、お金・地位・順位など他人との比較によって満足を求める地位財と、健康・愛情・自主性など他人との比較に関係なく満足を得られる非地位財があり、前者より後者の方が長続きする (前掲書『幸せのメカニズム 実践・幸福学入門』p.63、p.70)。

ずっと勝ち続けた人の方が大変で、元五輪メダリストは普通の生活に戻るのに苦労している人が意外と多いので、新しい生き方を見つけてもらうためのカウンセリング方法を研究している方もいます（メンタルトレーナーのウルヴェ京さんなど。現在慶応大学博士課程在籍中）。

人は考え方によって二通りに分かれます。たとえばお金を持っている場合、こんなにお金は要らないとして寄付する人と、もっと金持ちにならないと不満だと思ふ人。幸せでない人は、いくらお金が集まってもまだ足りない、もっと欲しいと思うのです。また失敗したり辛いことがあったときに、その中から幸せの種を見つれる人と、自分はなんて不幸だと思ふ人に分かれます。ちゃんと気がつくかどうかですね。

本当は気がつけば、どんどん人は幸せになるようにできているのです。お金も大事ですが、人と人の繋がりも大事です。毎日少しずつ意識を変えれば幸せになれる。それを10年で3,600回近く変えていけば、かなり差がつくでしょう。

なぜ幸せの研究を？

——なぜ幸せの研究を始められたのでしょうか？

以前は機械工学科でロボットや触覚の研究をしていました。8年前に慶應義塾大学大学院にSDM ヒューマンラボ（システムデザイン・マネジメント研究科ヒューマンシステムデザイン研究室）を新設しました。文系・理系を超えて色々な問題を解くことは面白い！と思って始めました。

機械工学科にいた頃からロボットハンドの研究よりも、それが「そもそも何の役に立つのか？」をいつも考えていました。「つるつる、ざらざら」より、「それがなぜ心地よいのか、なぜ安心感が

生まれるのか」など、複合的な要素に興味が移っていきました。

人間が究極に求めるものは幸福です。これまで心理学者や哲学者しか幸福の研究をしていなかったのですが、私は工学として幸福を研究したかったのです。たとえばこのカメラを使ったらどんどん幸福になれるとか、幸福になれるピアノ教室とか……そのようなモノ・コトづくりの考えに思い至りました。文理融合なので、あらゆる幸せ研究をすることができます。たとえば経営者は「幸せな社会を創りたい」のにその方法が分からない。皆を幸せにするためにやっていたはずなのにその点が抜けていた。だったら“幸福の経営学”をすればいい。理系・文系・芸術すべて融合させて学ぶと、相互作用で皆の研究がどんどん進んでいきますね。

（2015年8月7日掲載分）

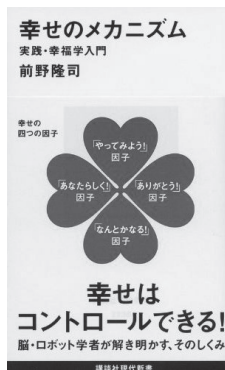
幸せのための「感動」を分析する

——研究室に「感動のSTAR」という張り紙がありますが、色々な感動体験や幸せを感じる瞬間が書かれていて興味深いですね。この研究内容について教えて頂けますか。

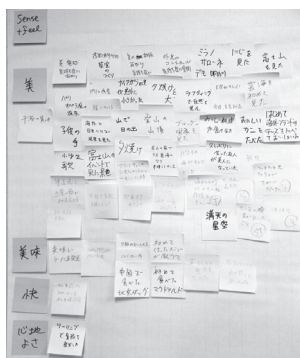
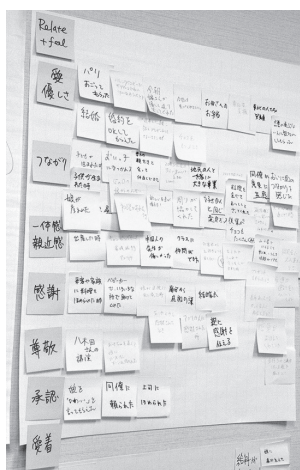
幸せのためには感動が大事です。そこで昨年私の研究室で「感動のSTAR分析」を開発しました。「SENSE」は感じること、「THINK」は理解、納得、発見したり、ただ感じるだけでなく自分で考えること、「ACT」は上達のために努力する、達成する、稀有なものに遭遇すること、そして「RELATE」は他人と繋がったり、愛情を感じる。四つの頭文字を取って「STAR」と名付けました。

脳の認知はまず何かを感じ（SENSE）⇒その結果何かを考えて（THINK）⇒その結果何らかの行動を起こし（ACT）⇒その結果複合的な愛や繋がりになる（RELATE）。だからこの順番なのです。すごく感動することは、四つの要素がうまく入っています。

音楽ならばまず美しさを感じる（SENSE）ところから始まります。たとえば「小学生の歌に



著書『幸せのメカニズム～実践・幸福学入門』（講談社現代新書）



写真上・下

皆に思いつくままに感動した体験を出してもらい、それを分類してこのカテゴライズを開発。STAR分析を用いた博士論文が今年2月に発表された(西尾未希、白坂成功、前野隆司著『STARフレームワークを用いた感動発想技法』日本創造学会論文誌 Vol. 18、2015年)。

感動した」という投稿がありますが、小学生がここまでできるという圧倒 (THINK)、小学生が積み重ねてきた努力 (ACT)、子どもとの繋がり (RELATE) などが複合して感動します。

またオーケストラのグループに入っていたり、音楽をしている人は成績がいいという研究もあります。幸せだとやる気が出るので成績も上がるし、本来の力が発揮できます。音楽をすると脳がよく働くというのも、STAR が満たされるからだと思います。

感動のメカニズムが分かってくたら、今度はそれを生かしたデザインをすることを考えています。たとえば「感動するピアノ教室」のデザインをするとしたら、SENSE と RELATE が足りなければそれを入れていく、等が考えられます。

現在大学院生の7割が社会人で、ベンチャー企業社長、経営者など多様なバックグラウンドを

もっているのですが、中にはプロのヴァイオリン奏者兼コンサート企画者として活躍している方もいます(清水有紀さん)。彼女は今のコンサートのあり方に問題意識を持っていました。聴衆との関係性があまり意識されておらず、お客様が本当に満足しているのだろうか。そこで演奏者の苦労話を披露したり、弟子が師匠のエピソードを紹介したり、師弟が共演したり、観客がステージに上がって歌うなど、従来のコンサートで欠けていた RELATE を高めるコンサートを実践しています。

美しいものの創造に関わる人は幸せ

ぜひお伝えしたいことがあります。美しいものを創っている人は幸せ、という幸福学研究結果です。ただ絵を見たり音楽を聴くだけではなく、作曲、演奏、絵を描く人、食事を創る人など、何か美しいものを創っている人は幸せです。私は絵を描くのですが、絵を見るとその感動が分かります。ピアノの良さは元々あまり分かりませんでした。娘がピアノを習い始めてから自分のことのように思うようになり、ピアノの感動が以前よりぐっと増しました。自分で創造する、あるいは創造する人が近くにいることが幸せにつながります。音楽や芸術は幸せのために必要なのです。

芸術が凄いのは、「美しいものを創っている



皆が自己実現し、多様に分かり合い、助け合う世界が理想。そのためには「和して同ぜず」の精神が大事という。現在ドリームマップ協会と連携し、「子どもたちの夢を絵にする活動がどれだけ幸せ度を高めているか」についても研究中。「学校で、国語、理科、社会などは教えられるけれど、そもそもそれらは何のために、どんな夢のためにあるのか、は教えられていません。『幸せの授業』が小中高に入るべきだと思います」と前野先生。

から幸せ」だということ。たとえば論文を書くことや工場で物を作ることも一生懸命何かをしているのには変わりませんが、美しさの創造ほどには幸せには影響しません。美しいものや心に響くものの方が、強く幸せに関わるのです。現代社会には、芸術なんて本当にいるのかという議論がありますが、「美」だから要るのだと思います。

では、なにが「美」なのか、なぜ誰もが感じ

る「美」があるのか？ これはいまだに謎です。盆栽の美しさの研究をしたことがあるのですが、美学、哲学、芸術学などを繋ぐような統合的学問がなく、途方に暮れて中断しています。ドミソはなぜ美しく聴こえるのか、短調はなぜ暗く聴こえるのか。ロボットの機能美や、「幸せの四つの因子」の形（四つ葉のクローバー）も美です。「美」についてもさらに追究していきたいですね。

（2015年8月7日掲載分）

第4章

経済的観点から ～音楽の见えない経済的価値とは？

1. 暮らしの質全体を測るべき

この章では、主に音楽を習う人について「なぜ音楽（ピアノ）学習にお金を払うのか」、そこにどのような価値を見出しているのか、それは産業全体からみるとどんな意味があるのかについて考えてみたい。

国民総生産 GDP は、生産活動を通して生まれる物やサービスの総額であり、国の経済力を測る上で欠かせない指標である。しかし、金銭で換算されていない価値もあるのではないか、国の力を経済指標だけで測るべきなのか、経済力が高まれば幸せになるのか……？

さまざまな議論の中、2008 年にフランスのサルコジ元大統領はある提言をした。もし余暇時間をスポーツや文化などの非市場活動へ充てることに何の経済的価値も見いだせないと言うなら、それは人間の潜在能力実現よりも高生産性を優先するという意味であり、ヒューマニズムの原則に反する、と述べたのである（ジョセフ・E. スティグリッツ、ジャンポール・フィトゥシ、アマティア・セン共著／福島清彦訳『暮らしの質を測る——経済成長率を超える幸福度指標の提案』金融財政事情研究会、2012 年、p.8）。

これを受けて、ジョセフ・スティグリッツ（コロンビア大学教授、2001 年ノーベル経済学賞受賞者）などが『超 GDP 報告書』を著し、全世界の経済学者や政治家等に影響を与えた。

超 GDP とは GDP を補足する概念で、暮らしの質全体を測る指標である。スティグリッツの訳書もある福島清彦氏（経済学者・立教大学経済学部特任教授）は、超 GDP 時代の主要資本は「目に見えず常に変動する人的資本、組織内資本（人とのつながり）」であり、金銭も大事だが、文化活動や人とのつながりをもっと大切にするという方向へ価値観がシフトするかもしれないとしている。

日本国民では教養費・教育費にどれだけかけているか？

私たちはどんなライフスタイルで生きているのだろうか。総務省の定義によれば三つの活動に分類される（参考：総務省統計局「生活時間に関する結果」『平成 23 年度社会生活基本調査』2012 年、p.1）。

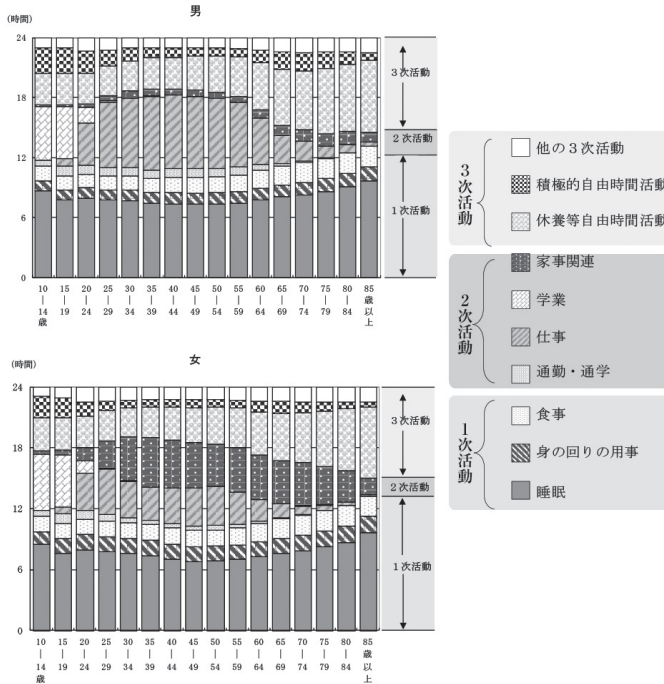
1 次活動	睡眠や食事などの生理的に必要な活動
2 次活動	仕事や家事など社会生活を営む上で義務的な性格の強い活動
3 次活動	1 次・2 次活動以外で各人が自由に使える時間における活動

全体的な傾向としては若年世代を除いて、2 次活動が減少し、3 次活動が増えている。ワーク・ライフ・バランスが見直されてきている証だろうか。特に過去 25 年間でこの 3 次活動の増加は顕著で、1986 年 5.47 時間→2011 年 6.27 時間に増加した。つまり全体の 4 分の 1 以上が余暇・自由時間に割り当てられている（総務省統計局「男女、年齢階級、行動の種類別生活時間（週全体）」『平成 23 年度社会生活基本調査』2012 年、p.1～3、p.5）。

余暇時間は暮らしの質全体に影響する。現在グローバル規模で開発が進んでいる「客観的幸福度」を測る 8 項目¹⁾の中に、“人々が起きている時間をどの活動に、どのような優先順位で、どのような比率で割り当てているのか”を評価する指標があり、余暇時間も重要とみなされている（福島清彦著『国富論から幸福論へ——GDP 成長を超えて暮らしの質を高める時代』税務経理協会、2011 年、p.89）。余暇時間には個人の内面を充実化させ、中長期的に生活の質を上げる力がある。

では、ピアノを学ぶ若年世代の余暇時間につ

1) 健康、教育、個人的諸活動、政治への発言と統治、社会的なつながり、環境条件、個人の身の安全、経済的な不安定感。上記は個人的諸活動にあたる（主観的幸福度については第 3 章をご参照頂きたい）。



いて詳しく見てみよう。学習・自己啓発・訓練(学業以外)、趣味・娯楽、スポーツ及びボランティア活動・社会参加活動は「積極的自由時間活動」にあたり、2011年度は10～14歳は2.23時間、15～19歳は2.18時間で、1日の10%弱を占める。「ピアノや音楽を習う」はこのカテゴリに分類されるとする。

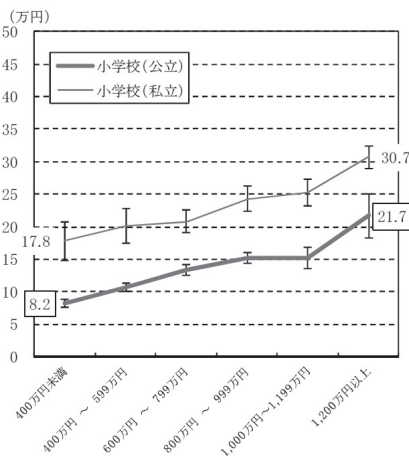


図1 世帯の年間収入別・学校種別その他の学校外活動費 (『子供の学習費調査』p24より)

この時間にどの程度教養費が費やされているだろうか？ 文部科学省による子供の学習費調査(平成24年度版)では、「その他の学校外活動費」として芸術文化活動への活動費が多いという結果が出ている。調査によれば、1年間で“公立小学校では35,000円、私立小学校97,000円”となっている。学年別にみると、最も多いのは私立小学校3年の約106,000円である。これをさらに世帯年間収入別に表したのが、右のグラフである(文部科学省「世帯の年間収入別・学校種別その他の学校外活動費」『平成24年度子供の学習費調査』2012年、p.24より。幼稚園から高校までの事例が掲載されている)。

「音楽(ピアノ)を学ぶこと」は学外の芸術文化活動の一つとして、教養娯楽費と見るか、教育費の延長と見るかは個人差があるだろう。これは平均値であるから、収入や家計方針次第で、もっと多い世帯や少ない世帯があることは言うまでもない。国や文化によっても違うだろう。3次活動の捉え方は自由裁量であるがゆえ、最も個人差が表れる部分だ。

1次活動の食費や光熱費等のように短期的ニーズを満たすものとは異なり、3次活動の教養・文化芸術活動はより中長期的に人を内側から変える力を持つ。そして将来生産や創造などに関わる2次活動の担い手になったとき、その潜在能力が大きな力を発揮するかもしれない。そうした潜在価値を考慮すると、消費ではなく将来への投資と言えるだろう。

(2015年8月19日掲載分)

2. 自己成長～それは消費か投資か？ 音楽を習う動機を七つに分類

人は「成長したい」という欲求が、幸福感に

密接に関わっていると研究で明らかにされている。そして「成長できそうだ」と感じるところに投資をするという心理が働く。ピアノ学習においては「演奏が上達する」以外にも多くの成長や幸福を感じられる時間・場所・経験がある。その指標の多様さに触れながら、成長・幸福感への投資がいかに個人の生産性を上げていくのかを考えたい。まず、「なぜ音楽（ピアノ）を習うのか?」、考えられる主な動機を七つに分類してみた。

◇直接の理由：ピアノを習いたい 考えられる動機

	第一の動機	根源的な動機
A	音楽が好きだから	音楽への根源的欲求（音楽への関心、欲求）
B	自分の表現能力や美意識を高めたい	非言語表現力・演奏技能・創造力の向上（楽器演奏、リトミック等を通して自己表現）
C	勉強以外の趣味、達成意欲や目標ができる	生活・行動規範の確立（学習法、日々の練習、音楽聴取の習慣、目標達成術）
D	美しい、楽しい、心が安らぐ、信頼できる、心が開放される	行動・知覚領域の拡大（ピアノ教室へ通うこと、学校以外に自分を表現できる空間を持つこと）
E	音楽仲間ができる、音楽と一緒に演奏したり意見交換したい	帰属共同体の拡大+他者交流（アンサンブルの実践、イベントやSNSを通して音楽を人と共有したい）
F	ピアノを上手に弾いて、褒められたい、社会に認められたい	社会的認知の拡大+他者承認（コンクール出場、コンサート出演、学校での演奏、内申書など）
G	音楽を専門的に学び、未来世代に伝えたい、育てたい	社会的認知の拡大+他者への還元（ピアノ演奏家、指導者、作曲家等として、他人に音楽を提供したい）

動機が重複したり、途中で入れ替わることもある。「本当はこれがしなかったんだ……!」と自分で認識していない欲求が顕在化することもあるだろう。たとえば……

- ・最初は友達が欲しかったが、音楽そのものに目覚めた（E→A）
- ・ただ音楽を楽しむだけでなく、他の人に教

えたくなった（D→G）

- ・ピアノ教室や先生も好きだし、他の人と連弾もしたい（D+E）
- ・音楽が大好きだから、一生懸命練習して上手になって、コンクールにも出てみたい（A+C+F）

根源的な動機が満たされれば、成長や幸福を感じる。そして動機が増えるほどその世界全体との関わりは深くなる。一方、予期したような成果が出ないと、その他でいかに良い変化が見られても、「失敗した」ことになりがちだ。目に見える結果（Fなど）が優先される傾向にあるが、結果がすぐに見えないものの価値も認識することが大切である（A～E）。フォーカシング・イリュージョン（参考：菅野恵理子執筆「幸福学の観点から～前野隆司先生インタビュー」『今こそ音楽を!』2015年、第3章第2回）に陥らないように。

人間には成長欲求がある

総務省統計局の『生活行動に関する調査』によれば、1年間に「学習・自己啓発・訓練」を行った人は4,017万人、10歳以上人口に占める割合は35.2%となっている。行動者率は男性が34.3%、女性が36.1%で、その目的は男女ともに「自分の教養を高めるため」が最も高い（総務省統計局「生活行動に関する調査」『平成23年度社会生活基本調査』2011年、p.5）。

成長したいと思う部分に時間とお金をかけることは、消費活動でありながら、自分への投資行為ともいえる。上記の七つの動機から、自分自身の成長に対する部分はA～Dにあたる。

アメリカの心理学者アブラハム・マズローは5段階欲求階層説で知られているが、さらに7段階に分けて、「生理的欲求」⇒「安全欲求」⇒「愛情と所属の欲求」⇒「承認の欲求」⇒「認知の欲求」⇒「審美的欲求」⇒「自己実現欲求」とした。これによると他人による承認を得たあとは、認知欲求（知ること、探究すること）、審美的

欲求（調和や美しさを求めること）を経て、自己実現に至る。つまり他人と繋がっている安心感や愛されている実感を得ると、今度は自己探求に向かう。そして内なる自分との調和を見出したり、より美しいものに惹かれることでより高みを目指し、最終的には「これこそ自分の道」というアイデンティティや社会的使命などを見出す。低次の欲求が満たされれば高次の欲求に移るとされるが、そう単純なものではないにしても、分かりやすいモデルである。これに照らし合わせると、上記A～Dは認知欲求や審美的欲求になるだろう。

この循環を生み出しているシステムの一つとして、ピティナ・ピアノステップを分析してみたい。2014年度のステップ参加人数は過去最高の43,795人、また年間開催地区数も517と過去最高を更新し、1997年ステップ開始以来の地区数も延べ5,000を超えた。今や伝統的コンクールをしのぐ勢いで参加者が増え続けている。それは一体なぜなのか？（参考：全日本ピアノ指導者協会『2014年度ピティナ・ピアノステップのべ参加人数が過去最高を更新』2015年）

そこには人生を豊かにする互惠的發展モデルがあるからだと考えられる。たとえばフリーステップ10分のステージ出演をした場合（一般13,500円、指導者割引12,500円、会員割引11,500円）、以下のようなプロセスがある。

- ステージ出演という目標を立て、曲を決める
- ステージ出演までの練習&レッスン
- ステージでピアノ演奏

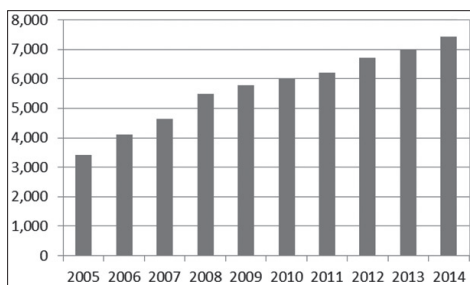


図 継続表彰発行数

- アドバイザーから客観的評価、学習プロセスの検証
- アドバイザーによるトークコンサートや模範演奏
- 他の参加者・他教室との交流、コミュニケーションシート交流
- 継続表彰
- パスポートへの記録、継続努力の自己承認
- 教室外（学校など）での表彰・発表など
- さらに高い目標への挑戦

過去10年で継続参加者数が倍増しているのは、年2回以上受ける人が増えたことも大きな要因だ。これは継続そのものが社会的評価を受けること、また継続による自己成長が十分認識されているからと思われる。これを繰り返しているうちに「自分を承認する」という自己成長サイクルに入る。実際ステップから参加し始め、後にコンクールに挑戦する人が毎年5,000名ほどいるとのことだ。

中高生・成人のステップ参加

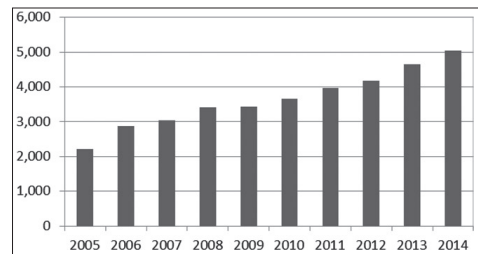
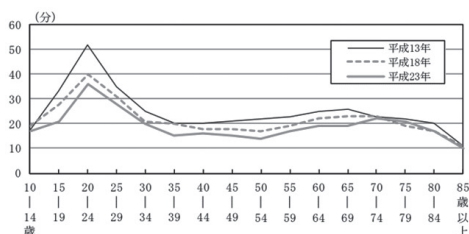


図 グランミュージック参加組数

コンクールの方では、大人のグランミュージック参加者数がここ10年で2倍以上に増えている。シニア層も増えているが、その背景として「積極的自由時間」の増加が考えられる。2006年と2011年を比較すると、60代はやや微減しているものの、70代は微増傾向にある。逆に「休養・くつろぎ時間」は60代以降で減少している（前掲資料『平成23年度社会生活基本調査』2012年、p.22）。自由時間をより有意義に活用しようという意味が垣間見える。会社を現役引退してもまだまだ身体的にも精神的にも十分な活力を



年齢階級別交際・付き合いの時間 (平成13年、18年、23年) 一週全体

持ち、学ぶ意欲が高い方も多い。リカレント教育 (社会人教育、社会人再入学、など) が広まって久しいが、最近では音楽大学に社会人講座だけでなく学士号コースもある。詳しくは第5章で述べる。

(2015年8月27日掲載)

3. 自己成長および社会との関係構築に

人間には繋がりたい欲求もある

マズローや心理学者アーネスト・ヒルガードの欲求階層説によれば、人は自己探求に向かう前に、他人からの十分な愛情と承認を感じることが必要になる。「愛情と所属の欲求」「承認の欲求」である。家族、学校や音楽の先生、友人・

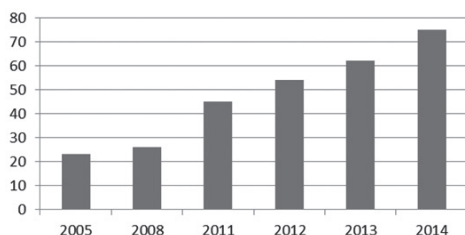


図 アンサンブル＆コンチェルト地区数

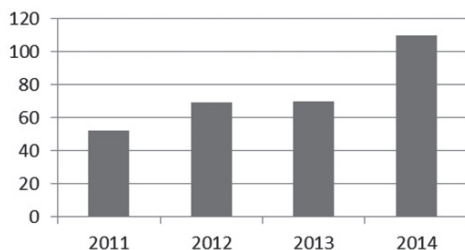


図 団体登録

仲間など、社会との繋がりをもちたいという心理は自然なものである。

しかし昨今、実際に会ってコミュニケーションする時間数は減少傾向にあるようだ。前掲の総務省調査によれば、余暇時間の中で「交際・付き合い」はほとんどの年齢階級で減少しており、特に20～24歳は大幅な減少となっている。また一日の大半を一人で過ごす単身高齢者も増えている (ただしこの統計は平成23年のもので、現在は多少数値が変わっているかもしれない)。

ではもし音楽があったら? 音楽は人と人を繋げる役割を果たせるだろうか。たとえば3人一組で10分のステージ出演をした場合 (一般16,500円、指導者割引15,500円、会員割引14,500円)、以下のような他者との接点がある。

- 他楽器奏者と一緒に練習&レッスン&交流
- 他楽器奏者と一緒にステージで共演
- アドバイザーから客観的評価
- 他の参加者・他教室との交流、コミュニケーションシート交流
- 学校などでの表彰など (2014年度239件)

練習に数か月間費やした場合、他者と一緒に過ごす時間は数時間～数十時間にも及ぶかもしれない。その過程で多少の悶着があっても、ステージという共通の大きな目標に向かえば、最終的には力を合わせるというポジティブな心理が働きやすい。過去5年の団体登録数は倍増、アンサンブル＆コンチェルト地区数も着実に増加していることから、音楽を通して繋がりたいという潜在的な心理も伺える。「愛情と所属の欲求」がこれに近いとすれば、人が根源的にもつ欲求だといえる。

社会への還元もステーション運営や社会貢献など

十分に周りの愛情と承認を受けたあとには、自己探求を通して自分なりの美意識を得て、最終的には自分が学んだものを還元したい、そのためにまた学びを続けたいと自己実現へ至る。

音楽仲間ができたり、誰かと一緒に演奏して楽しんだり、自分の演奏や努力を認められることで、それが土台になってまた自己を磨くという循環を生み出す。

さらにマズローは7段階欲求階層説を発展させ、自己実現の上に「自己を超越する欲求」を置いている。自己を超えて相手のために何かをするという利他心にも似ているだろうか。年齢とともに利他心の平均値が上がってくるという研究もある。「人々に施していると幸せになる、幸せだと余裕があるからまた人に施せる。そのような好循環が生まれる」（参考：前掲記事「幸福学の観点から～前野隆司先生インタビュー」）。

総務省統計局の「生活行動に関する調査」によれば、1年間に「ボランティア活動」を行った人は2,995万人、行動者率は26.3%で5年前よりやや上昇している（前掲資料『生活行動に関する調査』2011年、p.7）。女性は「子供を対象とした活動」が10.6%と最も高く、次いで「まちづくりのための活動」が10.4%などとなっている。現在ステップ・ステーションの代表は女性が多いが、これを体現したものと言えるだろう。なお男性は「まちづくりのための活動」が11.5%と最も高く、次いで「子供を対象とした活動」が5.5%などとなっている。となれば、地域の男性に街づくりの一環として当日ボランティアスタッフをお願いするのもよいかもしれない！

また2011年に始まったピティナ CrossGivingもこの流れで捉えられる。寄付者には委員会やステーション代表など、日頃からボランティアに携わっている方も多い。

自己投資だと思える消費とは？ 自ら選び、自ら関わること

他人からの承認も大切だが、自己を承認できるとより持続的な幸福感につながりやすい。それは子どもも大人も同じである。

こちらは小学生の例。『「自分らしさ」はお金をかければ手に入れられるものではなく、自分

の『チョイス』に『満足』できたときに得られる『感覚』だからなのだと思います」（南野忠晴著『シアワセなお金の使い方——新しい家庭科勉強法2』岩波ジュニア新書、2015年、p.114）。小学生でも少ないお小遣いをコツコツ貯めて自分が欲しいものを買ったときに、達成感が得られる。

こちらは大人の女性の例。「今より美しくなりたいと思う人は82.3%。8割以上の人がかもっと美しくなりたいと感じている一方で、自分の“美しさ”に対して積極的に努力できている人は約3割」であり、“美しさ”に対して積極的に努力できている人ほど、幸福度も上昇傾向にあることが実証されている（株式会社アテニア『“美と幸福”に関する調査レポート Vol.1』2014年）。

どれほど小さな一歩でも、自分で決めた目標に向かって努力し、それが達成できた人、達成に至らなくても夢や目標があること、それ自体が幸福である。それは幸福の因子でいえば「やってみよう！」因子である。（2015年8月31日掲載分）

4. 教養費を増やして医療費を軽減！？

教養・技能教育は1兆円、精神科病院は1.5兆円規模

総務省統計局が実施している経済センサスによれば、「教養・技能分野（教育・学習支援業）」の平成24年度売上高総計は約1.0兆円で、うち音楽教授業は約960億円の年間売上となっている（受講生64万人を対象に調査）。この分野には、スポーツ・健康教授業（1,873億円）、外国語教授業（1,374億円）、書道教授業（197億円）、そろばん教授業（154億円）、生花・茶道教授業（111億円）、その他（5,507億円）がある（『学習塾及び教養・技能教授業における産業細分類別事業所数、売上高及び受講生数』『平成24年経済センサス-活動調査』2014年、p.30）。

一方、「医療、福祉」の売上高は58.6兆円で、うち精神科病院は1.5兆円である。精神保健相

談施設、認知症老人グループホーム、その他の障害者福祉事業なども含めると 2.5 ～ 3 兆円ほどだろうか（前掲資料『平成 24 年経済センサス - 活動調査』p.31）。

厚生労働省の調べによれば、平成 20 年には精神疾患のため医療機関にかかっているのは 323 万人にのぼる。特に近年は、若年世代を含めて、うつ病や認知症などの著しい増加がみられるという（参考：厚生労働省「精神疾患に関するデータ」『みんなのメンタルヘルス総合サイト』）。また総務省統計局は健康状態と週間就業時間の関係を調査し、雇用者 5,372 万人のうち、健康状態が良くない人は 8.3% となっている。自覚していない場合や通院・入院していないケースも含めると、潜在的な数はさらに上るだろう。

このような社会的背景を踏まえ、普段から健康に気を配り将来的な病気を予防する予防医学の考え方が主流になりつつある。中には最高健康責任者（CHO、Chief Health Officer）を採用し、普段から社員の健康状態に配慮し、健康プログラムなどを実践する企業もある。いかに日々のライフスタイルに気を配り、身体や精神に無理のない範囲で仕事に携わるか、それは 1 次・2 次・3 次活動（参考：菅野恵理子執筆「音楽の見えない経済価値とは～暮らしの質全体を測るべき」『今こそ音楽を！』2015 年、第 4 章第 1 回）のバランスをどう取るかということでもある。

音楽の音楽療法的な側面については、日本をはじめ各国で多くの研究や臨床例がある。特にピアノを練習することで脳の構造が変わり、発達障害や認知症を回復させる効果もある（参考：菅野恵理子執筆「脳科学の観点から～澤口隆之先生インタビュー」『今こそ音楽を！』2015 年、第 3 章第 1 回）。音楽はたしかにさまざまな健康回復に寄与している。さらに将来的には健康維持・予防することもできるだろうか。そして精神科治療費・療養費を軽減することはできるだろうか。「ピアノをやっている人は未来に夢を描きやすい」と脳科学者・澤口俊之先生はいう。これは精神衛生上においても大きな意味を持つ。

高齢者×アートの取り組み、および社会的インパクト研究（イギリス）

大学と連携して社会的インパクト研究

イギリスの楽団マンチェスター・カメラータでは、健康と医療に関するプロジェクトや研究調査を行い、音楽の社会的インパクトを測っている。たとえば国内の大学と提携して「音楽創造ワークショップが抗精神病薬をどれほど減らすことができるか」という研究では、57% 減少という結果が出たそうだ。また自閉症児を対象にした“Music in Mind”プロジェクトでは、プロの演奏家と音楽療法士と一緒に即興ワークショップを行うことによって、自閉症児の潜在的な人格や表現力を引き出すことを目指している。これは 2018 年までに 15 倍増（200 人 → 3,000 人規模）を見込んでいる。

また現在、マンチェスター大学およびランカスター大学との共同研究で、世界初となる多感覚応用の効果測定・評価のためのツールを開発中だ。さらにアルツハイマー協会とも連携して、チームサイド地区の自閉症患者の抗精神病薬をなくす、または減らす調査研究をし、外部機関 New Economy がそれを評価している（参考：ブリティッシュ・カウンスル主催『フューチャー・セッション：高齢社会における文化芸術の可能性』2015 年 4 月 16 日開催）。

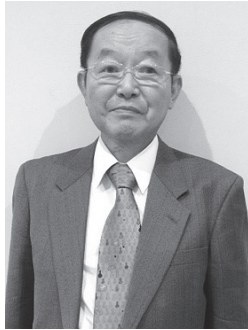
大学と連携した社会的インパクト研究が進めば、その経済的效果も算出できるようになるだろう。音楽はまだ大きな可能性を秘めている。

（2015 年 9 月 4 日掲載分）

5. 「21 世紀は人的資本投資を」～経済学者・福島清彦先生インタビュー

GDP で測られない部分にこそ、未来の世界が求める幸福がある。これは世界的な傾向であるようだ。21 世紀の社会が求める世界観や思想とは何か、それはどのような指標で測ら

れ、どのように政策に反映されているのだろうか。また音楽・音楽教育の現場で生み出される活動には、どのような社会的・経済的価値があるのか。エコノミストの福島清彦先生（元立教大学経済学部特任教授 写真）にお話を伺った。



世界の新しい幸福度指標は「人」と「社会」

——この50年間でピアノ指導者のネットワークが築かれるようになり、その結果、お互い学び合ったり応援したり、先生方の意識が変わり、指導成果も高まっています。また習う方も、音楽を教わるだけでなく、音楽仲間との交流や社会関係を広げることに価値が見出されるようになってきました。ただ、このような活動はGDPという指標では測りにくい一面があります。音楽を学ぶことの社会的・経済的価値、また余暇時間の価値はどのように捉えることができるでしょうか？

国の経済発展や拡大速度といった視点を離れ、個人の幸福度とその維持増大へ視点を移したとたん、このように、国民の幸福度を支える多くの“資本”が見えてきました。幸福度を測る重要な指標として、給料をもらうための仕事だけではなく、人と人の繋がりや人間関係などがあります。またピアノなどの習い事は、知的資産になりますね。ジョセフ・スティグリッツの本には24時間の使い方の配分がありますが、余暇活動の中に音楽が入っているのは良いと思います。CDを聴くだけでなく、自分で弾くのがいいですね。精神の集中度や向上心を培ってくれますから。アメリカ国防長官まで務めたレオン・パネッタ氏は、中学生の頃にピアノを学びコンサートまで開いて、地元新聞に「才能ある」と褒められたそうです。自叙伝では、そのころ培われた向上心や成果が後まで影響を与え

たと語っています。

カナダ、イギリス、フランスの国勢調査では、教育、健康、人との繋がりなどが重視されるようになり、「あなたは見ず知らずの新しい人に会ったときに信用できますか」「ボランティア活動をしていますか」「自分が幸福だと思いますか」「あなたは健康ですか」などを調査しています（1から10で回答）。アメリカでは国民の健康度を測る開発が始まっています。またOECDの統計調査では格差を重視し、政治への参加度（投票率）、健康度、教育度などが高所得層と低所得層でどう違うのか、なども測っています。アメリカでは中卒と大学・大学院卒では投票率が3倍くらい違うのですが、高学歴だと高収入で投票率も高く、「自分で社会を変えたい、変えよう」という意識が高くなる傾向にあります。格差があると幸福度や勤労意欲に影を落とすので、その点を重視しながら調査しています。

また国連では2011年に、GDPを補完する新しい統計を開発することが満場一致で決されました。2014年には140か国20年間に調査していますから、新しい国際比較統計が誕生したといっていいいでしょう（参考：United Nations University: Inclusive Wealth Report-Measuring progress toward sustainability (IWR) 2012, 2014）。その新しい指標とは次の四つです。

- 人的資本（総合的な資産・富・健康・教育など）
- 社会関係資本（人と人とのつながり）
- 生産資本（企業の設備や政府が作った道路など）
- 天然資本（農業用地、牧草地、地下石油など、それを使って生産活動ができるもの）

各資本の残高を調べて、一人当たりどれだけのかを計算します。人的資本は教育、健康、勤続年数などを指しますが、大学卒業後仕事をしている限りは毎年14%ほど人的資本残高が増える計算になります（教育実績には、国や大学の条件の違いなどは反映されてない。また社会資本については数値化が難しく、現在アンケート調査のみ）。

その結果、日本が世界で最も豊かであるとい

う結果が出ました。

今現在の支出削減より、未来のための投資を

——このような多角的で客観的な指標を持つと、自分の置かれている環境を改めて振り返ることができますね。教育の重要性については各国いかがでしょうか。

アメリカのオバマ大統領は教育も重視しており、大統領就任と同時に教育分野への投資が倍増



しました。また2年制短大の授業料を連邦政府が出すことをオバマ氏が提案しており、どんなに貧しくても勉強する気があれば行ける方向に向かっています。また幼児教育にも力を入れ、特に重要とされる0～5歳の時期に幼児教育を行うよう州政府に呼びかけています。またEUはユンカー EU 委員長が2020年までに64兆円の政府投資を提案し、その中に教育（人的資本投資）が入っています。

スウェーデンも教育に積極投資しています。財政赤字を減らしていく過程でも、政府は教育支出を減らさず、むしろ増加させました。2012年の時点で、スウェーデンの公的教育支出はGDP比6.7%で、先進国平均の6.2%を上回る水準を維持しています（福島清彦『いまこそ政府投資拡大へ』金融財政事情研究会、2015年、p.136）。

一方、日本の教育支出はGDP比3.6%（先進国中最低水準）、2013年度予算でも教育予算が3億円削減されています（前掲書『いまこそ政府投資拡大へ』p.6、p.21）。これ以上教育費を引き下げることは、学力低下だけではなく、社会人としての業務遂行能力を低下させ、ひいては日本企業の生産性と競争力低下を招くと考えています。

緊縮財政でただ歳出を削減して財政赤字を減らすことよりも、未来の人材や環境のために投資すること。政府支出や財政赤字を減らしたら経済が良くなるという誤った観念が、日本、

EUやアメリカにもまだあるので、『今こそ政府投資を』ではそれを正すことを提案しています。

——未来の人材育成に対する投資として、教育の質・量ともに高めることは大事ですね。音楽では、先生に教わった基礎を踏まえながら自分で応用する力を養うアプローチが、日本でも広まりつつあります。そのような力は、将来自分で生き方や働き方を見出すことにも繋がるのではないかと思います。（2015年9月7日掲載分）

6. 世界の文化費・教育費のトレンドは？

文化費・教育費には、その国が人や社会をどう捉えているのかがよく表れている。パリに本部を置くユネスコは、「2030年までに公正で包括的な教育とすべての人のための生涯教育を達成すること」を掲げ、各国GDPの4～6%、または公共事業の15～20%を教育に割り当てることを目標にしている（“UNESCO POST-2015 INDICATORS”）。

では、各国の文化費（および教育費）のトレンドはどうだろうか？ フランス、イギリス、スウェーデンの事例をご紹介します。

フランス×人間理解と能力開発

国家予算の文化費に占める割合が高いことで知られるフランス。これまで、芸術の理論的研究＝大学＝高等教育・研究省管轄、芸術の実践＝専門学校＝文化・コミュニケーション省と、管轄機関が分離していた。しかし近年では、教育と文化、理論と実践の歩み寄りがみられる。大学と専門学校の連携や大学院課程再編により、より包括的で学際的な芸術教育・研究を行うようになっているようだ。

一例としてパリ国立高等音楽院とソルボンヌ大学の連携、IRCAM（フランス国立音響音楽研究所）とパリ第六大学との連携などがある。そしてこの動きを象徴するのが、2011年にパリ高

等音楽院を含む13の高等教育機関が共同設立した研究大学である（Paris Sciences et Lettre, PSL、現在メンバーは22校、高等教育・研究省管轄）。107の研究室、3,200名の研究者（ノーベル物理学賞、化学賞、文学賞、生理学・医学賞、経済学賞受賞者などを含む）、18,500名の学生、300万点の文献資料、50万点の文化財などを有している。目的は、異なる分野を連携させること、イノベーションと創造力を活性化させること、フランスや世界中の才能を惹きつけ、新しい才能を生み出すこと、そして研究こそが経済活性化の真の要因となること、としている。

その中に、学際的に芸術を研究する博士課程も創設された（Science Art Création Recherche, SACRe）。対象となるのは音楽家、映画監督、芸術監督、俳優、デザイナー、ビジュアル・アーティスト、人文学、社会科学、科学などの研究者など。芸術の理論・実践両面を重視しつつ、分野をまたぎながら、新しい枠組みで研究を行うものである。その成果はこれから出てくるだろう。

では、この研究大学はどのような文脈で生まれたのか？

フランスでは2010年サルコジ政権下において「将来への投資」プログラムをスタートさせ、科学技術分野から教育分野に至るまで、国全体のイノベーションを喚起させるための投資を行っている。その一環として高等教育システム再編・研究分野の活性化を目指した“エクセレンス・イニシアティブ”が据えられ、63.5億ユーロ（約8,890億円）が投資された。現在までPSLを含む八つのプロジェクトが採択され、それぞれ7～8億ユーロ（約980億～1,120億円）が投資されている（参考：ストラスブル研究連絡センター『カントリーレポート～フランス』2015年、p.20）。

なお「将来への投資」プログラムには、学生の起業家促進計画も含まれており、若年世代の能力開発を促し、社会へ活かすことが期待されている。GDPに対する総研究費の割合は

2.26%で、EU平均を上回る（前掲資料『カントリーレポート～フランス』p.1）。

こうした一連の動きには、人間性をより俯瞰的にとらえ、人間の能力をより多面的・包括的に高めて、社会を活性化するという期待が伺える。フランスにおける芸術の学術的研究・実践は人文学に根ざしたもの、との見方もある（参考：Efva Lilja : ART, RESEARCH, EMPOWERMENT - On the Artist as Researcher, Elanders Sweden AB, 2015, p.43）。人間にとって芸術とは何か、人の営みとしての芸術に投資する、そんな思いが見えてくる。

イギリス×すべての人にアートを&経済効果測定も

イギリスでは芸術作品や文化遺産などの文化資源がすべての人に行き渡ること、芸術によって人と人を繋ぐこと、文化資源が持つ価値を最大限に引き出して社会にインパクトをもたらすこと、芸術によって雇用を生み出すこと、芸術の社会的・経済的価値を明らかにすること等、芸術の有意義な活かし方を模索している。

その一つとして、アーツカウンシル（文化・メディア・スポーツ省傘下）では2010～2020年の文化戦略10か年計画を策定した。「すべての人に素晴らしい芸術を（Achieving Great Art and Culture for Everyone, 2010）」プロジェクトでは、2012～2015年で10億ポンド（約1,940億円）の投資が約束されている。また2012年度五輪文化プログラム（Cultural Olympiad）には3,600万ポンド（約69.8億円）が投資され、その結果、5,370点の芸術作品および委嘱作品が、40,464名のアーティストによって創出されたことが報告された。うち6,160名が新人、806名が障がい者である（参考：Arts Council England : Great Art and Culture for Everyone, 10-year-strategic framework 2010-2020, 2013 revised edition, p.9）。2020年までに達成したい点として、芸術を通して人と人を繋げること、地方公共団体や民間セクターとのパートナーシップを構築す

ること、レジリエンス（しなやかな強さ）のある社会を築くこと、などが挙げられている。

イギリスでは芸術の社会的・経済的価値に対する認識を深め、公的資金を有意義に効率よく活かすために、大学や各種研究機関と提携した効果測定も積極的に行われている（菅野恵理子執筆「音楽の見えない経済価値とは～教育費を増やして医療費を軽減!?」『今こそ音楽を!』2015年、第4章第4回）。たとえばイギリス国内美術館の経済的効果を測定した2015年度報告書によれば、美術館は国内経済に14.5億ポンド（約2,813億円）の貢献をし、38,165名の雇用を創出し、公的助成1ポンドに対して3ポンドの収益を生んだ、と述べている。その実績を踏まえ、新たに1,750万ポンド（約33.9億円）の投資を行うことを発表している。

またファンドレイジング・スキル（非営利団体が社会貢献のために必要な資金を調達する力）向上への取り組みも盛んである。たとえばアート・ファンドレイジング&フィランソロピー協会では、リーズ大学と連携して、大学院レベルのサーティフィケート（資格）を授与している。これは同大ビジネススクールとパフォーマンス・文化産業スクールが共同開発した新しいコースで、修了後、アーツマネジメントや文化リーダーシップを学ぶ修士課程へとキャリアを発展させることもできる（参考：Post Graduate Certificate in Arts Fundraising and Philanthropy, led by the University of Leeds in partnership with Arts Fundraising & Philanthropy）。

なお、文化と教育の歩み寄りイギリスでも見られる。イギリス全土の児童や学生を対象に、歌や楽器指導を行うミュージック・エデュケーション・ハブ・プログラム（Music Education Hubs）は、まさに教育省からの投資である（2015～2016年度は7,500万ポンド）。

スウェーデン×民主主義社会の創造

スウェーデン文化省は、文化、メディア、民主主義、人権、マイノリティ、サーミ族の言語

と文化保護、また差別撲滅運動、市民社会構築、宗教なども取り仕切る。現文化大臣アリス・バー・クーンケは、「アートは自由のある場所にしか生まれず、また存在することができない」という信念から、文化的生活の独立性を目指し、他の政策分野と協力しながら文化政策を進めていきたいとしている。

文化省は以下五つの課に分かれている。

- 芸術・海外コーディネート課（Division for the Arts and International Coordination）
- 文化遺産と生活環境課（Division for Cultural Heritage and Living Environment）
- メディアと映画課（Division for Media and Film）
- 民主主義と市民社会課（Division for Democracy and Civil Society）
- 差別問題課（Division for Discrimination Issues）

中でも、民主主義と市民社会づくりを文化政策として掲げるのは世界でも珍しいかもしれない。内容としては、たとえば選挙の透明性、影響力、政治参加の確保、民主主義の認識、暴力的な過激派から民主主義を守ること、市民社会における組織に対する政府助成のコーディネート、市民社会の研究と統計調査を通じた知識普及、等がある。文化政策分析機関（The Swedish Agency for Cultural Policy Analysis）があり、専門家による文化政策評価、分析、効果測定などが行われている。

なお2015年度政府予算では、創造性、社会参加、ダイバーシティ（多様性）の強化を目指している（参考：Government Offices of Sweden : Government's Spring Fiscal Policy Bill, 2015）。その一つが、クリエイティブ・スクール・イニシアティブで、1,000万スウェーデンクローナ（約1.5億円）が割り当てられた。これは幼少期からアートに触れ、創造活動を通して成長する場を提供するプログラムで、プレスクールの文化的環境を高めることを目指している。対象となるのはすべての義務教育校で、州立および私立

学校ともに適用される。2008～2014年までに累計1億7,300万スウェーデンクローナ（約25.9億円）が拠出され、2016～2018年にはさらに助成が増える予定である。

スウェーデン文化大臣は海外に向けても積極的に発信しており、「文化は持続可能な民主的社會を築くのに欠かせないものであり、そこではすべての人が耳を傾けてもらい、話を聞いてもらう場がある」とスピーチした（2015年度ISPA国際会議にて）。

このスウェーデンの動きは、我々にも多くの示唆を投げかけてくれる。（2015年9月10日掲載分）

7. 世界的に投資が進む人文学研究、音楽も力に

学際的研究が進むと、なぜヒューマニティーズが重要になるのか

各国には独自の教育体制や文化があるが、グローバル社会全体ではどうだろうか。今世界中で、学術情報アーカイブのオンライン化が急速に進み、国境を超えて、投資や人材が集まっている。その先駆けであるアメリカのアンドリュース・メロン財団は、数十年かけて学術情報インフラJStor, ARTStorを構築してきた（参考：菅野恵理子執筆『アメリカでは、なぜ舞台芸術支援が増えているのか』2013年、第1～3回）。

最近では研究者の情報交換や発表機会が増え、2008年に創設されたリサーチ・ゲート（Research Gate、本拠地ベルリン）には現在700万人を超える科学者・研究者が登録し、1,900万点を超える論文等が公開されており、ビル・ゲイツ等が投資している。

また2008年に起ち上げられたアカデミア・エデュ（Academia.edu）には多分野の研究者・学者が集い、SNSにより活発に情報公開・交流が行われ、これまでに1,770万ドル（約17億円）の投資を引き出している。

このように国境を超えて学術研究情報インフ

ラが構築されることによって、多くの知が集積・共有され、そこから新たな命題を見出し、より高度で人類普遍的な研究が進められていく。また多様な分野が集まる場ではより普遍的なテーマが見出され、学際的研究が増えていく。

そこで今相対的な価値が高まっているのは、ヒューマニティーズ（Humanities、人文学）である。「人間とは何か」「人間とはどうあるべきか」という普遍的な問いかけがあるからだ。デジタル・ヒューマニティーズ学会も存在し（ヨーロッパ、日本、カナダ、オーストラリアなど）、デジタル人文学学術情報の有効活用、新たな研究法・教育法の模索、新しい社会的命題の発見などを、グローバル社会に発信している。2015年12月に台湾で開催された第6回国際会議では、「東アジア」がテーマになった（参考：European Association for Digital Humanities “Focusing on East Asia”, The 6th International Conference of Digital Archives and Digital Humanities 2015 in Taiwan）。

ヒューマニティーズの音楽・芸術分野への応用

音楽を通して人生を見せる

では音楽・芸術分野では、ヒューマニティーズの考え方がどのように反映されているのだろうか。アメリカでは1年次に人文学や教養科目に力を入れている大学が多く、スタンフォード大学には音楽や芸術を題材にして人間の思想を考える科目、コロンビア大学に至っては“Music Humanities”という全学必修科目がある。

またフランスには、さまざまな音楽様式や形式（クラシック、ジャズ、シャンソン、ポップス、世界各国の民族音楽など）とさまざまなスタイル（コンサート、ミュージカル、劇、パントマイム、人形芝居など）を組み合わせた音楽教育プログラムがある。目的は音楽を通して「人生」を見せることだ（参考：菅野恵理子執筆『音楽劇を通して、日常とは違う世界の扉を開く』『子供の可能性を広げるアート教育』第1回）。

「エンターテインメントや教育の要素だけで

はなく、生や死、愛……といった人生のさまざまな局面を見せることも大事だと思います。学校や家族に囲まれる日常生活とは、違う世界を垣間見せる入り口になりますね。それらは人生の一部であり、タブーではないのです」。

大学院でフランス近代文学を専攻したマリス・フランクさん（音楽博物館 Cité de la Musique 青少年プログラム主担当）は、そう語る。子どもにはあらゆる時代や形式の音楽、さまざまな感情や感覚を知ってほしい。それを感じて受けとめる能力が備わっているから——。このような考えにもとづき、Cité de la Musique では年間 20 回の教育プログラムが行われている。

音楽や芸術で次世代リーダーを育成する

教育、環境、健康、経済、平和構築など世界共通課題に取り組む、ザルツブルグ・グローバルセミナーというグローバルリーダー育成組織がある。第二次世界大戦後にふたたび対話の場を持つことを目的として創設された。現在は「イマジネーション」「サステナビリティ（持続可能性）」「社会的正義」をテーマに、あらゆる方面からの専門家や研究者を招聘し、フォーラムの開催や次世代育成などにあたっている。

「イマジネーション」部門では、音楽やアートで想像力を養う文化芸術プログラムがある。次世代文化リーダーが集まるヤング・カルチュラル・イノベーター・フォーラムでは、芸術の潜在力（社会変革を起こす力など）の認識を深め、さまざまなレベルでの文化交流を促し、リーダーとしての資質を高める。また政策決定の場において芸術の存在感を高めること、芸術が持続可能な経済発展や社会整備の推進力となるよう支援することも、このフォーラムが目指すところである。

ヤング・カルチュラル・リーダーズ・フェローのマーク・ギルスピー氏は、音楽や芸術は自分の限界を広げ、それを越えることを助けてくれる、オーケストラも早い段階から若い世代と繋がる必要がある、と話している。

この組織に投資するのは、オーストリア科学・研究・経済省を始め、ビル・ゲイツ財団、アンドリュー・メロン財団、ロックフェラー財団、ナイト財団などの米大手財団から、ドイツ、メキシコ、日本、韓国、香港などの各国銀行や政府組織、健康財団、ベルギー食糧危機財団、国際ホロコースト追悼連盟、国際美術館・図書館サービス機構などの国際組織、など多数である。またパートナーにはアメリカ、アフリカ、アジアなどの大学が名を連ねている。

地元ザルツブルグ音楽祭もパートナーの一員である。同音楽祭は第一次世界大戦後に分断されていたヨーロッパを再び結びつける目的で創設されたのであるから（参考：菅野恵理子執筆「音楽祭から発信するグローバルなメッセージとは」『ザルツブルグ音楽祭リポート』2010 年度、第 1 回）、いわば同志である。

なお音楽祭は世界各国からの聴衆、グローバル企業協賛や地元からの寄付、公的資金（30%）で成り立っている。小国ながら政治的中立性を生かし、世界の知の拠点となっているのは注目に値する。

音楽と人間観で結びつく

最近では、自身の思想や信条に基づき、国境を超えて人が結びつくようになっている。音楽や芸術の世界でも同様である（参考：菅野恵理子執筆「音楽コミュニティは、国境を超えて深化する」『舞台芸術の力 ～ FACP リポート』2014 年、第 2 回）。たとえば 1999 年に中東で創設されたウェスト＝イースタン・ディヴァン管弦楽団（1999 年に指揮者のダニエル・バレンボイムと、文学者のエドワード・サイードによって設立）はよく知られている。イスラエルとパレスチナの若手音楽家が同じステージで演奏することで、文化面から平和に貢献するという理念を掲げて活動している。現在もバレンボイム音楽監督をはじめ、懸命の努力がなされている。

また 2009 年にはイタリア人ホルン奏者アレッシオ・アレグリーニによって「人権のた

めの音楽家オーケストラ (Musicians for Human Rights Orchestra)」が創設された。これまでにマリア・ジョアン・ピレス、エレーヌ・グリモーなどが共演している。同組織ではファンドを起ち上げ、人権侵害、人身売買、健康被害、などの問題を抱える国やコミュニティに寄付している。そしてこの組織にはユニセフ、国境なき医師団、国境なき音楽家などの組織が協賛してい

る。

人間とは何か、人間としてどう生きたらよいのか、という問いかけを発するとき。ときに道徳は国や社会の意向や規範が反映されやすいが、ヒューマニティーズ (人文学) は人間を多面的に探究する普遍的な学びである。音楽も、その一つなのである。 (2015年9月11日掲載分)

第5章

大学最新カリキュラムの観点から
～リベラルアーツとしての音楽にも注目

はじめに ～音楽をより広く、深く学ぶためのカリキュラム考察

第5章では、大学の最新カリキュラムについて取り上げる。大学を3タイプに分類し、各大学でどのような新しいカリキュラムがあるのか、どのような背景と経緯から生まれたのか、などを取材した。

これまで音楽は主に音楽大学で専門的に教えられてきたが、最近は音楽科目を開講する総合大学も現れ始めている。それは、リベラルアーツとしての音楽（1.）である。日本ではまだ僅かであるが、アメリカではほぼすべての大学で音楽科目が開講されている（参考：菅野恵理子執筆『アメリカの音楽大学にはなぜ音楽学科があるのか』2012年）。音楽を習ってきた学生も、初めての学生も、ともに学べる音楽とは？ 音楽という資源をどのように生かしているのだろうか。

また音楽学部や学科がある総合大学（2.）では、どのように音楽を位置づけているのだろうか。他学部や他学科の学生も音楽を学べるのだろうか。

音楽の学び方が広がる一方で、音楽を専門的に学ぶ人はどう深めていけばいいだろうか（3.）。変わりゆく社会環境の中で、音楽大学ならではの意義を示しつつ、どのようにその才能や資源を伸ばしているのだろうか。

さらに番外編として、中等教育での最新動向にも注目した。最近日本でも増えつつある国際バカロレア校（参考：菅野恵理子執筆『社会的観点から～見えにくい力を評価すること』『今こそ音楽を！』2015年、第1章第6回）では芸術科目が重視されているが、音楽科の授業はどのように展開しているのかを取材した。（2015年11月5日掲載分）

1. 音楽で思考法、実践力、創造力を養う ～総合大学教養科目

❖慶應義塾大学 ～知識は実践してこそ！身体知としての音楽

私立総合大学最高峰の一つ、慶應義塾大学では多彩な音楽科目が開講されている。中でも「身体知・音楽」¹⁾という科目は、一般学生が教養として音楽を学ぶ意味がよく分かる授業だ。現在、声楽アンサンブルと古楽アンサンブルの二つが開講されている。これは教養教育センターが主催している科目で、ほかに「身体知」「身体知・映像」などがある。「身体知」という言葉に、どんな学び方の鍵があるのだろうか。日吉音楽研究室の佐藤望先生にお話を伺った。



佐藤望先生

一般学生が教養として音楽を学ぶ環境 ～身体知・音楽とは何か

頭で考えたものを行動で実践していく「身体知」——慶應の教養教育センターが提唱する「身体知」とは、どのようなコンセプトでしょうか？ 佐藤望先生：学問として頭で考えて学んだものを、外に向けて意味のあるものとするためには、社会に目を向け、身体で行動を起こしていく必要があります。たとえば文学のワークショップでは、演劇・舞踊・歌・文学等を通して、どの

1) 「身体知・音楽」には、合唱音楽を通じた歴史的音楽実践（声楽アンサンブル）と、古楽器を通じた歴史的音楽実践（古楽アンサンブル）がある（住友生命保険相互会社寄附講座）。現在声楽アンサンブル48名、古楽オーケストラ20名、オーケストラ40名で、その他オペラや弦楽四重奏のクラスもある。新年度よりジャズのクラスが開講予定。また教養教育センターではアカデミック・スキルの授業も開講している。英語ディベートクラスでは「安楽死」「原発再稼働の是非」などをテーマに討論するそうだ。

ようにコミュニケーション力を高めることができるか、社会貢献がどうできるか、などを研究しています（担当：横山千晶教授）。最近では横浜の一部の簡易宿泊施設の集中する地域で、産業社会の底辺を支えてきた人たちが人知れず身体を痛めて亡くなっていくケースが増えています。そこで何が起きているのかといった社会問題にも目を向けていこうとしています。

——佐藤先生のご担当されている声楽アンサンブルでは、どのような授業を行うのでしょうか。またどのように「身体知・音楽」というコンセプトを体現しているのでしょうか？

今年の声楽アンサンブルでは『地球へのバラード』（三善晃作曲、谷川俊太郎作詞）を仕上げ、2016年2月に岩手県大槌町と花巻市で歌う予定です。提案して下さったのは、花巻市に避難中の子供たちにも合唱指導されている声楽家の古川精一先生です（宮澤賢治児童合唱団）。これまで横浜市との社会連携は行ってきましたが、もう少し広げていくことになりました。

では、なぜ『地球へのバラード』なのか？三善晃、谷川俊太郎は同じ年代・場所（東京都杉並区）に生まれ、ともに学生時代の最中に、焼夷弾が落ちていく中を走って逃げるといった戦争体験をしています。お互いに通じ合うものがあったのですね。谷川の素晴らしい詩に三善晃が渾身の作曲をしたわけですが、大学生を念頭においた響き・リズム・メッセージが込められていて、私自身も高校時代に初めて聴いて感動したのを覚えています。ぜひ学生と一緒に歌いたいと思い、昨年も年間26回の授業で全5曲を仕上げて演奏会を行いました。

大槌・花巻では、私が編曲した「故郷（ふるさと）」などの唱歌も歌います。実は企画段階で、大槌町のNPOの方から「復興米でおにぎりを作りましょう」とご提案を頂きました。復興米とは、津波に流されてすべてを失った土地で、偶然岩陰に残っていた数本の苗を大事に育てて作ったお米です。それを頂いて、その場所で歌います。学生には、学校と大槌で「故郷」を歌

う重みの違いを感じてほしいのです。

この他、声楽アンサンブルクラスでは『バッハのモテット×シュッツの複合唱』の演奏会も10月に行います（2015年に終了）。コラボ相手のアンサンブル・ミリムは、「9人でバッハ」というコンセプトのもとに若手音楽家（新国立劇場合唱団、バッハコレギウムジャパン、東京混声合唱団などのメンバー）が集まったグループで、指揮の根本卓也氏（新国立劇場副指揮者）には定期的に学生を指導して頂いています。彼が普段どのように活動しているのか、その姿も学生に見てもらいたいですね。

専門的に高度な技術を学ぶことも身体知ですが、身につけた音楽知識や技術をどうやって人や自分が幸せになるために考えて行動するか、それが「身体知」だと私は考えています。

リベラルアーツとしての音楽

——仰るように、音楽を身体技法としてだけでなく、社会環境や歴史的文脈も踏まえながら、行動に置き換えることが大事ですね。リベラルアーツとして音楽を学んだ学生の中には、どんな方がいらっしゃるでしょうか？

音楽は科学、社会、体育、医学、歴史、外国などあらゆるものと繋がっていて、音楽と結びつけば何でも「〇〇音楽学」となります。そのような学問は他になかなかありません。ですから専門を一つに限定しないこと。昨今の激しい社会的変化の中で、学際的な学び方はますます重要になってきています。たとえば、「数学を学んでいたが、ぱっと環境が変わったら、その知識をベースにして他分野に移ることもできる」、そんな学生を育てたいですね。

商学部卒業生で、現在インドの大学院で勉強している人がいます。彼は2年間、声楽アンサンブルと一緒に歌っていました。卒業後は大手商社に4年間勤務していましたが、ある日「将来インドで学校を創るために、ニューデリー大学大学院（社会奉仕科）で学びたい」と、私に推薦状執筆の依頼がきました。シュッツと一緒に

歌った人が、インドで学校を創ろうとしているなんて、夢があっていいじゃないですか！ これこそまさに「身体知」、彼に推薦状を頼まれて誇らしく思いました。彼は大学やインド政府の奨学金だけでなく、会社同僚や先輩も共感して出資してくれたようです。留学に踏み切ったきっかけは、岡本太郎の「自分の中に毒を持って！」という言葉。芸術家が命をかけて表現したことを感じ取れること、自分が身につけてきた音楽をもってどう生きていくのかを学ぶこと、それがリベラルアーツだと思います。

音楽を深く学んだからこそ、音楽家に対する敬意も

——リベラルアーツで培った価値観や考え方が見事に生きていますね。ところで、音楽を専門的に学んでいる学生もいらっしゃいますか。

大学全体の約2割が一貫校（慶應大付属小・中・高）出身ですが、幼少の頃から楽器を習っている人も多いです。2012年日本音楽コンクールヴァイオリン部門優勝の大江馨さんも慶應です。他にもヴァイオリンや古楽器演奏に優れた学生や、音楽学でパリに留学した卒業生もいます。和声や音楽史の授業などもありますし、論文が書ける資料環境も充実しています（三田キャンパス）。音楽学の常勤教員は6名ですが、非常



日吉キャンパスは一般教養専任で200名の教授がいる。きわめて自由な校風で、教授陣もさまざま。台湾で薬剤師の国家資格を持っていながら中国語を教えている先生、吉原の江戸文化の研究をしている先生、筋肉の研究をしている先生、「科学者に科学を教えるよりも、将来ビジネスマンになる人に科学を教えたい」と生物学を教えている先生など。「大学で繋げてあげられるのは、先生や生徒との出会い」と佐藤先生。

勤の先生方も若手で優れた人が多いですね。

我々教員としてはメソッドをきちんと教え、最後に演奏会まで仕上げていくのが目標です。そして、たとえば3分の音楽を作るのがどれだけ大変か、プロがいかにかさまざまな苦勞を乗り越えて舞台に立っているのか、それを知っている人になってほしいです。それが人生をかけてプロになった人に対するリスペクトでもあるし、意見や批判を述べるにしても根拠と自信を持って言えるでしょう。

何より、音楽文化を育ててくれる人がここから育ってくればいいと思います。モーツァルトやベートーヴェンも勉強しますが、それ以外の音楽にも凄いものがある。歴史の長いスパンの中で、知識全体を見ていくのが大学のミッションだと考えています。

（2015年11月6日掲載分）

2. 音楽を深く学んだ社会人を育てる ～総合大学音楽学部・音楽専攻

❖青山学院大学～芸術の学びを糧に社会へ

2012年、青山学院大学に誕生した文学部比較芸術学科。音楽、美術、映像演劇の3分野を相互に比較しながら、芸術を総合的に学ぶ。音楽はどのような位置づけで何が学ばれているのか、比較することによってどのような思考が生まれるのか、来年卒業する1期生は何を目指しているのか。音楽専攻の広瀬大介准教授（写真前列中央）、およびゼミ生の皆さんにお話をお伺いした。

比較芸術学科とはな何か？

なぜ比較芸術学科が生まれたか

——複数の芸術分野を学際的に学ぶ「比較芸術学科」というのは日本では珍しいですね。どのような経緯で設立されたのでしょうか。

広瀬大介先生：もともと美術や音楽は同じ文学



部の史学科に、演劇は英米文学科に属していたのが、2012年に比較芸術学科として新しい学科が発足しました。分野相互の関わり合いがあり、その上で自分の専門を深められると望ましいという共通認識がありました。ですから1年生は必修として、東洋文化も西洋文化もすべて学びます。実技科目として、演劇ではワークショップ、美術ではデッサンなどがありますが、音楽専攻では基本的には音楽理論を学びますので演奏の実技を教える授業はありません。現在は美術4人、音楽2人、演劇映像3人の専任教員がいます。美術や演劇映像の先生方も、音楽に詳しい方が多いですね。

——今日見学した楽曲分析のクラスは、学生が自主的に進めていましたね。他にはどのようなテーマを扱っていますか？

楽曲分析は今回で3回目です。これまでの2回でモーツァルトの交響曲第41番「ジュピター」K.551、今回はワーグナーの楽劇『トリスタンとイゾルデ』から「前奏曲」と「愛の死」、次回はラヴェルの『ラ・ヴァルス』を勉強します。モーツァルトではソナタ形式を、ワーグナーでは、劇音楽が具体的に何をどのような手法で表現しようとしているのかを考察できればいいと考えています。月替わりのゼミ幹事が、学生発表のときは司会を担当し、飲み会でも幹事をお願いしています(!)。10人ほどなので1年間で全員まわりますね。学生が自主的に進められるように、こちらは90分間でできる限り黙っています。いまの4年生が3年生のときは私が

コラム 自分でモティーフを探す楽曲分析

この日のゼミ演習では、ワーグナー『トリスタンとイゾルデ』より「前奏曲」と「愛の死」の楽曲分析が行われた。まず楽曲を1回通して聴いたあと、ゼミ生全員でアナリーゼ作業へ。事前に配布された総譜とライトモティーフの譜例をもとに、どこにそのモティーフがあるか、どんなモティーフなのかを数小節毎に探っていく。断片的に現れたり、拡大・縮小されたり、楽器編成を変えて現れたり、どの楽器とどの楽器がモティーフの受け渡しをしているか等、パズルさながらに見つけていく。学生の一人がリーダー役として司会進行を務め、和気藹々とした雰囲気の中で、出席者全員が積極的に意見を発していたのが印象的である。

楽曲分析を教えていましたが、今は新しい3年生に4年生が教えてくれているので、私も楽をしています(笑)。

現役生に聞く ～比較芸術として音楽をどう学んだか

1・2年次に音楽・美術・映像演劇を横断的に学んで気づいたこと、3年次で音楽コースを選んだ理由、学んだことを将来どう生かしたいかなどを、ゼミ生数名に伺った。

□ 音楽と諸芸術の表現の違い

たとえば「やわらかい」という表現一つとっても、絵画では色や描き方で表現し、音楽では和音の響きやテンポなどで表現したり、演劇では言葉の韻で激しさや優しさ



を表現したりと、さまざまな表現があることを学びました。オペラなどの舞台芸術を見ていると、どれか一つでは成り立たず、お互いを尊重しあって表現していることが分かり、色々な芸術が繋がっていることを実感しました。[小林佳織さん／大4]

▫ 音楽家とさまざまな芸術家の関わり

シェーンベルグとカンディンスキーなど、芸術家同士の繋がりに興味を持っています。このような発想や気づきがあったのは比較芸術だから。卒論では音楽が成立した背景に宗教や政治があったことを、学際的に研究します。音楽以外では、発達心理、現代思想、記号論、文化経済、文学、美術系科目、インターネットと法などを履修しました。専門的になり過ぎないよう、間口を広げることが大事だと思っています。将来はシェーンベルグの研究を極めてファンを増やしたいです。[高橋葵さん／大4]

▫ 音楽と政治の関わり

政治や軍事にも興味があります。旧ソ連などでははっきり物事は言えないが、音楽や芸術を通してそれとなく逃げ道を作りつつ社会体制批判をした歴史があり、そのような芸術の方法を学んで面白いと思いました。芸術は当時の社会や政治体制を反映して、どこかで繋がっていることを4年間で実感しました。ショスタコーヴィチなどソ連の作曲家が好きで、卒論は日本の軍歌です。将来は旅行会社が志望で、旅行を通して音楽や芸術に触れる人を増やしていきたいです。[吉田美香さん／大4]

▫ 音楽と映像、音楽と心理の関わり

元々は映像志望で、たとえば音楽が映像とどう繋がっているのか、どういう映像手法やカットの絡み合いがあるのか、音がどういう感情を与えるか、記憶に及ぼす影響

などを学びました。卒論はジョン・ウィリアムズとコルンゴルドを軸に、ハリウッド映画音楽の変遷について書く予定です。音楽以外にも幅広く履修し、物事との見方や関わり方を学びました。将来はさまざまな分野に関われる職種を希望していますが、音楽鑑賞日記ブログは続けていきたいと思っています。[新村沙樹さん／大4]

比較芸術を学んだ自負を胸に社会へ

▫ 芸術学を学んで糧になった社会人に

高校時代はジュニアオーケストラでチェロを弾いており、大学では音楽の歴史的背景や楽典などの学びを積み重ねてきました。卒論はメンデルスゾーン『真夏の夜の夢』。演奏会序曲 Op.21 は17歳のときに、劇付随音楽 Op.61 はプロイセン王の勅令でほぼ晩年に書いた作品ですが、この間に何が違って、何が変わらなかったのかをテーマにしています。実学志向の今のご時勢において、芸術学というニッチな世界を4年間かけてしっかり学んだのは自慢です。それを学んで糧になった社会人がいることが大事だと思っています。[小林拓生さん／大4]

▫ 将来は市民楽団で続けたい

青山学院短大現代教養学科で日本文学を専攻し、「日本の言葉と文化」「日本の歴史と現代社会」「世界から見た日本」、三つの視点から日本を全体的に勉強しました。卒業後に比較芸術学部3年次に編入。社会人になったら、ホルンを買って市民楽団で吹き続けたいですね。[松本真実さん／大4]

将来は音楽人口を増やしたい！

芸術学部ではなく、文学部に比較芸術学科があることに大きな意味があると思っています。2年次の授業で、社会全体が文芸に密接に反映されていることを学びまし

た。たとえば1830年12月4日にベルリオーズ『幻想交響曲』が初演され、それが標題音楽の始まりと言われていますが、その年にヴィクトール・ユゴーの『エルナニ』事件がありましたし、普仏戦争ではフランス文学がドイツ音楽に影響を与え、ブラームスの『勝利の歌』が書かれました。さまざまなジャンルで同時に時代が変わっていくので、全ジャンルを学べる環境が大事だと思います。もともと広瀬先生の記事に感銘を受けて青学に入学しました。将来は自分も書くことを通して、クラシック音楽を聴く人口を増やしたいです。[本田裕暉さん/大3]

有志による活発な広報活動

比較芸術学科は、学生有志による広報活動も活発である。学会報『HIGE ひげ会報』は比較芸術学会委員会が執筆・



レイアウトを手がけ、学内で配布している。また比較芸術学会音楽研究会もあり、定例勉強会や会報制作、また日本フィル、読響、藝大フィル公演などに足を運んでいる。

経験した楽器、履修した科目の多様さ！

7名がこれまでに経験した楽器

ピアノ、エレクトーン、歌、オペラ、ベース、合唱、トランペット、吹奏楽、和太鼓、声楽、クラリネット、指揮、ドラム、チェロ、打楽器、ホルン、ヴァイオリン！

音楽以外の科目

発達心理学、現代思想、記号論、文化経済、物理、法律、文学、美術、芸術と法律、インターネットと法、医療社会学、イスラム史、ギリシア哲学史、ラテン語、等々。

(2015年11月9日掲載分)

❖フェリス女学院大学 ～音楽が心にある豊かさ

フェリス女学院大学では1989年に音楽学部が短大から4年制となった。演奏学科は当初から変わらないが、10年前に楽理学科から音楽芸術学科へ転身して今に至る。総合大学の中で音楽学部の特色を生かし、より自由な学びができるようになったという。カリキュラムは、学生が主体性を持って創造・実践することに重きが置かれている印象だ。今回は、黒川浩先生（演奏学科写真左）、瀬藤康嗣



先生（音楽芸術学科写真右）にお話を伺った。

音楽が核にある豊かな学びを ～演奏学科

——黒川先生は演奏学科の学生さんとのように関わっていらっしゃるんですか？ また総合大学に音楽があることをどう捉えていらっしゃるんですか。

黒川浩先生：フェリスには大学全体として「音楽が心にあることの幸せ」という雰囲気がありますね。演奏学科は1学年30名くらいで（ピアノ科はうち約10名）、皆仲がいいです。私達の学生時代は競争主義でしたが、ドイツ留学時に師事したデトモルトのシュヌア先生に、それは間違いだということを学びました。日本に帰ったら本当に優しい先生になりなさい、生徒の良い所を見て伸ばしてあげようと。シュヌア先生は、たとえ失敗しても「芸術はもっと広くて深いものだから気にするな」とすべてを受け入れて下さり、自分らしさを大切にしていいたと教えて頂きました。

フェリスの学生には、大らかに勉強して、幅広く良い仲間をつくり、自分の行く道を見つけ

る、そして「もてなしの精神」を身につけて社会に出てほしいと思っています。

アメリカの総合大学にも音楽がありますね。10年前フィラデルフィア州のニューマン大学にて、ダブルメジャーで音楽も学んでいる看護学科と犯罪捜査科の前で、講義とコンサートをさせて頂きました。そのとき感じたのは、どの学科でも優秀な学生ほど演奏がうまいこと！

「心に音楽があること、音楽を享受できる心があるということは、ステータスが一つ上だと思います」と、ある学生が言っていました。そのような価値観で音楽を学んでいるのです。日本でも教養的な音楽の学びの時代が来るのではないかと感じています。



創造&実践！ 全ゼミでコンサート制作実習～音楽芸術学科

社会実践コミュニケーションとは？

——音楽芸術学科は、幅広いリベラルアーツ型音楽教育を掲げていらっしゃいますね。7段階の専門科目カリキュラム²⁾がありますが、中でも「社会実践コミュニケーション」、すなわち音楽と社会との結びつきを学ぶ科目群が特徴的です。

瀬藤先生：はい、実践を伴うワークショップが多いですね。たとえば声楽の場合、これまでは身体技法としての歌が学びの中心でしたが、今は自分で録音してオーディションに送る、自分でホームページを作る、マイクを使用する場合は現場で難なくマイクスタンドを扱える、ナレーションや朗読ができる、等々といったスキルも必要です。関連領域を学んでいた方が卒業

後の活動にプラスになるだろうと、実践的な科目を用意しています。

音楽にはさまざまな関わり方があるので、まずは広く浅く触れて、興味を持ったら深く学んでもらうことを想定しています。たとえば自分でコンピュータを使って映像や音楽を作る学生も多いですね。また K-POP の世界進出に興味を持っている学生や、J-POP の事務所でバイトをして将来のビジネスモデルについて研究したり、中国語を勉強して C-POP について（なぜ中国のみで世界では聴かれていないのか）追究したり、インターネットによって音楽ビジネスがどう変化していくのか、などの研究例もありますね。

コンサート制作実習を通して学ぶ

——幅広く学ぶ過程で、独自の視点が生まれてきますね。ゼミにはどのような特徴がありますか？

ほとんどのゼミでコンサート活動や企画に関わっています。私の「音とメディアテクノロジー・ゼミ」では CD アルバムを制作し、自作曲をプロのミュージシャンと一緒に演奏するライブを行っています。また「共演コミュニケーション・ゼミ」（立神粧子先生）では、アウトリーチ活動として幼稚園や病院などで出張演奏を行い、コンサートマネジメントのすべてを学びます。また自作曲発表やミュージカル制作、フリーペーパー制作などを手がけているゼミ³⁾もあります。

またゼミではありませんが、『戦争と音楽～闇から光へ』という切り口でのコンサート企画もありました。サントリーホール主催『レインボウ 21』の一環で、フェリスが採択されたのは 2 回目です。1 回目は『ピアノ七変化～内部奏法とプリペアド・ピアノ』（2011 年）というタイトルでした。

2) 「ミュージシャンシップを養う」「キリスト教音楽を体験する」「ミュージシャンシップを高める」「音楽の背景を探る」「社会実践コミュニケーション」「専門を深める」「専門を極める」

3) 作曲・編曲、ヴォーカル・コミュニケーション、音楽ジャーナリズム、音環境デザイン、ポピュラー音楽、共演コミュニケーション、音とメディアテクノロジーの 7 つ。

コンサート創りはチームプレーで、マネジメントや予算管理もしなくてはなりませんし、場合によっては映像技術や著作権処理、広告宣伝やメディア取材対応なども必要です。音楽の道に進むかどうかに関係なく、これは世の中すべてに関わること。将来必ず役に立つから、そこからしっかり学び取り、就職活動でもアピールするようにと言っています。

幅広く学んで生かす ～他学部とカリキュラムシェアも

——音楽芸術学科生はどのようなバックグラウンドをお持ちでしょうか。また学部間交流が活発な印象ですが、他学部科目を履修する音楽学部生も多いのでしょうか。



音楽芸術学科の学生はさまざまですね。子どもの頃からピアノや楽器を習ったり、ミュージカルの舞台に立っていた子もいれば、好きだけど未経験の学生もいます。芸術家としてキャリアを築いていくのは早い段階から活動をしていた人が多いですが、その素養がない場合は、自分の好きなことを大学で学び、一般就職を選ぶことが多いです（就職率96%）。音楽の道に進むのは3割ですが、ライフワークとして音楽が傍らにあることで人生が豊かになるでしょう。

またフェリス全体の特徴として、他学部開放科目が多くあります。音楽芸術学科は、半分以上の単位が他学部科目でも卒業できるカリキュラム構成にしています⁴⁾。また他学部から音楽

4) 卒業に要する124単位中、音楽芸術学科は72単位、演奏学科は66単位までが他学部科目でも可。

コラム 実社会で活躍する卒業生が、大学時代に打ち込んだものは？

石塚夕夏さん（株式会社オールアバウト勤務）

フェリス女学院大学では音楽基礎教養や演奏技術の授業のほか、音楽芸術学科ならではの授業として、即興演奏ワークショップ、音楽ジャーナリズム、ポピュラーミュージック理論、アートマネジメントなどを履修。さらに他大学授業として、イノベーションと起業（横浜国立大学博士課程前期）を学びました。

授業以外で最も魅せられたのはコンサート制作です。きっかけは2年次に受講した三宅榛名先生の作曲クラスで、クラス全員の作品を披露するためにコンサートを企画・実施したこと。3年次には現代音楽の作品を作りながら、作曲ゼミメンバーでコンサートを開催したり、ゼミ以外で手掛けた『ピアノ七変化～内部奏法とプリペアド・ピアノ～』では、ピアノからさまざまな音が出ることを示すために、内部カメラを設置して大画面に映す演出なども取り入れました。

就職活動の面接では、徹夜で企画書を作り「会社に入ったらこんなことをしたいです!」と伝えたことを思い出します。自社ならではの魅力的なコンテンツをつくるために、社員の意見を取り入れながらゼロから制作する過程は、学生時代のコンサート制作と似ている部分もあります。学生時代に経験したことや学んだことのすべてが、成長の糧になっていると実感しています。

学部科目を受講する学生も多く、たとえばバレエや合唱などは人気ですね。私が担当しているアートマネジメントや映画音楽の授業も、100人中3割は他学部生です。

社会でこそ生かされる教養の学び

——では、音楽の学びは実社会でどう生かされているのでしょうか。一般就職した卒業生が、企業でどのように活躍されているのかも興味深いところです。

2011年に『ピアノ七変化』企画を立てた石塚夕夏さんは、オールアバウト株式会社（生活情報総合サイトAll About運営）に入社し、間もなくその活躍が評価され、全社のMVPにノミ

ネットされたそうです。学部時代は音楽芸術学科科目を幅広く学びながら、ピアノやジャンベ（アフリカの太鼓）をライブで演奏したり、パーカッションもできました（前ページコラム）。

また AKIRA というソニー・ミュージックからリリースしている歌手の卒業生がいるのですが、彼女曰く「一番役に立ったのは、哲学やキリスト教の授業」とのこと。人が長い時間をかけて考えてきたこと、それを学べたのが歌詞を書くときにも役立っているそうです。

音楽はテクニックだけではなく、どのような価値観を持つのかも大事です。これから音楽教育は総合大学でもやるべきだと思っています。

（2015 年 11 月 19 日掲載分）

◆金城学院大学～3 タイプの音楽家を育てる

金城学院大学は 5,000 人規模の総合大学である。教育スローガンの「強く、優しく。」を象徴するような文学部⁵⁾ 音楽芸術学科は、美しい校舎とホールで、現在約 180 名（1 学年約 45 名）が学んでいる。前身は芸術・芸術療法学科であったが、演奏を専門的に勉強したいという学生が増え、次第に音楽芸術の専門ヘシフトし新学科設立に結びついたと言う。将来のキャリアを見据えた実践的な音楽専門科目に、総合大学ならではの教養科目を組み合わせたカリキュラムのもと、学生たちはどのように学んでいるのだろうか。新学科設立の特徴については馬場マサヨ先生⁶⁾ に、地域指導者連携については長谷川淳先生にお話を伺った。

5) 文学部には、日本語日本文学科、英語英米文化学科、外国語コミュニケーション学科、音楽芸術学科がある。

6) 「ピアニストはインナーマッスルが大事です。多くの学生が不必要なところに力を入れて演奏し、肩や腕の痛みを感じています。まずは不必要な力とは何か、またその部分を緩めることがポイントです。また、日本人と外国人は伸筋と屈筋の最初に発動する方向が反対で、それは日常の所作の違いにも表れています。西洋楽器であるピアノを弾くための合理的な動きを習得することによって、痛みもなくなりピアノの技術が格段に上がります。そして何より音の質が美しく変化します。」と馬場先生。



2014 年 8 月にリリーホール完成（200 人収容）。音響は国内トップクラス。このホールでは試験や公開講座、公開レッスン等の授業の他に、学外に向けての演奏会も開かれる。

3 タイプの音楽家像を想定して

〈演奏家育成プログラム〉～1 人を 4 人で指導するユニークな授業

——文学部音楽芸術学科が新設された経緯をお伺いできますか。また〈演奏家育成プログラム〉〈ピアノ指導者育成プログラム〉〈音楽教員育成プログラム〉⁷⁾の三つのプログラムがありますが、それぞれどのような特徴がありますか？

馬場マサヨ先生：3 年前まで人間科学部芸術・芸術療法学科だったのですが、音楽療法を勉強しながらも、演奏をもっと勉強したいという学生が増えてきました。2013 年、文学部に音楽芸術学科が誕生しましたが、文学部でも、語学だけでなく外国の文化も含めて勉強させる方向にさらにシフトするために、音楽芸術学科設立を機に「文学部リベラルアーツ科目群」をはじめカリキュラムの改正を行いました。

三つのコースの特徴ですが、まず〈演奏家育成プログラム〉には 1 人の学生を 3 人の専任教員が指導する「ピアニスト育成特別レッスン」があります。指揮者の小松長生先生、ピアノの長谷川淳先生、私の 3 人が、それぞれ立場と特

7) 〈音楽教員育成プログラム〉は中学や高校の教員を目指す人のためのプログラム。人前で自分を表現することを演劇から学ぶ「エクスペリション・トレーニング」や、中学や高校の校歌や身近な曲を編曲するときに役立つ方法を学ぶ「編曲法」、合唱や吹奏楽をどう指導するかを学ぶ「合唱指導法」「吹奏楽指導法」など実践的な授業が多い。〈演奏家育成プログラム〉〈ピアノ指導者育成プログラム〉〈音楽教員育成プログラム〉の三つのプログラムは複数履修可。



馬場マサヨ先生『『ピアニストの為の脱力法』では、ルービンシュタインも学んだというフェルデンクライス・メソッド等も体験してもらいます』

色を生かした指導をしています（最大8名、最長2年）。普段のピアノレッスン指導とは別の科目ですので、長谷川先生や私の門下でない場合、学生は4人の先生から個人指導を受けるということになります。「ピアノアンサンブル」では、セントラル愛知交響楽団のコンサートマスターの方に、週1回2コマ（1コマ90分）指導頂いています。またチェリストの方にもお越しいただき、ヴァイオリンとのデュオ、ピアノ・トリオ等の室内楽の指導を受けられる科目となっています。プロの方と共演し指導を受けるというユニークな授業です。確実に教育効果が出ています（その他、学生同士のアンサンブルを先生が指導する「室内アンサンブル」がある）。また私が担当する「ピアニストのための脱力法」はピアノの奏法に問題を抱えた学生を対象にしたもので、座り方や手の使い方などに特化した指導をしています。

〈ピアノ指導者育成プログラム〉～地域指導者とタイアップして実習

長谷川淳先生：やはり、長く学んだピアノを生かしたい、将来ピアノの指導者になりたいという学生が多いです。〈ピアノ指導者育成プログラム〉の中の「ピアノ教室レッスン実習」という科目では、地域の優れた指導者や音楽教室とタイアップして、在学中から実習生としてピアノ指導の経験を積み、卒業後すぐに現場に行け



長谷川淳先生×堀井ゆりかさん（大3）
ブラームスの協奏曲第2番、第2楽章は初めてのレッスン。音楽のイメージを明確に持っている堀井さんに対し、長谷川先生の論理的でテンポ良い指導が進む。定期演奏会で『ラ・ヴァルス』を熱演し、コンチェルト出演機会を得たそうだ。現在の履修配分は、音楽6：その他4くらい。「リベラルアーツ科目群では音楽と美術、音楽と文学の繋がりが勉強できます。美術鑑賞授業でボストン美術館展に行ったとき、ドビュッシー『海』初版表紙になった浮世絵（富嶽三十六景より）の原画を見て驚きました。これから自分でも美術館に足を運んでみようと思います」。

るようにしています（全8回32時間、現在12教室と連携）。最初の6回は教室のレッスンを見学、最後の2回は教室の先生のご指導のもと、学生自らが実際に教室の生徒さんに教える機会を作らせてもらっています。生徒さんのレベルはさまざまで、シニア指導やグループレッスンも入っています。また今年から開始した授業「ピアノメソッド概論」ではバスティン・ピアノメソッドの藤原亜津子先生をゲストとしてお呼びする予定です。他にヤマハ、カワイグレード取得のための科目「ピアノ応用演奏」や、「リトミック」なども学生の人気の高い科目です。

指揮者が学生演奏会プロデュース&オケとの連携——2年次必修科目に「芸術学」という授業がありますね。

馬場先生：指揮者で本学専任教員の小松長生先生が担当で、教科書は使わず独自の方法で教えていらっしゃる。「音楽家は哲学を学ぶべし」といつも仰っていますね。特に西洋音楽では、哲学を知らないと何を表現しているか理解できないところがあります。あと、「感動」も大事にされていますね。学問として重要なこと

を伝えても、「感動」という体験をしなければ本物が分からないと。学科の先生はどなたも、音楽の全体をよく知っていて、かつ心から音楽が好きな方たちです。

また小松先生には学生がオーケストラと共演する機会もプロデュースして頂いています。学内の1次、2次試験を突破して定期演奏会に出演した学生の中から、さらに選抜された20名ほどが、セントラル愛知交響楽団と共演する「ガラコンサート」は今年で5回目になります。小松先生（同楽団名誉指揮者）がコンサートをプロデュースする立場から出演者を選び、全体プログラムを考慮してコンチェルトの曲目を決定します。また先生の指導のもとで、学生自身が曲目解説を書きます。

文学部だからこその幅広さも

幅広く学ぶ音楽生、音楽も学ぶ他学科学生 ～文学部リベラルアーツ

——貴学ではリベラルアーツ型の教育が特徴ですね。文学部リベラルアーツ科目群についても教えて下さい。

大学ではピアノだけでなく色々な勉強をしたい、音楽の歴史的背景や文化など芸術全体を勉強したい。そう望んでいる学生が実は多いのではないかと感じています。オープンキャンパスや入試の面接でも、教養科目群に目を輝かせて入学に期待を寄せる高校生が多く、嬉しく思っています。

音楽芸術学部的基础科目としては「芸術学」「西洋音楽史」「音楽理論」など、また文学部リベラルアーツ科目群には「音楽と文学」「ヨーロッパの文化と芸術」「美術鑑賞」などがあります。美術は音楽家にとって必須の教養ですし、「ドイツ文化入門」や「フランス文化入門」はそれぞれ専門の先生が担当されるので、音楽芸術学科の学生も喜んで学んでいますね。

一方、他学科の学生が履修できる音楽科目もいくつかあります。「音楽鑑賞」では、オーケストラ、オペラ、ミュージカル、ジャズ、日本

音楽まで幅広く扱うので、どの学科の学生も好んで履修しています。小松先生によれば、音楽専攻ではない学生の中にも、着眼点の素晴らしいレポートを書く学生がいるそうです。「音楽と文学」は第九の歌詞と音楽がどうリンクしているか等、また「日本と世界のクラシック」は、日本文学や美術の古典作品などをオムニバス形式で学ぶ授業です。

社会で音楽の力を役立てるために

徹底したキャリア教育 ～音楽を通じた学びが一般就職でも強みに

——地域指導者と連携した〈ピアノ指導者育成プログラム〉や、セントラル愛知交響楽団との「ガラコンサート」など、社会と結びついたプログラムも色々ありますね。将来のキャリアについてはどのようにご指導されていますか。

共通教育科目の一つに、「キャリア開発」があり、1年次から、自分は卒業後どの道に進むべきかを考える場が用意されています。企業トップによる講演や、お化粧から身だしなみまでの指導もあり、授業とは別に、キャリア支援センターで個人面談を受けることもできます。卒業後にピアノや音楽の道だけでなく、一般企業に就職できるのも本学の強みでしょう（就職率は県内トップ層）。

水に合ったところに行って、花が開くこともあります。ピアノで頑張ってきた卒業生の一人は、4年次になり、教職の道が本当に自分に合っているのか悩んでしまい、キャリア支援センターへ相談に行ったのですが、そこでの担当者が「彼女は目の輝きがすごい。一般就職もいいのでは」と提案してくれました。最初はとても悩んでいましたが、「ピアノで頑張ってきた自分は、誰より打たれ強い自信がある」と面接でアピールできたようで、大手銀行就職が決まりました。今彼女は現場で生き生きと仕事をしていると聞いています。

——先生方の眼がとても優しいですね。「ピアノニスト育成特別レッスン」など、複数の目で一

一人一人の学生さんをご覧になっているのが伝わってきます。

全教員が全学生を指導することが学科のモットーです。長谷川先生と私はときどき学生の指導を交換しますし、会議でも学生たちのことをいつも話しています。ピアノに限らず、声楽や管楽器の先生方とも話はいつも学生のことで。だから自分の指導生がピアノにつまずいているなど感じるたびに、他の科目を指導する教員から「彼女はこんなに良いレポートを書いている」と聞いて安心できます。転コースも容易にできますので、それぞれの学生が一番幸せになる道を選んでほしいと思っています。

——音楽やピアノを学んだ経験は、一般社会でどのように役立っていると思われますか？

ピアノだけでなく声楽や管楽器も同じですが、訓練を積み重ねて一つのことをやり遂げる力があること。舞台に立つのは不安ですから、その不安を乗り越える勇気と強さがあります。また芸術療法学科の頃からですが、「人のために弾きたい」というボランティア精神もありますね。また他学科の先生に「先生の言葉を素直に聞き入れるのは音楽芸術の特性かもしれない」とよく言われます。企業に入ったときに、まずは「はい」と上司や同僚の言うことを素直に聞けるということは大きな資質になると思います。どの道を選んでも、音楽や演奏を通じて得られた体験が生きてくるのではないかと思います。

(2015年11月24日掲載分)

3. 音楽の可能性をさらに掘り下げて 〜音楽大学

◆東京藝術大学 〜スーパーグローバル大学創成支援認定校に

日本の高等教育機関の国際競争力を高めるため、2014年よりスーパーグローバル大学創成支援事業が始まった（国際競争力を高めるため、文部科学省が重点的に財政支援を行う事業）。採択さ



れた全国37大学中、音楽・芸術関連では唯一の指定校となった東京藝術大学（グローバル牽引型）。教育方針やカリキュラムに変化はあるのだろうか。同大理事・ピアノ科教授の渡辺健二先生にお話を伺った。

日本発音楽家として、海外に出る意義とは

よりグローバルなアーティストを目指して

——東京藝大は芸術系大学では唯一、スーパーグローバル大学創成支援校に採択されました。教育方針やカリキュラム等には変化がありますでしょうか。

スーパーグローバル大学指定校として、世界をリードするような芸術家・研究者を育成することが第一の目的です。藝大は創立当初から世界と関係を持ち、グローバルではありましたが、何かが変わるというより、強化される感じですね。世界第一線のアーティストを招聘し、早い段階から本場の教育（特に実技レッスン）に触れられるようにします。海外からの招聘教授をさらに増やして指導体制を2倍にしますので、学生にとっての刺激は倍増するということです。

ピアノ科の招聘教授陣は、今年（2015年）はジャック・ルヴィエ、ミシェル・ベロフ、ケメネシュ・アンドラーシュの3名で、11月から順次来日し、1〜3週間滞在して、我々と共同で指導して頂きます（期間中には、教員とピアノ科や他科の招聘教授とのジョイントコンサートも開催）。

海外に音楽家・音源を積極的に発信

——「世界で活躍したい」という学生の意識は、以前より高まっているとお感じになりますか？

はい。スーパーグローバルの動きが大学全体に出てきますので、より強く意識するようになりましたね。今までは大学院を休学して留学することが多かったですが、それだけでなく、学部時代に一度留学して、卒業後に再び海外に行くという学生も増えてきています。

また海外大学との演奏交流も増えてきました。昨年は学生数名を韓国に連れていき、韓国芸術総合学校とのコラボレーションコンサートに出演しましたが、先方のレベルも高く、大変刺激を受けたようです⁸⁾。11月28日には韓国から来日しての演奏会が行われます。

また国際企画課では昨年(2014年)から、日本人を海外へ送り出すための企画や、英語プレゼンテーション講座、先輩による体験談、留学相談にも応じています。英語プレゼンテーション講座は大学院生対象で、今年7月には“Introduce Yourself as an Artist”をテーマに実施しました。

さらに、演奏音源も積極的に世界へ発信していきたいと考えています。AppleやAmazon等でもクラシック分野の音源がダウンロード可能になりますし、恐らく来年(2016年)からクラシック分野専用チャンネルも登場するので、藝大のチャンネル設置を計画中です。

日本人も長年、クラシック音楽の学びや経験を積み重ねてきました。西洋で生まれ育った若者と同じではないとしても、日本人としての、韓国人としての、中国人としての、ショパンやベートーヴェンを打ち出してもいいのではないかと思います。ヨーロッパの音楽家からも同じような意見を多く聞きます。

8) 藝大基金(ASAP “Arts Study Abroad Program”)が支援。これはスーパーグローバルをきっかけに新設された奨学金で、教員が企画し、学生が主体的に実行する海外での芸術研修にかかわる。全学部・大学院が対象で、単位認定も有り。事前調査及び実績に基づき、可能な範囲の奨学金を支給する。

海外大学との共同学位も

——積極的に海外に出て演奏交流すること、発信することは大事になりますね。ところで美術学部では共同学位などが進んでいるようですが、音楽学部はいかがでしょう。

2017年秋になると思いますが、リスト音楽院大学院と藝大大学院の共同学位をピアノ科から始める予定です。(藝大生は)1年目は藝大で学び、2年目はリスト音楽院へ留学する形になります。これは日本の音楽大学では初めての試みです。

美術研究科にはグローバルアート共同カリキュラムがありまして、海外から学生10～20人が来日し、藝大生と共同でリサーチや物創りを行い、越後妻有や高松栗林公園など広い範囲でソーシャル・プラクティスを展開しています。音楽ではそのような形は難しいですが、2013年に器楽科弦楽専攻生数名がジュネーブ音楽院で合同オーケストラに参加したように、海外から学生がもっと来るようになれば新しい展開ができそうです。附属高校も今年は台湾での演奏会を行いました。今後も積極的に海外に出るなど、計画はありますので、実現に向けて取り組んでいきたいですね。

——現在、日本で学ぶ外国人留学生はどのくらいいらっしゃいますか？

音楽・美術合わせて160名の外国人留学生がいます。ピアノ科は2名で、私は台湾からの留学生を指導しています。明るく大らかな演奏をする学生で、日本語も半年ほどで習得し、他の門下生ともよく交流しています。藝大の寮に入る留学生も多く(国際交流会館や2014年新設の藝心寮)、地域の方々が「皆で外国人留学生をお世話しよう」と積極的に交流して下さっています。お祭りに呼んで頂いたり、彼らも絵を描いたり、歌やピアノ等の楽器を演奏したり、とても盛り上がっているようです。

——外国人留学生の日本での過ごし方は、日本から海外留学される方の参考にもなりそうです。先生ご自身もハンガリーに留学されていま

したよね。

ハンガリーには5年間留学し、その間ずっとホームステイしていました。休日には親戚や友人宅などに連れて行って頂くなど、いまだに家族のように交流しています。ハンガリー語を話し、その環境の中から感じ取るものが多くありました。学校の中での学生同士の付き合いが中心になってしまうのはもったいないので、私の生徒にもホームステイを勧めています。

才能の早期発掘

——スーパーグローバルとは直接関係ありませんが、飛び入学も受け入れるようになりましたね。

才能を見極めるのは難しいですが、ハードルを高くして選抜します。124単位という卒業要件は一般学生と変わらないですが、カリキュラムはかなり自由に組めるようにする予定です。今後、特に優秀な学生に対しても同じように対応するか検討中です。

専門をきっちり学んだ上で、幅広い教養を

芸術家も基礎教養が大事

——昨今は音楽に限らず、あらゆる分野で教養教育の重要性が高まっています。藝大では才能を最大限に伸ばす環境作りに加えて、この点についてどのように取り組まれていますか？

やはり専門をきちんと学ぶと同時に、幅広い教養を持つことが大事です。まずはさまざまな分野を広く浅く知ること、そこから興味を持てばまた各自深めてもらうのが望ましいと考えています。

2014度、芸術大学における教養教育の在り方について提言を行いました。これは、「歴史を身につける」「社会を識る」「コミュニケーション力を身につける」「自然を識る」「科学的な知識を識る」「他分野の芸術を識る」の6カテゴリから成り立っています。私がセンター長を務める教養教育センターでは、これをベースとしてどう現実的に科目と組み合わせていくか、現

在検討中です。また本学だけでなく、芸術・音楽大学全般を対象に、各大学の方針や個性に沿った形で応用できるよう記載してあります。

教養は芸術そのものを深めるためにも必要ですし、キャリアアップしていくとさまざまな分野の方と話す機会も増えますので、芸術家・音楽家として魅力ある人間であってほしいです。

(2015年11月27日掲載分)

◆東京音楽大学 ～演奏と作曲を同時に学ぶ

昨今、世界各国の音楽院で作曲、即興、指揮等を学ぶピアノ科学生が増えつつあり、国際コンクールでお目にかかることも増えた。日本でもその動きがある。東京音楽大学では2014年度、ピアノ科に「コンポーザー＝ピアニストコース」「ピアノ創作コース」が新設された。配分は異なるが、いずれも演奏と作曲を学ぶコースである。このたび、「コンポーザー＝ピアニストコース」新設に携わった播本枝未子先生、同コース教員の土田英介先生、「ピアノ・創作コース」に関わった武田真理先生、糀場富美子先生にお話を伺った。

コンポーザー＝ピアニストコース

コンポーザー＝ピアニストコースとは？

播本枝未子先生：作曲実技、ピアノ演奏ともにプロフェッショナルを目指すコースです。4年間のピアノ実技のほか、作曲実技と作曲技法という授業があるのが特徴で、ピアノ科に所属するコンポーザー＝ピアニストとして活躍する教員が作曲の指導にあたります。

このコースの目的は作曲家としても通用し、かつ自作のピアノ作品、ピアノを含む室内楽作品を自ら高度に演奏できる音楽家を育成することです。入学時の作曲の試験では、基礎力の完成と高度な次元での自発的な音楽性が求められます。現在このコースに在籍している学生は2年生1名のみです。

構想は15年ほど前から～コース設立に至る流れ

ピアニストであり作曲家でもあったラフマニノフやバルトーク、プロコフィエフ達の活躍し



後列右より 土田英介先生、播本枝末子先生、篠田昌伸先生。前 松坂拓人さん

た年代は、まだ半世紀ほど前のことです。長い西洋音楽の歴史から考えれば、むしろ作曲家と演奏家が分離してしまった現在の方が不自然、と言えるかもしれません。

私がドイツに留学したとき、もう 43 年前の話になりますが、本場の音楽文化と教育は日本のそれとは根本的に異なっていることを痛感させられました。それは音楽の分野だけでなく、同じ頃にドイツに留学した藝大の同期の建築家も同じような感想を持っていました。まだヨーロッパは遠い憧れの地でもあり、今とは隔世の感ですね。5 年半後に帰国したとき、日本の音楽教育をなんとかしなければならぬ！と強く思い、それが福田靖子先生の思いとも繋がっていました。私はドイツに行く前、恩師の故田村宏先生のお引き合わせですでに福田先生と出会っていました。現在のピティナの前身である東京音楽研究会で指導のお手伝いをし、留学中も交流が続いていたので、帰国後すぐにピティナ設立時の活動をし、同時に音楽大学の教育改善にも情熱を注ぎました。両者の活動は日本全体の音楽教育を考えたとき、切り離せないものでしたから。当時は何か使命感のような物に突き動かされていました。その気持ちの上でも福田先生と繋がっていたように思います。

東京音大ピアノ科主任を務めた頃には、すでにコンポーザー＝ピアニストコースの構想を持っていました。そこでまず 2000 年にピアノ科教員として土田英介先生にいらして頂きました。土田先生とはすでに交流があり、彼の作曲

家としてまたピアニストとしての秀でた能力を是非ピアノ科の教育に活かして頂きたいと思ったからです⁹⁾。その後 2002 年に大学院にピアノ伴奏コースを作り、そこに作曲科を卒業してピアニストとしても活躍している人材を集めていきました¹⁰⁾。こうして現在の大学院の伴奏コースとコンポーザー＝ピアニストコースの母体が作られてきたわけです。

現在の大学院の伴奏コースにはこれまでに 100 名以上の修了生がいますが、作曲家としての視点を活かしたレッスンや和声の授業（伴奏基礎演習）は東京音大独自の特徴ある教育であり、これに魅力を感じて他大学の学生や作曲科の学生、既に社会で活躍している伴奏ピアニストも入ってくるようになりました。

学部課程に「コンポーザー＝ピアニストコース」が設立されたのは 2014 年。演奏と作曲を同時に学ぶことへの理解と関心が高まり、ようやく機が熟してきたようです。ここまで来るのにほぼ 15 年かかりました。

ピアニストが作曲を学ぶ効果とは？

作品の意図を理解せずに演奏が成り立たないのは当然ですが、しかしこの当然が当然ではないことが今でも良くあるものです。私の門下にはピアノ科志望から作曲科に変更した生徒や同時に両方を学んだ生徒達もいますが、彼らの成長を見てみると、作曲を学ぶことにより明らかに作品の理解が早くなり、練習時間が短縮され、表現が多様になります。暗譜における心配も激減し、譜面から即、自然に音に変換することが出来る。ピアノだけ学んで弾いている人とは、ピアノ演奏時に使っている脳の部位とバランスが違うように感じます。それについては、脳科学者の古屋晋一先生に研究をお願いしていま

9) 2013 年にはピティナ CrossGiving により、土田英介氏作品 4 曲を浄書、個展にて演奏（『ラブソディ〜ヴァイオリンとピアノのための〜』『ピアノのためのファンタジー第 1〜3 番』。また 2010 年ピティナ・ピアノフェスティバル『ハイドンとモーツァルト』では卓越した楽曲分析を披露。

10) 現在は学部 3 年次からオプションで伴奏授業を履修できる。要オーディション。

す。

私の理想としては、いつかコンポーザー＝ピアニストという呼称さえ不要になり、多様な能力を持ち、世界に向けて発信できる魅力的な音楽家が沢山育成されることです。

実際の授業は？ ～土田英介先生より

土田英介先生：コンポーザー＝ピアニストコースの入学試験には、ピアノ実技と、5時間の作曲実技、和声の試験が課せられます。そして入学後は、ピアノ実技のレッスン以外に極めて高いレベルの和声、対位法、オーケストレーション、自己の創造性を追求した作曲に専念する学習を行います。現在、2年生の作曲実技は篠田昌伸講師¹¹⁾、作曲技法は私、土田が担当して徹底した作曲の個人教育を行っています。これからコンポーザー＝ピアニストコースを目指したい、という方には古典に根差した音楽を創る喜びを知り、高校生のときから和声など作曲の基礎となるものをしっかり学んで頂ければ、と思います。多くの優秀なスタッフが、共に新しい時代を築くべく、多くの皆さんの挑戦を期待しています。

ピアノ・創作コース

「ピアノ・創作コース」とは？

——ピアノ・創作コースを新設された経緯、またカリキュラムについて教えてください。

武田真理先生：最近、演奏と作曲を両方学べることに興味を持つ学生が増えていると感じています。学生のニーズとしては、自在にアレンジできるようにしたい、曲を創りたい、ジャズで即興演奏したい、ヤマハの講師グレード試験を受けたい、などさまざまです。今まででもできる学生はいましたが、より体系的に学ぶためのカリキュラムになっています。作曲・編曲ができれば、演奏・指導現場でも幅広く対応するこ

とができます。

ピアノ・創作コース生は現在2年生に7名、1年生に10名です。ピアノコース生と同じ実技科目をこなした上で、作曲科教員（糀場富美子先生、藤原豊先生、喜久邦博先生）による個人レッスン30分と和声20分の授業を毎週受けます。ですから、ピアノ演奏＋αと考えて頂ければよいでしょう。練習もしなくてはなりませんので皆とても忙しいのですが、コンポーザー＝ピアニストコースの学生（1名）とも仲良く学んでいるようです。附属高校にも同時に新設され、高校1年生2名が在籍しています。

——入学試験ではどのような創作課題があるのでしょうか。

入学試験は自由創作の課題がありますが、それほど難易度を高く設定せず、入学後に学びを積み重ねていく方針です。演奏実技課題としては、ピアノ・創作コースのみの志望者は課題曲を1曲少なくしてありますが、ピアノコース併願の場合は同じ課題です。応募者も多く、2015年度ピアノ・創作コース受験生の中で、半分以上がピアノコースを第2志望としています（第1志望を作曲、第2志望をピアノ・創作コースで受験することもできる）。

——初年度から人気が高いことが伺えます。入学後にコース転向をすることはできますか？

曲を書くというのは大変な作業ですし、やはり演奏に絞りたいという場合はピアノのみに転向することもできます（試験なし）。逆に、ピアノコース生で創作コースに転向希望する場合は、1年間創作を勉強した学生と同じような課題をこなさなくてはなりません。実際に転向する人がいるかは未知数ですが、可能性としてはあります。

——糀場先生にお伺いします。まだ後期の最中



武田真理先生

11) 講師の篠田昌伸先生も、2005年度日本音楽コンクール作曲部門第1位の実績と、ピアニストとして優れた実力を持つ。

ではありますが、作品創作はどのように進んでいますでしょうか。

糺場富美子先生：週1回の創作レッスン（個人）と和声の授業（4人で80分1コマ）があります。創作のレッスンでは、個人差があるので、何が書きたいかを一人一人相談して決めていきます。たとえば、自由な形式で書きたい、変奏の方法やソナタ形式の勉強をして変奏曲やソナタを書きたい、ピアノ独奏曲ばかりでなくヴァイオリンとの二重奏を書いてみたい等々、学生の実力を考えながら、できる範囲で挑戦させています。1年に1曲の提出が義務付けられており、今年5月には前2014年度提出曲での演奏会を開催しました。

また、コードネームの勉強や、ヤマハのグレード試験の準備をしたい学生にも対応したレッスンをしています。和声の授業も生徒一人一人の進度に合わせて個人指導の形を取っており、音楽高校作曲科出身の生徒には現在対位法を教えています。

——作曲を同時に学ぶことによって、ピアノ演奏にはどのような影響や変化が見られますか。
糺場先生：演奏している曲が以前より理解できるようになったという声は聞こえてきますので、分析能力が身についてきていると考えております。また、自分自身が楽譜を書き、作曲することによって、書かれている音符に対してより注意を払い、作曲家が意図したことを汲み取ろうとする姿勢や理解する力を習得することが



糺場先生&ピアノ創作コース生の皆さん

できると考えています。（2015年12月9日掲載分）

❖昭和音楽大学～博士課程&短大社会人コース

昭和音楽大学では、芸術文化の未来を担う人材を育てるため、2014年に博士後期課程（以下「博士課程」と略称）を開設した。神奈川県内の高等教育機関では、音楽分野初の博士課程となる。どのような音楽家・研究者を育てることを目指しているのか。根木昭先生（音楽研究科長 写真左後）、江口文子先生（博士研究指導教授 写真左前）、加藤大樹さん（博士課程・音楽芸術表現専攻1年 写真右）にお話を伺った。



博士課程設置の経緯、研究テーマは？

なぜ博士課程を設置したのか

——博士課程が開設された経緯、また履修カリキュラムを教えてください。

根木昭先生：世界的趨勢^{すうせい}としてDMA（Doctor of Musical Arts）という世界共通の学位を持って演奏活動や音楽教育に携わることは、これからのステータスとして必要なのではと思います。その意味で、表現領域¹²⁾の博士課程の設置は必然の流れと考えてよいでしょう。

また運営領域のアートマネジメントと音楽療法の各コースは、20年を経てようやく成熟期に入ってきたので、修士課程の上に博士課程を

12) 音楽芸術専攻で領域が二つに分かれており、声楽・器楽演奏・作曲分野は表現領域、アートマネジメントや音楽療法是運営領域となる。

設置し、研究者として、また指導者として活動できる人を養成するのが目的です。

定員は4名ですが、現在は1年生が5名（表現領域3名、アートマネジメント1名、音楽療法1名）、2年生が5名（全員表現領域）です。履修カリキュラムとしては、音楽的素養を幅広く身につけてもらうため、14単位を必修にしています。中でも「音楽と学術研究特講」（選択科目、2単位）という領域横断科目は、各領域の教員・学生が集まってオムニバス方式で討論するという特殊な科目と位置づけています。「身体と音楽」「音楽と社会」など、さまざまなテーマを扱います。その上で、表現領域では研究演奏または研究作品（作曲の場合）と博士論文及び試験に、運営領域では博士論文及び試験に合格することが必要です。

博士課程の研究テーマ～演奏表現・ピアノ専攻
——加藤さんはどのようなテーマで研究されていますか？

加藤大樹さん：私は現在、ベートーヴェンの最後の三つのピアノ・ソナタ（Op.109、110、111）を取り上げ、それらを一連の作品として捉えたときに浮かび上がる作品像を、楽曲分析や、日記・会話帳といったベートーヴェン自身の言葉が記された資料をもとに研究をしています。幼い頃から、なぜベートーヴェンの音楽を聴くと、生命を揺さぶられるような希望に満ち溢れたエネルギーを感じるのか不思議でいました。それは彼の天性のものなのか、苦悩と葛藤の人生の故なのか。私にはベートーヴェンが、伝統的な西洋の考え方の枠組みでは捉え切れない突き抜けた何かを、彼の内部に成就しているように感じてなりません。その秘密を探りたいと考えています。

博士課程学生が集まってディスカッション

——江口先生は加藤さんを学部・修士時代からご指導されてきて、博士課程の今をどのようにご覧になりますか？

江口文子先生：急速な時代の変化や伝達手段の多様化にともなってクラシック音楽に関わる私たちが今後どのように学び、伝えていくかということはとても重要なテーマだと思います。博士課程での3年間はこれまで積み重ねてきた研究の仕上げる時間であると共に自己の人格と音楽を確立していく時期だと考えています。加藤さんはこれまでコンサートやコンクールに費やす時間が多く、忙しい日々を送ってきたと思いますが、博士課程に入ってから総合的に学ぶ時間が持てるようになったのではないのでしょうか。昨日も博士課程の学生3人でディスカッションをしました（『音楽と学術研究特講』）。普段はなかなかじっくり話す機会がないので、そのような輪が出来てよかったです。

——豊富な海外経験や日頃から先生や色々な方と接する中で、自分を客観視し、根源的なアイデンティティーに関心が向いてきたのですね（修士課程ではピアノ奏法研究）。その他の博士論文はいかがでしょう。

根木先生：歌の学生では「オペラ史」「イタリアにおけるワーグナーの受容」「歌唱法」などがありますが、表現領域の学生は作品や作曲家を研究対象にすることが多いですね。アートマネジメントでは「地域オペラの振興」、音楽療法では「音楽療法士の専門職性」をテーマとしています。

博士課程は、第一義的には大学の研究者になって頂きたいのですが、最近では博士号を持って多くの方面で活動する人が増えてきています。たとえば国際機関やシンクタンク等で働くことも想定されますし、文化芸術支援団体のプログラムディレクターやプログラムオフィサーなどの新たな職種が出来つつあり、これらの分野での活躍も期待されます。

社会に向けて

アーカイブ事業など～研究成果をどう社会に生かす？

——研究を深め、より調和の取れた社会作りの

担い手として活躍される方が増えてきますね。大学と社会の繋がりという点では、何か新しい動きはありますでしょうか。

根本先生：博士課程の社会との繋がりはこのからの課題ですが、学術研究という面では、大学の付属研究所であるオペラ研究所が、研究活動の一環としてオペラ年鑑を作成しています（文化庁委託事業）。また、オペラ研究所とバレエ研究所は、アーカイブ¹³⁾を構築中です（文科省助成事業。オンラインで一部公開中）。政府の「文化芸術の振興に関する基本的な方針（2012年）」によれば、アーカイブは一か所に集中させるのではなく、各学術機関が特色を出して分散設置という方針を示しています。本学はバレエやオペラ情報についてはアーカイブの拠点になりつつあります。それ以外にも、アートマネジメント研究所、音楽療法研究所、歌曲研究所、ピリオド研究所、音楽教育研究所があり、各専門分野のバックアップを目的として研究を推進していますが、音楽療法研究所などは、音楽療法を通じて社会と密接な関係を持っています。

シニアも続々学び舎に～短大「音楽と社会コース」——アーカイブ構築と研究は、今後ますます重要になりますね。ところで短期大学部には「音楽と社会コース」があるのですね。

江口先生：「音楽と社会コース」はシニア世代の方が多く、在学生には70代後半の人生の先輩もいらっしゃいます。通常は2年間で修了するカリキュラムを3～4年かけて学ぶこともできます（長期履修学生制度）。2015度は2名の方が入学されました。入試面接のときに志望理由をお伺いしたところ、『「音楽と社会」という名前が心に響きました。歌を学びたいので遠くても通います」とおっしゃっていました。感性が豊かで何をどのように学びたいかという目

標もはっきりされていて素晴らしいと思いました。今後はぜひ現役の社会人の方にも学びにいらして頂きたいと思います。

根本先生：博士課程でも、アートマネジメント専攻の博士課程生は、新国立劇場研修所を修了し、1年の在外研修後、現在も二期会を中心に活動中で、地域オペラの振興をテーマとしています。また、音楽療法士としてさまざまな施設で経験を積み、それを続けながら博士課程に入ってきた方もいます。特に運営領域では、社会人あるいは社会経験のある方が多いですね。大学院が、現役の人たちのブラッシュアップの場であるとすれば、「音楽と社会」コースは、一線を退いてもなお向学心に燃えるシニア世代の方たちの期待に応えるものとなっているようです。

——やはり現場経験の中から、「もっと深く研究したい」「もっと現場を良くしていきたい」という気持ちが出てくるのでしょうか。またシニアでも学習・研究意欲に満ちた方がたくさんおられるので、このようなコースが全国的に増えるといいですね。（2015年12月15日掲載分）

番外編 音楽で思考法や創造力を養う ～国際バカロレア認定校

❖東京学芸大学附属国際中等教育学校

昨今日本でも広まりつつある国際的教育カリキュラム「国際バカロレア（IB, International Baccalaureate）」では、芸術科目も重視されている¹⁴⁾。今回は、2010年度より国際バカロレア認定校となった東京学芸大学附属国際中等教育学校にお伺いした。同校は国際的に活躍できる人材を育てるという方針のもと、2014年度にはスーパーサイエンス・ハイスクール、2015

13) 藝大ミュージックアーカイブでは、定期演奏会、モーニングコンサート、海外提携校交流演奏会、大学祭公演などの記録音源・映像などを配信。また学内ではSPコレクションを使ったコンサート、初めてのコンサートを再現した演奏会なども開催されている。

14) IBには現代的な課題を解く力として「芸術運動や芸術そのものと社会とを結び付け、社会にアプローチできる生徒」を、また知識とイメージを自分で再構築する力として「一人ひとりが“アーティスト”として自覚を持ち、表現を追求し続けられる生徒」を育てるという教育方針がある。

年度にはスーパーグローバル・ハイスクールにも採択されている。彼らはどのように音楽を学んでいるのだろうか。音楽科教員の水本肇先生（東京学芸大学作曲科出身 写真）にお話を伺った。



国際バカロレアで音楽を学ぶとは？

どの授業にもディスカッション＆プレゼン——国際バカロレアのカリキュラムを見ますと、各教科の知識だけでなく、その知識をどう活用していくのか、方法論を身につけることが重視されている印象がありますね。音楽の授業はどのように展開しているのでしょうか。

水本肇先生：国際バカロレアのカリキュラムに合わせて、英語も使いますし、ディスカッション（討論）やプレゼンテーション（発表）はすべての授業に入っています。たとえば中1～2の合唱では、“Take Me Home, Country Roads”を教材にして、日本語・英語バージョンを比較しながら、日本語と英語では文法上どのようなズレが生じるか、聴こえ方がどう変わるのか等を理解していきます。たとえば『アナと雪の女王』では、“Let it go”と“ありのままの”の語尾の母音が同じ韻を踏んでいるから良い訳、といった具合です。

高1の授業¹⁵⁾では、サザンオールスターズ『いとしのエリー』とレイ・チャールズのカバー曲《Ellie, My Love》の両方を歌い、ジャンル、聴こえ方、メロディラインの違いや、それぞれどこが良いか・いまいちか、などを討論して発表させます。さらに、オリジナル曲とカバー曲にはどういう違いがあるのか、なぜオリジナル曲以外のアレンジが生まれるのか、レポートを書かせて評価しています。決まった正解はないの

で、自分なりの答えを参考資料なども挙げながら書いていけばOKにしています。高校生なのでなかなか面白い答えがありますね。高2では日本語から英語にアレンジし直して、自分で考えた編成でアンサンブルをしてもらいます。

また入学式には全員で《We are the World》を歌うので、その練習の合間に、ドキュメンタリーやメイキングビデオを見せたり、ディスカッションやレポート作成もします。これは「人を救うには何ができるのか」という探究テーマに基づいています。

楽器演奏

——1曲からさまざまに学びを展開させていく、興味深いアプローチですね。楽器演奏の機会はどのくらいありますか？

楽器演奏は6年間で30%くらいですね。中1は合唱や鑑賞が中心で、中2から楽典を勉強し、リズム演習をします。リズムの書き取り⇒8小節からオリジナルリズム作品を作る⇒自分で創ったリズムをもとにボディパーカッション（手拍子、スナップ、膝、ストンプ、口、など）という流れです。1学期末には、1グループで16小節以上のボディパーカッションの作品を作ってもらいます。

中3は初心者向けギターの授業で、コードを4種類覚えて弾き歌いをします。《Take me Home, Country Roads》はオープンコードだけで弾けるので、これを3学期かけて習得し、学期末試験が終わってから一人ずつ演奏試験を

15) 高1では音楽か美術を選択、高2から自由選択となる。

します。

高1は伝統的な和太鼓の叩き方の型を勉強してから、八丈太鼓で即興リズムを叩かせます。まず全員で同じ2小節の型を叩いたあと、ソロで即興表現をしながら全員一周します。あとはボディパーカッションですね。

IBの学習プログラムは世界共通ですが、世界各国で、その国独特の楽器や音楽を用いてプログラムを実施しています。先述の和太鼓もそうですが、日本も日本人に合うようにローカライズさせるのがいいと思います。文科省的な音楽学習内容も加味しながら、また、入学式や合唱祭などの学校行事なども踏まえながら、MYPの理念やプログラムを中心とした授業を考えています。IBの良い部分と、本来音楽を楽しむという部分をどうバランスよく入れられるかをいつも考えています。

学際的な学びも

——国際バカロレアといえば学際的な要素も含んでいる印象もありますが、音楽と他教科を組み合わせたような授業もありますか？

他教科の要素を取り入れた学際的授業の展開としては、「世界平和のために何ができるのか」をテーマに戦争の悲惨さを訴える動画を作成したり（芸術科×情報科×社会科）、地域のごみでモニュメントを創りいかにゴミ分別のマナーが悪いかを訴えたり（芸術科×家庭科）、『花は咲く』プロジェクトは本当に復興支援に繋がったのかを考えさせるディスカッションもしました。

中1にはいきなり重いテーマだと難しいので、「ショートムービーを作ろう」を課題にしました（音楽科×情報科）。まず音楽科で、BGMや効果音が人間の心理や価値観にどれだけ影響しているのかを勉強したあと、情報科で著作権やモラルなどのメディアリテラシーを学び、映像作品を制作しました。作品発表＋解説プレゼンで、総合的に評価しています。

中1から、このようにテーマに沿って実践的に取り組めるプロジェクトがあるのはいいです

ね。音楽心理や情報リテラシーなどの学びもありますし、完成作品も楽しそうです。先生方が参考として創ったムービーも分かりやすく面白いですね。

国際バカロレアのシステム

どんな人物を作りたいか～まず評価指標・方法ありき

——学生の評価はどのようにしているのでしょうか。

IBの学習は逆向き設計で、単元を設定する上でまず先に目指すべき目標、達成すべき目標があります。「この目標があり、こういう評価をしなくてはいけないから、こういうプロセスが必要……」と考えていきます。生徒には「今回の単元はこの観点とこの観点を使います¹⁶⁾。満点を取るにはこれだけできてほしい」という表を最初に見せます。参考として、模範作品や昨年の生徒事例などを見せることもあります。MYPは実技だけでなくレポートなどの提出物が多いですね。

——IBカリキュラムに従って、実際の授業の進め方、教材の選び方、質問内容などはすべて先生が考えるのですね。

はい。IBは答えがない探究型で概念的な学習が中心です。重要概念（Key Concept）、関連概念（Related Concept）、グローバルコンセプト（Global Concept）がありまして、それを踏まえながら、各教員が探究的質問（Inquiry Questions）を考えます。こちらは参考例です。

①事実に応えられる質問：ジョン・レノンとオノ・ヨーコはどのような活動をしたか？

②概念的な質問（少し考えないと議論できない質問）：芸術運動は社会にどのような影響を与えるのか？

16) 観点

観点A 知識と理解（最高8点）学期末テスト、ワークシート、基礎的な作品

観点B 技能の発展（最高8点）作品・実技テスト

観点C 創造的思考（最高8点）Inquiry Questions に応えるレポート（ディスカッションや小論文など）、グループワーク

観点D 鑑賞（最高8点）DW（プロセスの記録と振り返り）、相互評価

③議論を喚起する質問（答えのない質問）：芸術は世界を平和にすることが可能なのか？

——本質的な質問を考えるのは簡単ではないですが、そこがとても大事で、作曲科出身の先生ならではの創造力が発揮されていると思います。IB カリキュラムで育った卒業生の進路についてお伺いできますでしょうか？

これまで3回分の卒業生を出しましたが、ハーバードやイエールなど海外大学に合格する

卒業生も出ています。先日学校説明会で卒業生何名かに、「IB カリキュラムが今どう活きているのか」を尋ねたところ、大学のレポートや課題が難なくこなせて簡単に感じるほど、とのことでした。来年から DP（国際的に通用する大学入学資格の取得を目指すディプロマプログラム）が始まりますので、より海外進学が増えていくのではないかと思います。（2015年12月21日掲載分）

第6章

ライフスタイル&ボディの観点から ～自分を開き、社会を開く音楽

1. 表現する身体を創る

「表現したい！」という気持ちは誰にでも備わっている（菅野恵理子執筆「社会的観点から～表現する力」『今こそ音楽を！』2015年、第1章第1回）。自分に合った表現方法を知り、学ぶことによって、より伸びやかに、細やかに、自らを表現できるようになる。最近では自己表現の場が多様化し、今や誰でもステージに立てる時代になった。一生を通じて、何百回、何千回も人前に立つこともあるだろう。自分の内面をより掘り下げて表現するため、また音楽をより深く理解して表現するため、表現する身体を小さい頃から作っておきたい。

身体を動かすと、音楽が身体の内に入っていく～ロシア・フランス・日本の事例から

子どもの頃から音楽を身体の中に取り入れること。これはすべての土台になる。この考え方はおそらく世界共通である（写真 2014年度A2級受賞者記念演奏会より）。



たとえばロシアでは音楽、バレエ、フィギュアスケート、新体操に至るまで、世界的に活躍する優れた人材を数多く輩出しているが、身体の動きはいつでも音楽に美しく寄り添っている。小さい頃から、音楽と身体を一体化させる教育をしているようだ（参考：菅野恵理子執筆「イメージを膨らませて～ロシアの幼児音楽プログラム」『ロシアのピアノ教育から学べること』2015年、第4回）。

フランスでは、音楽院に入学するとまず、ソ

ルフェージュや表現することを学び、そして個々に合った楽器を決める。バレエ学校でも基礎練習の他、表現力を学ぶ時間があるという。音楽をまず身体の中に入れ、歌ったり、動いたりしながら、音楽を身体全体で捉えることを重視している（菅野恵理子執筆「芸術性を高めるソルフェージュを目指して」『子供の可能性を広げるアート教育・フランス編』2009年）。

身体を動かすことが、音楽理解に効果を発揮していることを示した実験がある。あるフランスの小学校で行われた聴取実験“Musique & Mouvement a l'école”（Simonne Marques 著）によれば、現代作品やドビュッシーの前奏曲「アナカプリの丘」（第1巻第5番）を、1回目は音を聴くだけ、2回目は音に合わせて身体を動かせたところ、児童の一人は「1回目は自分が音楽を“見ている”感じ、2回目は音楽に“触れている”感覚がした」そうだ。身体を動かすことによって音楽が内に入っていく、能動的に感情移入するようになる。著者は「動きは単に、よりよく音楽を理解するための手段、というだけではなく、むしろ音がどう鳴っているのかを正確に知るための方法なのである」と結論づけている（菅野恵理子執筆『「感」から「知」に変える音楽の聴き方～フランスの小学校で行われた実験』『子供の可能性を広げるアート教育・フランス編』2009年）。

自然に音楽を体感し、理解するリトミック～日本の事例より

このような考え方を体系化した教育プログラムの一つが、スイスで生まれたリトミックだろう。音楽に合わせて身体を動かすことによって、リズム感、拍子感、表現意欲など、さまざまな力を自然に身につけていく。ではリトミックをピアノレッスンに繋げていくためにはどうしたらいいのだろうか。それをテーマにした講座が



2015年4月に開催された。

300名以上の生徒を抱える石黒加須美先生の教室（ピティナ評議員、名古屋支部長、一宮ステーション代表）では、リトミック、音感教育、ピアノレッスンを組み合わせた総合的な音楽教育を行っている。「細かい指先より、大きく身体で表現した方が、音楽が自然に身に入っていきます！」と先生は力強く語る。たとえばド→ミは単なる「音の移行」ではなく「時間・空間・力の移動」であり、身体表現によって、音楽的な意味を体感しながら理解できるという。そこで石黒先生の教室では、学齢別に習得させたい能力を決め、さまざまな動きを音楽と連動させながら身体に働きかけていくそうだ。

たとえば年少向けの発表会プログラムは『こうえんにいこう！』というお題で、虫を探そう、滑り台をすべろう、噴水を見つけた！などの場面を想定しながら、ピアノの音の高低を聴き分けてポーズを取ったり、リズムを聴き分けて反復したり、強弱を聴き分けて全身で音楽を表現させる。想像の世界の中で、子供達は自由に遊びながら即時反応を行っていく。それによって集中力や判断力とともに、大きな声で堂々と歌う、歌いながら踊る（複数のことを同時にする能力）、広い舞台を大きく使うなどの能力が自然と身についていくそうだ。



全身をのびのび動かすことに慣れてくると、身体の動きや意識の向け方も少しずつ複雑になってくる。年中の生徒さんは、指先への意識や状況をイメージする力を鍛えたり、チームごとにオリジナルポーズを創作したり、小1の生

徒さんは、友だちと違う方向へ動いたり（判断力）、人と違うリズムパターンを考えたり（独創性、責任感）、ボディパーカッションのアンサンブルに挑戦。小2になると、ハーモニーやフレーズなど音楽の各要素を視覚化したり、感情を伝える目線や表情を考えたり、他人と違う動きと音でアンサンブルをするなど、次第に高度になっていく。

リトミックに慣れてきた小3の生徒さんは、さまざまな道具を使いながら、自由な発想力や即興力に挑む（『工場で生まれる音楽』）。各グループが異なるリズムを同時に鳴らしたり（ポリリズム）、同じ曲の拍子を変えてビートの違いを感じたり、相手を良く聴く力やフレーズ感覚への働きかけも増えていく。最後は小ロンド形式の『タイプライター』を合奏してフィニッシュ！

音楽と身体の動きを連動させながら、学齢に応じてさまざまな能力を身につけていくプログラムが素晴らしい。また学年が上がってくると、チーム全体をまとめたり、分からない部分を教えてあげたりと、リーダーシップも発揮するようになってくる。実際、生徒さんには生徒会長や学級委員長なども多いという。身体の使い方や意識が高められると、音楽はもちろんのこと、日常生活も変わってくるようだ。何より、子どもたちの身体が伸びやかで、笑顔も晴れやか！音楽を生き生きと感じて伝える身体を、小さい頃から育むことが大事だとあらためて感じる。

身体を動かすことは、脳にも良い影響がある。特にピアノを弾くと脳の構造が変わるという研究結果も出ている（菅野恵理子執筆「脳科学の観点から～澤口隆之先生インタビュー」『今こそ音楽を！』2015年、第3章第1回）。

なぜ表現する身体に、人は感動するのか

では表現する身体が究極に磨き上げられるとどうなるのか。なぜ人はそれに心を動かされるのだろうか。身体とはその芸術や競技で最高のパフォーマンスを発揮するため、それに見合った所作に進化していく。

誰でも「究極の身体を体現するためのメカニズム」を持っているが、使っていないだけである。アーティストやアスリートはその芸風や競技に合わせた「究極の身体」が出来上がっており、いわばその「メカニズム」を体現した人である。レギュラーの身体ではそれを能動的に発動はできなくとも、受動的に感知することができる。だから達人芸を見たくなり、見ると感動するのだという。

(高岡英夫著『究極の身体』講談社＋α文庫、2009年、p.251)

また身体の動きは、自らが関わる事象が最適化されるように進化するだけでなく、事象そのものが開かれていく契機にもなる。たとえば、指揮者井上道義氏を被験者として「身体の動きが音楽とどう結びついているのか」を調べた実験がある。筆者は結論をこのように導き出した。

音楽というアートは、音響の次元に閉じたものではなく、それを演奏する身体に対して開かれたもの、いやむしろ身体によって開かれるものであるということが出来る。(中略) 実際、井上による多義的な身振りは、彼の身体が彼独自の仕方でも楽曲の構造と結びついていたことになる。

(佐々木正人著『アート／表現する身体～アフォーダンスの現場』東京大学出版会、2006年、p.105～106)

表現するものに対して身体が深くコミットするほど、身体の動きそのものが「音楽を語る」ことになるのだろう。と考えると、身体の動かし方を身につけることは、それにどう関わるかということに深く結びついている。

脳科学者の黒川伊保子氏は、幼少期の音楽教育に関して次のように述べている。「楽譜を贈り物だと思って、ワクワクしながら一つ一つの

音に出会ってほしいですね。そのときに身についた身体性はブロックのピースで、ずっと何か作るときの基本の形になります。そのブロックのピースの形を多くするためには、感動とともに身体を動かしていくことが大事ですね」(参考：菅野恵理子執筆『『子ども脳』がもつ無限の可能性』『子供の可能性を広げるアート教育・フランス編』2009年)。

さらに物事を習うときには、プロの所作を目の当たりにすることが重要という。身体とはそれだけで、さまざまなことを語っているのだから。

(2016年1月22日掲載分)

2. ワーク・ライフ・バランスを柔軟に

皆さんはいつ頃から現在のライフスタイルになっただろうか。第4章でご紹介したように、1日の生活時間は1次活動(睡眠、食事など消費活動)、2次活動(仕事、家事などの社会活動)、3次活動(余暇、自由時間)に分けられるが、その配分は、時代・年齢・職業等によって異なり、個人のライフステージによっても変化する。統計によれば、過去25年で3次活動が増えているそうだ。余暇時間を充実させることで、仕事を含めた生活全体に好影響があると実感されてきているのではないだろうか。つまり、ワーク・ライフ・バランスへの意識が高まっている。

また音楽・芸術活動そのものが2次活動である場合、音楽家または指導者として独り立ちするにはまだ経験や知識が足りない、育児中で十分な時間が取れない等、さまざまな過渡期にいる若年世代もいるだろう。そこでスキルを身につけながら、または他の仕事と掛け持ちしながら、少しずつ音楽家としてのライフスタイルを確立していくという考え方もある。ピアノや音楽に関わる皆さんは、どのようにライフスタイルを築いているのだろうか。



グランミュース G 級全国決勝大会

本業とピアノを両立

眼科医・医学研究者であり、2014年には世界初のiPS細胞（人工多能性幹細胞）治療の臨床チーム責任者を務め、iPS細胞による世界初の移植手術も執刀した栗本康夫さん。京都大学・大学院在学中に京都大学音楽研究会を中心に演奏活動を行うが、卒業後はピアノを中断。40歳を過ぎて再開した後、2009年ピティナ・ピアノコンペティショングランミュースB2部門第1位、2014年国際アマチュアピアノコンクールA部門第1位、2015年PTNAピアノコンクールグランミュースG級全国入選など、数々のコンクールで優れた成績を収められています。どのような生活を送っているのでしょうか？

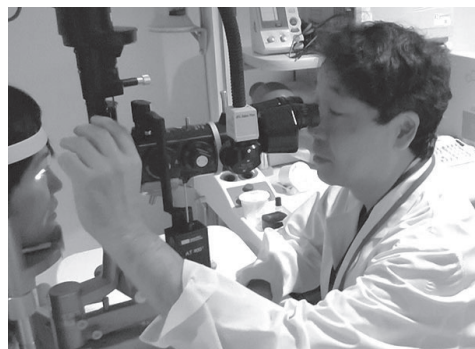
——毎日どのくらいピアノを練習されていますか？ 普段のお仕事の様子も教えてください。

普段の平日は、朝7時過ぎに家を出て8時前に勤務先の病院に入り、20時頃に病院を出て21時頃帰宅するのが日常です。ピアノは毎朝出勤前に、約1時間練習しています。出張や当直等で練習できない日も少なくないので、平均すると1日あたり40～50分くらいでしょうか。本番が近づいてくると、通勤等の移動中（主に歩いているとき）に頭の中で楽曲を再現し、暗譜の確認などを行っています。

仕事は眼科医としての臨床業務がメインで、

朝の病棟診察から始まり、外来、手術などの診療に追われますが、二つの病院（神戸市立医療センター中央市民病院と先端医療センター病院）の眼科部長としてさまざまな管理的業務や総務的な雑務もあります。また、iPS細胞治療開発をはじめ、臨床研究の仕事にも力を入れており、動物実験のために隣接する神戸理研にも出入りしています。週末は土曜日朝の術後回診に加え、学会や研究会、出張講演などの仕事が入る日が多く、正味の休日は少ないです。また、平日だけではデスクワークが追いつかないので、休日に自宅で仕事をすることもあります。そういう意味ではオン・オフの境が曖昧な生活をしておりませんが、ピアノに向かうときだけは、完全にプライベートなオフの時間と言っても良いでしょう。

臨床医の本懐は患者さんのために診療でベストを尽くすことにありますが、手術をした患者さんが良く見えるようになって喜んでもらえるという臨床医冥利につきます。また、部門管理者としても医学研究者としても意義のある仕事に携われて幸せであると感じています。仕事は概ね順調で、なにがしかの社会貢献ができていてと感じられますし、仕事以外には協目もくれないという生き方もあるでしょうが、私の場合はピアノを続けることで人生がより豊かになっているという実感があります。



普段の診察風景

——医師・研究者として、社会的に責任ある立場でお仕事をされている中、ピアノ練習時間を

確保するだけでも大変なことと思います。現在の時間配分やライフスタイルはいつ頃確立されましたか？ 試行錯誤された時期はありましたでしょうか？

社会人アマチュアのピアノ仲間には、就職を機にピアノをやめてしまったが40歳を過ぎてから再開したという方が多いのですが、私も同じでした。大学院卒業後、仕事に忙殺されピアノは中断しておりましたが、時間に余裕ができたアメリカ在住中に再開、しかし、帰国後はまた弾いたり弾かなかったりの日々。仕事から帰宅して夜遅くに練習しようとしても、疲れ果てていてなかなか練習できるものではありませんでした。7年前にあるきっかけがあって、毎朝早起きして練習する習慣を身につけました。当初は毎朝15～20分くらいでしたが、徐々に起床時間を早くして、現在の毎朝1時間のスタイルになったのは2～3年前からです。仕事を持っている社会人アマチュアの場合、時間のあるときに練習するというスタイルでピアノを続けるのはなかなか難しいように思います。それでも素晴らしい演奏が出来てコンペでも優秀な成績を上げている友人もいますが、彼らは中高生までに音大ピアノ科進学者並みのしっかりとした基礎が出来ている方々や、音楽的基礎力が特別に高い人に限られます。普通の社会人アマチュアの場合、コンスタントにピアノに向かう時間をどう確保するかが重要では無いかと思います。

私自身のピアノライフにおいても、毎朝ピア



アメリカでの講演風景

ノに向かう習慣を身につけた事はとても大きかったと思います。たまたま、その頃に「想いが行動を生み、行動が習慣を生む。習慣が品性を変え、品性が運命を変える」という言葉に出会いました。プライベートライフに限定すれば、運命が変わったと言えなくもありません。そして、将来、仕事をリタイアしたあとの人生については本当に運命を変える事になるのかもしれない。

——そのお言葉が説得力を持って響いてきます。本業以外に自己表現や交流の時間をもつ持つとは、生活全体にどのような影響があると思われますか。

実感として、生活の糧を得るためあるいは世のため人のためという意識でやっている本業とは別に、ただただ好きでやっているだけの自分の世界を持てるのはとても幸せな事で人生を豊かにしてくれると思います。

ピアノ仲間との交流もとても貴重です。お互いに何の損得勘定や打算もなく、ピアノと音楽が好きだというだけで繋がっている仲間との交流は格別なものですし、演奏を聴いたり聴いてもらったりすることは、しばしば言語によるコミュニケーションでは得られない素晴らしい深い心の交流をもたらします。ピアノは独りで弾いていても十分に楽しいのですが、ピアノ演奏を通じての他者とのコミュニケーションはさらに大きな喜びをもたらしてくれます。

目下、仕事に追われる日々ではありますが、少々無理をしてもピアノを続けていることが自分の人生に奥行きと広がりをもたらしていると感じます。いずれ本業をリタイアした後は、ピアノが自分と社会との繋がりや生活全般においてより重要な役割を果たすであろうし、アマチュアなりの立場からピアノを通じてごくさやかな社会貢献できるのかもしれないという予感も持っています。(2016年1月28日掲載分)



ランチタイムに演奏する道嶋さん

音楽家の両立支援

さまざまな能力を発揮して働けるように、夢を支援

「夢を持って働きたい!」「音楽を一生の仕事にしていきたい!」と多くの人が願う一方で、どのようにしたら実現できるのかと不安や迷いを抱える例も少なくない。そこで大手総合人材サービス会社パソナでは、派遣という働き方を活用しながら、音楽家・芸術家の活動を支援する「パソナ・ミュージックメイト」という事業を2006年から行っている。同社では創業以来、音楽家・芸術家支援や舞台制作などさまざまな文化創造事業を手掛けている。どのようなサービスを展開しているのか、同事業ユニット長の道嶋彩夏さんにお話を伺った。

「現在約1,500名が登録し(うちピアノは2～3割)、毎月約200名が派遣で就業されています。音楽と仕事を両立したいという方や、最終的に音楽に専念したいが、音楽活動だけでは十分に生計を立てられないので、仕事を続けながら夢の実現に向けて励まれている方など、さまざまなステージの方がいます。たとえば、『ピアノ教室の生徒がまだ10名ぐらいなので、週2日ほど働ける場がほしい』『土日は音楽活動をしているので、平日残業のないお仕事したい』という方には、その方に合った仕事を案内します。中には、派遣のお仕事をしながら音楽活動を続け、数年後に音楽に完全にシフトされた方もいました。将来的に独立を目指している方には、この仕組みを上手に活用しながら、目

標にたどり着けるようにお手伝いできたらと考えています。夢を諦めることなく、それぞれの才能や能力を活かして誰もが生き生きと活躍できる社会の実現を目指しています」。

「パソナ・ミュージックメイト」では、「就労支援」と「音楽活動支援」を柱に事業を展開。「音楽活動支援」では、自主的にコンサートを開催したい方に同社内のホールを演奏場所として提供したり、セルフプロモーションなどのスキルを学ぶセミナーも開催している。また同社で企画したイベントや顧客から演奏依頼を受けることもあり、ミュージックメイトのスタッフに演奏の仕事を依頼することもあるそうだ(『ラ・フォル・ジュルネ エリアコンサート』、『ローズフェスタ ローズコンサート』出演など。自主・外部企画を含めて年間800～900件)。

Wキャリア研修プログラム～社員として音楽・仕事を両立

さらに、音大卒や大学院卒など新卒生対象の「Wキャリア研修プログラム」がある(研修期間は1年間。毎年数名入社)。契約社員としてフルタイムで勤務し、ビジネス経験を積みながら、仕事の一環として、同社ロビーで行われるランチコンサートで演奏も披露する。



社屋ロビーにあるピアノ

「ピアニストには演奏ができるだけでなく、自分を上手に演出したり、マネジメントすることも求められています。1年間で集中的にビジネススキルを学びながら、今後の音楽活動にも活かすことができるスキルを身につける場を提

供しています。大半は人材サービスの現場での仕事に携わっています。また通年でキャリアカウンセリングを行っており、修了後は、①音楽家として独立、②引き続き音楽と仕事を両立（契約社員を継続、あるいは音楽活動の配分を増やしたい場合は派遣スタッフへ移行）、③音楽業界への転職など、の三つの道があります。1年継続して、2～3年目でのキャリアチェンジする方が多いです。ミュージックメイト社員として働くことによって、社会の流れやビジネスの基本、コミュニケーションについて学んでもらい、ビジネスの中で得られた経験をご自分の音楽活動にも活かして頂きたいですね」（道嶋さん）。

そう話す道嶋さん自身も東京音楽大学音楽教育学科を卒業後、Wキャリア研修プログラムを通して、2010年にパソナに入社し、現在はミュージックメイト事業のユニット長を務める。どのような意識を持って働いているのか、音楽や社会に対する考え方に変化はあったのだろうか。

まず社会に出て、プラスαのスキルを身につけたい——入社のきっかけを教えてください。また、入社前と今ではどのように意識が変わりましたか？

道嶋彩夏さん：「将来はピアノ教室を開きたい」と大学在学中から考えていましたが、すぐ独立することには躊躇してい



道嶋彩夏さん

ました。社会がピアノ教室や音楽教育に何を求めているのかを考えたときに、すぐに答えが出なかったのです。また、自身でピアノ教室を運営していくために、演奏や指導のスキルだけでなくプラスαのスキルも磨きたいと思い、まず社会に出ようと決めました。

——一般社員と一緒に働くことで影響を受けたことはありましたか？

入社1年目は人材サービスの営業部門から役

員のアシスタントまでさまざまな業務を経験しました。その1年で音楽家としての自分の甘さを痛感しました。たとえば、音大で学んだ私よりも西洋音楽史に詳しい社員がいたり、ずっとクラシックをメインに学んでいたため、「ジャズのこの曲を弾いてもらえますか？」という依頼に応えられずもどかしさを感じたこともありました。自分で演奏できるジャンルや範囲を決めてしまうのではなく、音楽家として周りからの幅広いニーズに応えていきたいと思うようになりました。

——レパートリーの広げ方も変わりましたか？

はい。ポップスの曲も弾けるようになりましたし、譜読力もつきました。パソナではイベントが多く、急遽「明日この曲を弾いてもらえないか」と相談を受けることもあり、臨機応変に対応できる能力も身につきました。どこまでできるのか、どこは譲れないのか、それを見極めて音楽と触れあっていくことが大事だと思っています。私自身が音楽と仕事の両立というダブルキャリアの働き方を実践することで、一緒に音楽家の方々の夢を応援したいですし、まだ経験していない後輩にも伝えていければと思います。

——社会に出てさまざまな経験を積んだ今、ピアノ指導者に求められていることはあらためて何だと思いますか？

もし自分がピアノの先生になるとしたら、音楽を学ぶことでその生徒がどう変化していくのかをしっかりと伝えていきたいと思います。ピアノを学ぶことのゴールは先生や生徒によって違うと思いますが、私自身はピアノを学ぶことが生徒自身のアイデンティティを確立するための一助になればと感じています。演奏することは、テクニカルな練習はさることながら、その曲が出来た背景や作曲者の生きた時代についていろいろな書籍や資料をもとに自分なりに解釈した上で、自分という演奏家はその曲をどう表現するのかを深く追及していく作業だと思うからです。グローバル化が進む中で、自身の

アイデンティティーを確立し、発信していく能力はとても重要であり、またそれを表現する手段は言葉だけではなくっていると考えています。だからこそ、ピアノを学ぶ中で表現力を培うことは、生徒のその後の人生をより豊かにするのだと伝えたいです。

私は音大卒業後に、民間企業であるパソナに入社したからこそ、「社会の中での音楽とは？」という視点を持つ意識が芽生えました。「パソナ・ミュージックメイト」では、ピアノ指導者の方のみならず、若手の音楽家・演奏家の方がこうした視点を持つことで、社会のニーズを的確に把握することができ、その方の活躍に繋がっていくのではないかと考えています。

(2016年2月3日掲載分)

3. 身体を見直して、演奏と生活習慣の向上を

第6章第1回目では、表現する身体を小さい頃から創ることについて述べた。身体は日々変化する。奏法や生活習慣によって、ちょっとした動きの癖や身体の歪みが生じることもあるだろう。身体を見直し、思う通りに演奏できるようにするにはどうすればよいか。そこで、音楽家のための身体作りについていくつかご紹介したい。アレクサンダー・テクニクがよく知られているが、今回は最近注目されているボディ・マッピング[®]、姿勢や気の流れに着目したエクササイズ、また昨年設立された音楽医科学研究センターのキックオフ・シンポジウムについて



リポートする。

脳科学をベースにした新しい身体教育ボディ・マッピング

脳科学をベースにした新しい身体教育

音楽身体教育コナブルのボディ・マッピングは、演奏の妨げや故障を誘発する動きを排除し、自然な動きを導き出すことによって、パフォーマンスを高めるために開発されたメソッドである。脳科学をベースにしており、自身の脳の中に描かれているボディ・マップ（身体地図）を自覚し、適宜修正していくことで、思い描く音楽表現を習得していくものだ（参考：ボディマップ・ネット）。

東京音楽大学では3年前から、アンドーヴァー・エドューケーターで同大講師の長井芽乃先生による「身体表現と音楽」が通年開講されている。まずボディ・マッピングの基礎概念や身体構造を学び、自身の正確なボディ・マップを知った上で、さまざまなエクササイズを通して、自分の動作を修正していく。長井先生の2014年度論文（長井芽乃著『音楽身体教育コナブルのボディ・マッピングによる演奏へのアプローチ』東京音楽大学、2014年）には、ボディ・マッピングの授業で学生自身の身体の絵を描いてもらい、半年間で自己認識がどう変化したかが紹介されている。

では実際の授業はどのように行われているのか、2015年度最終授業を取材させて頂いた。

“ひめトレ”（同授業ではストレッチボールをこのように呼んでいる）という細い棒を置いて座り、まずは動きの中軸となる「背骨」のエクササイズから。大切なポイントを説明しながら、一つ一つの動作をゆっくり、丁寧に行っていく。「腕は鎖骨から伸びている」「指先は背中から動いていて、それを体幹が支えている」「上腕と肩甲骨は接続している」……ということを意識するだけで、明らかに動き方が変わってくる！

さらに「上腕と肩甲骨が連動している」ことを確認するために、二人一組になって同じ方向

に座り、腕を前後に動かしたり（黒鍵と白鍵の間を移動する）、左右に動かしたり（広い音域を移動する）、交差させるなど（両手を交差して弾く）、ピアノやオルガンの奏法を一人が行い、もう一人が肩甲骨を触ってどう動いているのかを確認した。「え、こんなに動いてるの!」とビックリする人も。

またひめトレを両手に持ったまま、手を前に伸ばしたり、首・顔・頭の上に持ってきたり、逆手に持ち替えたり、左右に並行移動させたり、目線だけ逆方向に向けたり、内腿にはさんでぐっと力を入れたりしながら、体幹や筋肉を鍛えていく。

「呼吸」も、背骨と同様に重要である。腕は胸郭に乗っているので、呼吸は腕の動きに密接に関わっているそうだ。決してお腹に力を入れるのではなく、第一肋骨まである肺の全体に息を入れ、すーっとはきながら弾くと、柔らかく流れるような音色になる。これもぜひ覚えておきたい。

「足裏」も見逃せないポイント! 実はここが演奏時に大きく関わってくることが後で分かる。長井先生いわく「指先に何か起きたら、遠い場所を疑って下さい」。そこでまた二人一組になり、手を組んだまま引っ張り合いをして、足裏をぐっと床につけるエクササイズも行われた。

「音を聴いただけで骨格が見える」

授業の後半は、一人一人今練習している曲の冒頭を弾いて、先生からアドバイスが与えられた。長井先生は「音を聴いただけで骨格が見える」(!) そうで、一言一言が的確で、その通りに弾き直してみるとたしかに音が変わる。特に多く見受けられたアドバイスは、「足でしっかり支えるように」



「内股になったり、ひざが不安定にならないように」「足指の角度を変える」「ひめトレの上に座って下半身をしっかりと支え、あーっと声を出してみる」「呼吸を整える」など、足に関することが多かった。足がしっかり地についていれば、上半身をもっとリラックスさせて柔らかい演奏ができる。

意外と上半身だけで弾いてしまいがちだが、「いつも身体全体を見て下さい。それが心の安定にも繋がります」と締めくくられた。

長井先生はご自身のケガをきっかけに身体への関心が高まり、さまざまな学びを経て、ボディ・マッピングと出会ったそうだ。最近気になるのは、若年世代の身体機能が低下していること。「昔は座ったときの姿勢がそり気味の人が多く、またしっかり弾きすぎる傾向がありましたが、今は丸腰が多くて緩んでいます。体温も下がって、冷え性の子が多いですね。学生自身も『弾き出したら身体が上がってくる、浮ついてしまってた下らない』と自覚しているように、鍵盤に指がしっかりタッチできない現象が見受けられます。またバリアフリー化やトイレの洋式化など、世の中が身体にやさしくなり、日常生活の中で身体が育たなくなってきました。ですから授業ではスクワットなど、さまざまなエクササイズを採り入れています」。

そのような課題に取り組みつつ、実際の楽器演奏と連結させるための工夫がなされている。演奏するときに骨や筋肉がどう動いているのかを具体的に知覚してもらうために、長井先生はボディ・マッピングの理論をピアニスト用にアレンジ。「個々の動きだけでは伝わらないので、それがピアノのどの動きに繋がっているのかを伝えています。1限から約3時間の授業ですが、ほとんどの学生が続けて出席してくれて、皆の気持ちが



だんだんと集中してきているのも感じられました。さまざまなエクササイズを通して、身体が変わったと実感してくれていれば嬉しいです」。

学生自身、それぞれ大切な気づきがあったようだ。「ペダルの足の角度一つ変えるだけで音が変わったり、座り方を変えるだけで弾きにくい部分が弾きやすくなったり、またそれを他の曲にも応用できるようになりました。また普段の練習、緊張の克服、本番前の準備や食事の取り方、終演後の疲労回復法まで教えて頂いたので、とても勉強になりました」(松本悠里さん/1年)。

「楽器のメンテナンスはしますが、自分の身体のメンテナンスはあまりしていませんでした。でも疲れをきちんと取るようになって弾きやすくなりました。また演奏は指先だけでなく、身体全体のことだと気づきました」(渡邊礼華さん/2年)

身体への意識は世代によっても異なり、20歳以下の世代にはまた新たな変化を感じているという。初等・中等教育のあり方も大きく関連しているようだ。今後さらに、身体の研究は教育現場で活かされていくだろう。

(2016年2月9日掲載分)

美しい姿勢と気の流れを学ぶ

美しい姿勢や所作は、ピアノ演奏のすべてに関わる。前回に引き続き「身体を見直して演奏の向上を目指す」ために、二つの事例を紹介したい。



金城学院ピアノ科教授の馬場マサヨ先生は、ご自身の経験と学びをもとに、美しい姿勢の整え方を研究。西欧人と日本人の生活習慣の違いが、力の入れ方や奏法の違いにつながっているというのは、目から鱗が落ちるような気づきだろう。ピアノ科学生にどのような指導をしているのか伺った。

「どこの力を抜けばいいのか」が分からない!?
馬場マサヨ先生：合理的で美しい身体の動きを習得することによって、音の質は変化します。「音が浮く」と言われても使うべき筋肉の場所が分からない、「力を抜いて」と言われてもどこを抜けばいいのか分からない。「ピアニストのための脱力法」(1年次後期)の授業では、無駄な力を抜くことの重要性を教えるとともに、どこに力を入れるべきなのか、また力の方向性についても学んでもらいます。一人一人の学生に向き合い、問題がどこにあるのか、具体的にその箇所と理由を説明すると、何が無駄な動きなのか分かってきます。また、すべての事柄は姿勢に深く関わっていますので、姿勢を直すことは自分自身の可能性を開くことなもつながります。

ピアニストはインナーマッスルが大事ですが、アウターマッスルに力が入りがちなので、それを緩めるのがポイントですね。これができると、美しく座ったり、美しく歩くことが出来るようになるので、授業ではウォーキングの練習もします。また寝転がって足で床をけて、動きがゆっくり上半身に移っていくのを味わうフェルデンクライスというワークも取り入れています。骨の動きに沿って動かしてあげると、固まって動かないところまで緩んで動くので、その感覚を覚えてもらいます。

日本人と外国人は、身体の使い方がすべて「逆」

私は昔腰痛持ちだったのですが、演奏中の姿勢が「前に傾きすぎている」と指摘されたことがきっかけで、自分の姿勢を見直すようになり

ました。藝大に通っていた頃、「野口体操」の野口三千三先生の講義を受け、それが私の指針になりました。また合気道の先生である高岡英夫さんが「ゆる体操」を提唱しています。この先生にも大変素晴らしい学びを頂きました。

「日本人と外国人は伸筋と屈筋、最初に使うのが反対」これは新しい発見でした。たとえばナイフやのこぎりを扱うとき、日本は引くときに力を入れますが、外国人は押すときに力が入る。刀は一度力を引きますが、フェンシングは伸ばしたままです。箸とフォークの持ち方、ひらがなとローマ字の筆記体にしても、手首の使い方が違います。私は学生にわかりやすいように、日本人ははじめに屈筋を使う「^{くわ}鋏型」、西洋人ははじめに伸筋を使う「スコップ型」(写真下)と言って教えています。ピアノは西洋楽器ですから、鋏を使うようではなくスコップを使うような力の方向性で身体を使う方が楽に良い音が出るのです。

授業名は「脱力法」となっていますが、本当



は「力の入れどころと向きが違う」ということを伝えたいです。知ってしまえば簡単なのですが、私も長い間気がつかず、勉強を重ねてきた末に出会いがあって初めて気づきました。学生たちも今までやってきたことを覆すので習熟には時間がかかりますが、この原理に気がつくと変わります。

授業で取り入れているフェルデンクライス・メソッドの創始者、モーシェ・フェルデンクライスはフレデリック・マサイアス・アレクサンダー(アレクサンダー・テクニック創始者)とほぼ同時代の人で、メソッドの趣旨も似ています。ヨーロッパでは、交通事故の後遺症で腰を痛めた人などの治療としても使われています。演奏家の技術向上のためのワークとしても効果があるものとされ、アルトゥール・ルービンシュタインも学んでいました。授業を受けた本学科の学生も、抜けなかった力が抜けてとても弾きやすくなったという声がたくさん上がっています(馬場マサヨ著『「目からウロコのピアノ奏法」～オクターブ・連打・トリル・重音も即克服～』ヤマハミュージックメディア、2012年)。

呼吸と身体を整え、“気”の流れをよくする

“気”や“意識”という目に見えないものにフォーカスし、身体全体をほぐして手に気を集中させることによって、音や音楽の質を変えていく。新井眞澄先生によるセミナー『身体と呼吸を整えると演奏が変わる!』が昨春、東京で開講された。その様子をレポートする。40年以上にわたり野口整体を最高幹部指導者から伝授され、その体験と教えをピアノ奏法に結びつけたメソッドで、ベルリン藝大でもさまざまな国籍の学



セミナー受講後に。後方左より、ピアニストの井村理子さん、安田正昭さん。中央は講師の新井眞澄先生

生に好評を得ていたそう(ベルリン藝術大学で

は、グループ形式で各自演奏したあとに身体の調整を行い、最後に演奏をしてその変化を観察し、年1～2回ホールで演奏会を開催)。

身体の動きや気の流れ方を整えると、いかに演奏が変わるか

この日は、筆者を含む3名の受講生を対象に行われた。まず一人ずつ弾いて現在の状態を把握して頂いたあと、さまざまなエクササイズを実践し、そのたびに演奏して経過を観察した。共通課題として「身体の中に“気”を流す」ためのイメージトレーニングや、野口整体を踏まえた背骨の意識、腰の入れ方、身体の重心や軸の置き方、身体の中を動かすなど、ピアノを弾くための身体の使い方を実践しながら学んだ。

「今どのくらい身体に気が流れているか」を先生が瞬時に見極められ、言葉一つで余計な意識が取り除かれ、腕から手にかけて気が通り、本来の姿が立ち現れてくる。筆者の場合は最初やや緊張していたのが、特に「入場→お辞儀をするエクササイズ(演奏する曲をイメージしたテンポで入場し、何かが訪れたと感じたときに頭を上げる)」や“背骨・腕全体を動かすエクササイズ”などで、次第に身体がほぐれてリラックスしてピアノに向かうことができた。またラフマニノフの前奏曲 Op.32-12 冒頭 *p* で始まる右手のパスセージが、肩甲骨のある部分の開き方に気を付けるようアドバイス頂き、そこを意識することによってより自然に安定して動くようになった。一緒に受講したお二方も、「眼をお腹に入れる」などのアドバイス一つによって、音や表現がぐんと伸びやかになっていた。

また合間のティータイムも、“口に含んだお茶や吸い込んだレモンの香りが、腕を通して指先まで流れるように”というイメージトレーニングや、二人一組で相手の気の流れを読み取るなど、興味深い時間になった。

自分の身体の中で“気”を巡らせることは、自分を信頼して、ピアノに、聴衆になじむことに繋がり、聴き手とのラポール(信頼関係)を

築く上でも大切。またピアノを弾く身体を作るということは、身体を見つめ直し、整えることでもあり、日常生活においても意識が変わると実感した。同形式で行われていたベルリン藝大でのセミナーでは、ピアノ科、演奏家コース、ときにはディプロマコースやコンセルヴァトワールの才能ある生徒も含まれ、ピアニストのセドリック・ペシャ氏(2002年ジーナ・バックアウワー国際コンクール優勝、ジュネーブ大学教授)もその一人。“気”という一見東洋的な考え方だが、どの国の人にも通じることだとあらためて感じた。(2016年2月22日掲載分)

音楽医科学の発展へ

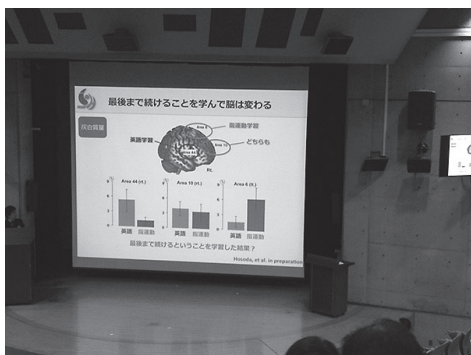
「音楽家のためのサイエンス」～キックオフシンポジウムより

昨年、アジア初となる「音楽医科学研究センター Musical Skill and Injury Center (MuSIC)」が上智大学に新設された。センター創設者で研究長を務めるのは、脳科学者の古屋晋一先生(右写真)。ハノーファー音楽演劇大学音楽生理学、音楽家医学研究所を経て上智大学理工学部准教授に就任、このたび研究センター設立の運びとなった。

その主旨は、「音楽家のためのトランスレーショナルリサーチ」を行うこと。アジアには優れた音楽家が数多く輩出されているにもかかわらず、音楽に関する科学的研究はあったものの、音楽文化の担い手である演奏家に関する学術的研究はほぼ皆無であった。一方世界では、ドイツをはじめとするヨーロッパ、アメリカ、オーストラリア等では研究が進められている。

そこで同研究センターは、①技能の解明、②練習法や治療法の開発、③教育現場での実用化という三段階で研究を進める方針だ。音楽家のQOL(Quality of Life クオリティ・オブ・ライフ)





向上のため、医・工・芸連携をしながら、日本独自の研究開発に期待が集まる。

2015年12月20日に同大で行われたキックオフ・シンポジウムでは、藤村正之氏（上智大学学務担当副学長）、古屋センター長の挨拶に続き、研究者4名による最新研究発表が行われた。

「学んで変わる脳」（花川隆先生）では、脳の学習メカニズム研究の変遷に触れながら、最新研究では、最後まで続けることを学ぶことで脳が変わること、また音楽を学ぶことで運動、聴覚ネットワークが変わることが紹介された。

「音楽家のジストニアと脳」（北佳保里先生、上原一将先生）は、クラシック演奏家にジストニアが多いこと、罹患率はピアニスト50～100人に1人であること、また小脳の過活動の有無でジストニア発症患者を判別する研究例を紹介。今後の治療法開発に期待がかかる内容となった。

また「音大生の脳：演奏に必要な皮質・線条体ネットワーク」（田中昌司先生）では、桐朋学園大学生と上智大学生の線条体ネットワークを比較。前者が後者に比べて体積が小さくなって

おり、脳に必要なものだけが残る刈り込みが行われ、演奏家に適したネットワークが構築されていると発表された。音大生はすでに演奏に適した脳に最適化されているようだ。

フォーラム後半はがらりと雰囲気を変えてコンサートの時間に。まさに科学と音楽の融合が、目の前に立ち現れた瞬間だった。まずは佐藤圭奈さんと尾崎有飛さんによるデュオから。ともにピティナのグランプリ受賞者であり、ハノーファー音楽演劇大学留学仲間でもある二人は、チャイコフスキー『くるみ割り人形』（抜粋）とラヴェル『ラ・ヴァルス』を、華麗なテクニックと息の合った演奏で会場を沸かせた。またチェロの長明康郎さんとピアノの古屋絵理さんと、サン・サーンス『白鳥』、シューマン『幻想小曲集』等がしっかりと演奏され、会場は優雅な雰囲気に包み込まれた。また最後に同センターのメンバーを務める播本枝未子先生（東京音楽大学教授）より、「この研究が音楽だけでなく、人類すべてに貢献すると確信しております」と力強い言葉で締めくくられた。

悩みを抱えるピアニストや演奏家を治癒するだけでなく、効果的な練習法や教育のあり方を考える際にも、科学が果たす役割はさらに大きくなるだろう。音楽医科学センターに大いに期待が高まるキックオフとなった。

（2016年2月29日掲載分）

4. 生活空間・自然環境に溶け込んでいくステージ

人の感性は、環境によっても磨かれていく。近年ピティナ・ピアノステップの全国展開などにより、「いつでもどこでも」ステージに立てる環境が整ってきた。さらにはご自宅にサロンやホールを構えるピアノ指導者も少しずつ増え、生活空間がそのまま音楽空間へとつながるようになった。また音楽空間がそのまま自然空間へとつながるような、開放的なステージやホールも見かけるようになった。音楽は、どん



サロンで演奏するシューベルト

どん外へ開放されてきている。

生活空間の中にステージ ～広まりつつあるサロン文化

親密な音楽空間といえばサロンだ。サロン文化が花開いた19世紀、シューベルトはサロンで友人知人を前によく演奏を披露した。文豪ゲーテの自宅には客人が集まるサロンがあり、ギリシア彫刻やレリーフのレプリカが並ぶ中にピアノが置いてある。ここでクララ・シューマンが演奏したり、子供時代のメンデルスゾーンが一夏を過ごし、その思想に感化を受けている。またショパンもサロンでさまざまな芸術家と交流し、ジョルジュ・サンドに出会い、類い稀な音楽が生まれた。生活空間の延長にあるこじんまりとした親密な空間だからこそ、より細かい音楽の波動が伝わってくる。

近年、日本もヨーロッパのようなサロン文化が生まれる土壌が整いつつある。ピティナ・ピアノステップや地元密着型コンクールが全国各地で行われ、人の移動も迅速になり、いつでもどこでもステージに立てる環境が整ってきた。そして昨今では、自宅にサロンを構えるピアノ指導者や演奏家が少しずつ増えている。ピアノに関わる人であれば、自宅にホールを持つのは夢だろう。自らコンサートやセミナーを企画・出演したり、音楽を通してコミュニティを結びつけたりと、その可能性は大きい。たとえば、ピティナ録音コンサートやピティナ・ピアノス

テップの会場としても活用されている。全国に先駆けて、自宅ホールで公開録音コンサートを行ったのは、大阪の中西利果子先生（大阪・池田フェリーチェステーション代表）。

岡原慎也先生（大阪音楽大学大学院ピアノ研究室主任教授）を迎えての録音コンサートは好評を博し、2008年以來シューベルティアードのシリーズが続いている。また指導者対象セミナーやステップが随時開催されるほか、チューリヒ・トーンハレ管弦楽団メンバー（石橋幸子さん）を迎えてのヴァイオリンコンサートやアンサンブルステップ、ウィーン国立音楽大学教授（山田佐和子先生）によるコレペティレッシン、お弟子さんの海外留学や進学を応援するための演奏会や、ご自身も出演するアンサンブルの演奏会も企画。最近では「フェリーチェホール歌の会」というグループも結成し、声楽の先生を迎えてのレッスンには、遠方からの参加者もいるそうだ。さらにはクラシックだけでなく、ジャズ、フォルクローレ、タンゴまで、多彩なアーティストが出演している。



では中西先生がホールを作ったきっかけとは？ 以前からご自宅レッスン室でコレペティのレッスンにウィーンからお呼びしていた三ッ石潤司先生（現・武蔵野音楽大学教授）と、「いつかぜひ皆が集まれるホールを！」と夢を語り合っていたそうだ。そして今から10年前、ご主人のクリニック開業にあたり、その2階にコンサートホールを新設した。患者さんを招待する無料コンサートを開くこともあるという。コミュニティの中にある、華やかでアットホームな音楽の空間。まさにヨーロッパのサロンのようである。

また京都の松田紗衣先生（京都アトリエステーション代表）のご自宅にあるサロンは、天井の高い開放的な間取りに、お父様が制作された彫刻作品が並び、そしてスタインウェイが置かれているというアーティストックな空間だ。ここでは2009年にステップ、2012年には金澤鼎氏による公開録音コンサートが開催されている。また千葉の根津栄子先生（市川フレンドステーション代表）宅のサロンでは、セミナーやコンサートを開催したりと活発である。さらに深谷直仁先生（安城あさひステーション代表）のホールも本格的で、貸し出しもされているそうだ。

自然環境に溶け込んでいく建築デザイン

海外のコンサートでは、ホール内にいても自然の存在を感じる場が多い。たとえばザルツブルクのモーツァルテウムはステージ後方がガラス張りで、外の風景が素晴らしい背景となっている。フランスでは毎年6月の夏至の日が「音楽フェスティバルの日」に指定され、町中のあらゆる場所がステージになる。そのフィナーレを飾るのが、ルーブル美術館のホワイエである。まだ薄明るい22時からパリ管弦楽団のコンサートが始まるが、ガラスピラミッドから差し込む光が、だんだんと夜景が変わっていくさまはなんとも見応えがある。自然の移ろいとともに、時間芸術である音楽を楽しむのも、また一興である（参考：Fête de la Musique 音楽と戯れる



ルーブル美術館ガラスピラミッド下のホワイエでコンサート！

1日)。

昨今日本でも、ステージ背景がガラス張りになっているコンサートホールを見かけるようになってきた。たとえば江東区豊洲文化センターや大阪のザ・フェニックスホールなど（このようなホールもある→兵庫県 三木山森林公園音楽院ホール、なら100年会館）は、四方が壁に囲まれた従来型のコンサートホールではなく、ガラス張りで周囲の環境と馴染むようなデザインである。屋内の音響、野外の光と開放感、二つを兼ね備えている。同じ音楽を聴いても、なんとなく気分が開放的になる。また外からも見えることによって、内側の音楽空間が感じられるのもいいものだ。

内と外が有機的につながっていくこと。これは最近の建築物にも言えることで、自然環境との調和・共存を考えたデザインが多くなっている。家づくりにしても、光、熱、風など、その



毎年「ラ・フォル・ジュルネ」エリアコンサートの会場となる丸ビル1階

コラム 環境を生かすデザインの思想とは？

未来の生活空間をどうすればいいのか？自然環境とどう共存させればいいのか？そんな大命題に50年前から取り組んでいるデザイン会社がある。フォスター+パートナーズはイギリスを中心に、全世界で持続可能性を持ち環境にもやさしいデザインを手がけている（フォスター+パートナーズ展、六本木・森美術館）。その土地の自然、環境、文化、歴史的文脈を汲みつつ、そこに最も見合った建築物をデザインするため、自然の光を最大限に採り入れ、重量的負荷を軽減した素材を用い、環境を消耗しないエネルギーの使い方を開発してきた。

たとえばよく知られているのは、大英博物館のグレートコート。自然光をふんだんに取り入れたガラスの天窗や、中心部にある円形図書閲覧室（1857年）を上手に生かしたデザインで、歴史への敬意、自然環境との調和、来館者への配慮、経済性、

独創性（3,000枚以上あるガラスの形状がすべて異なる）と、すべてを満たすデザインである。自然や天然資源との調和は、サステナビリティの象徴である。人が人らしく生きるのに、自己表現の場が必要だとすれば、生活空間の中に音楽やアートの空間が入ることは、自然な流れになるのではないだろうか。

※同社には、ベルリン自由大学、ドイツ連邦議会新議事堂、南仏のワイナリー、香港の西九龍文化地区、アブダビの未来都市マスターシティなどのデザイン実績がある。



大英博物館のグレートコート
©British Museum

土地ならではの自然環境や気候を有効活用し、省エネでサステナブル（持続可能）なデザインが見直されているという。これを「パッシブ・デザイン」と呼ぶそう（飯田祥久著『医師、弁護士、大学教授……知的富裕層が選ぶ先進的健康住宅』幻冬舎メディアコンサルティング、2016年、p.54）。

周囲の環境となじむ音楽の場が、これから増えていきそうだ。（2016年3月8日掲載分）

音楽は古代から、コミュニティや社会の中で、人と人をつなげたり、人を癒す力を発揮していた。現代社会においても、音楽の世界だけにとどまらず、もっと開かれた環境でその潜在能力を発揮する 때가 きている。今回は、早くから音楽や芸術のソフトパワーに着目し、多様な人材を活かしている企業を紹介する。

これからは文化が企業の価値に

芸術文化が新しい産業に

——貴社には、音楽人材を生かし、その活動両立を支援する「ミュージックメイト」などの事業がありますが、音楽や芸術をどのように捉えていらっしゃいますか。

南部靖之氏：音楽や芸術など文化産業がこれからの新しい産業として成長していくだろうと思います。そして、今後ますます“ソフトパワー”

に注目が集まり、新しい雇用を生んでいくでしょう。また、音楽家、芸術家のような多種多様な人材が企業の中で働くことで、いわば化学反応が起こり、社員もより生き生きと活躍できるようになる。社会や企業が文化的なものを建設的に取り入れる



パソナグループ代表・南部靖之氏。ピアノと青田に囲まれたロビーにて。

ることが、結果として音楽家の支援になり、音楽活動とオフィスワークのダブルキャリアで働くことができる環境づくりにも繋がっていくと考えています。

「社会の問題点を解決する」を企業理念にしているパソナグループでは、雇用創造に挑戦し、さまざまな方々が自分の能力・才能を発揮できる機会を提供するため、文化・芸術活動にも取り組んでいます。30年前からオーケストラのコンサートやミュージカルの企画・制作、若手音楽家たちの活躍の場を創出し、2006年には音楽家・芸術家の両立支援事業「ミュージック



緑にあふれる社内。オフィスビルはグリーンカーテンに覆われている。

メイト」をスタートしました。音楽を志す社員も多く、社内にはピアノが何台も置いてあります。

私自身も1日の時間を4分割して、6時間は人に会ってインプットする時間、6時間は講演等のアウトプットの時間、6時間はピアノ、和太鼓、タップダンスなどを行っています。また週1回はコンサートや演劇を観に行くようにしています。25年ほど前にハーバード大学長宅でのパーティに参加したときの事です。アイビーリーグの優秀な学生が10人くらいいたのですが、一人がピアノを弾き始め、二人が社交ダンスを踊り始めました。ふと気がつくと、日本人二人だけ何もしていない。そのとき、「文化の深みが人間の価値を作っている」という一番大切なことを感じました。

——そのご経験が生かされているのですね。貴社の緑や音楽に囲まれた環境も素晴らしいと思いました。

社内には事業所内保育所として「パソナファ



ミリー保育園」がありますし、特例子会社のパソナハートフルでは、障害をもつ社員が200人ほど働いていて、いつも彼らが作る手作りの無添加で体に優しいパンを食べています。美味しいですよ！ 社内にはスポーツマンもいれば、音楽家もいれば、美術家もいる。多様な人材が多様な働き方で活躍していることによって企業の総合的な価値が決まる。単に文化というだけではなく、それが「力」だと考えています。

人は夢を持っている、企業の可能性は人！

——ミュージックメイトの社員と一般の社員と一緒に働くことによって、社内に変化はありますか？音楽家にはどんなポテンシャルがあるとされますか？

一人一人異なる能力を持つもの同士が集まることで、化学反応が起こり、それぞれ違った効果が生まれてきます。社会では、めまぐるしいスピードでIT化が進んでいますが、一方で多くの人々は癒しを求めています。パソナグループでは、社内で毎日ミュージックメイト社員によるコンサートを開催していますが、美しい音楽を聴いてもらうことによって、社員の心身の健康にも繋がり、結果、業務効率にも繋がっていくと考えています。

今、企業も文化を育てる時代になっています。売上や規模だけではなく、どのような人材が働いているか、どれだけ事業が社会に貢献しているのか、そのような指標も評価されるようになっていきます。人は夢を持っています。夢は人に帰属します。国の力も企業も皆同じです。力に長けた人は知的な人に負けるかもしれないが、知力のある人は人間味の深みのある人には負ける。文化という深みのあるものが、その企業の力になっていくでしょう。

(2016年3月14日掲載分)

5. 社会で音楽を生かす新しいコンテキスト

音楽で心の支援をする

アメリカでは以前から「音楽を社会問題解決のために生かす」という考え方がある。音楽にはどんな資源があり、社会でどのように役立てることができるだろうか。日本でも昨今アウトリーチなどがよく行われているが、その他にはどのようなコンテキストがあるだろうか？

音楽家による社会貢献活動の一つ、ピティナ CrossGiving が始まって5年。これまで多くのプロジェクトがピアノ指導者や音楽家の支援によって成立してきた。その原動力になっているのは、「社会をよりよく変えていきたい」という願い。それは音楽業界だけでなく、一般社会にも届いている。東北の被災地支援活動から、いくつか近況をご紹介します。

支援は楽器から音楽へ～「被災地へピアノをとどける会」

庄司美知子先生が実行委員長を務める「被災地へピアノをとどける会」は、2011年東日本大震災後まもなく活動を始め、全国各地から寄贈されたピアノを被災した学校や施設などに届けてきた（2016年2月現在462台）。多くの音楽家はその活動に共鳴し、全国のピアノ指導者（CrossGiving等）や、堀米ゆず子、アルゲリッチ両氏をはじめとする海外のアーティストやピアノ教授等も支援を惜しなかった。中には、同世代同士で励まし合う姿も。大阪・中之島フェスティバル（朝日新聞社主催）では、出演した高校ブラスバンド部生たちの希望により、収益金でピアノが購入され、岩手県立釜石高校に贈られた。同校の学生と庄司先生がラフマニノフ協奏曲第2番（2台ピアノ編曲版）を演奏し、そのピアノをお披露目したという。また昨年は映画『物置のピアノ』の舞台になった町、福島県桑



折町の公立施設にも寄贈された。

この5年の間に、子ども達はピアノを心の支えとして、少しずつ夢に向かって歩み始めている。音楽大学進学を果たしたり、将来保育士になって地域に貢献したいと勉強を始めたり、最近では、庄司先生が審査した気仙沼のコンクールでレベルも上がり、音楽に膨らみがでてきたことに感激したという。再びピアノに向き合い、ステージに立つことが、どれだけ子どもたちの心を支えたことだろう。仮設住宅に電子ピアノを設置し、歌を歌う会を結成しているところもあるそうだ。

住宅や楽器など物理的な復興が進みつつある一方で、「音楽がない」という町も。「今後は音楽を届けたり、レッスンなどもしていきたいですね」と庄司先生。「楽器」支援から「音楽」支援へ。心の復興とともに、東北に眠る才能が力強く生まれ出てくるかもしれない。

地元と一緒に創り上げる ～『逢えてよかったね友だちプロジェクト』

ピアニストの小原孝さんは、震災翌日に『逢えてよかったね友だちプロジェクト』を立ち上げた。これもクロスギビングの一つである。震災直後にレコーディングしたCDの売上で被災地に楽器や楽譜を届けたり、被災地で無料コンサートを行ってきた。その中で特に大切にしているのは、地元の方と一緒に作り上げること。コンサートでは地元合唱団と共演したり、演奏会チラシやチケットを地元の印刷会社で印刷してもらったり、ホールの協力を得たり、楽器支援も地元楽器店で購入して贈るという形を取るなど、必ず地元経由の活動にしているそうだ。2015年6月大槌町でのコンサートでは、音楽によって再び立ちあがろうとする力が呼び覚まされるような、そんな雰囲気包まれていた。



誇りをもって前進するために ～『音楽セラピープログラム』

音楽で、子どもたちの自信を取り戻したい。音楽と一緒に英語も学ばせたい。クロスギビングではないが、そんな一例をご紹介したい。相馬市出身ロサンゼルス在住の音楽療法士、狩野多美子さんは、震災直後にNPOを立ち上げ、音楽を用いて英語や自然環境を学ぶプログラムを故郷で展開中である（『笑顔のなる木』『音楽セラピー・プログラム』）。音楽を通じて心身ともに健康になり、環境を学び、さらに音楽と共存する地域を創ることをめざしている。

「音楽療法よりも、“音楽を使って学ぶ”というかたちでやさしく入っていければと思います。音楽会と英語、音楽とアカデミック・スキルを組み合わせたプログラムで、音楽を楽しみながら自然に語学を学んでももらえたらいいですね。」

『笑顔のなる木』というNPO名は、福島の子供達が大人になったときに、福島県民であることを誇れるようになって欲しい、夢を持って

育ってほしい、という願いをこめてつけたそう
だ。さらにはこのプログラムのノウハウを広げ、
雇用を創出できたらとも考えている。

また2015年は「親子で楽器作りを体験する
音楽会」と題し、国産杉の間伐材を使ってペ
ルーの打楽器カホンを作り、全員で演奏する
というワークショップを開催した。約2時間の共
同作業の後は、「トトロ」や「情熱大陸」など
を大合奏！ 子どもたちの絵入りのカホン2個
は、アメリカでオークションにかけて活動資金
にし、これから県内の幼稚園や小学校を中心
に広げていきたいとしている（一般社団法人「笑顔
のなる木」主催、森林環境教育を展開している「カホ
ンプロジェクト」協力）。 （2016年3月31日掲載分）

音楽で創造力を高める

音楽で創造力も鍛えられる。創造といっ
ても、必ずしも作曲というわけではない。無から
有を生み出す力だとすれば、自ら新しい手法を
見出したり、新しい視点や価値を発見する力も
含まれるだろう。ここで英国の事例をご紹介し
たい。

一人一人が主体的に音楽に関わってもら
うにはどうしたらよいか、一人一人の創造力を引き
出すにはどうしたらよいか。英国では音楽を一
般の人にも広く親しんでもらえるように、さま
ざまなプログラムが開発されている。その一例
として、イギリス人作曲家による音楽ワーク
ショップ・リーダー育成トレーニングが昨春東
京にて開催され、プロの音楽家、オーケストラ
奏者、音楽教育者など約15名が参加した（ブ
リティッシュ・カウンシル主催）。

エクササイズは一見簡単そうに見えるが、ど
れも頭を創造的に使うもの。たとえば、リズム
やメロディをアレンジしながら、隣の人へ受け
渡ししていくエクササイズをご紹介します。全
員が輪になった状態で、まず一人がメロディや
リズムのパターンを提示し、隣の人とはそれと共
鳴させたり、同化させたり、対比させたり、補
完したり、性格を変えたり、拍子や長さを変え



たりしながら、音の素材を発展させていく。途
中、静寂の瞬間（タンバリンで作る波のような音）
があったり、ビートがなくなったり、ピッツィ
カートが入ったりと、多様なアレンジが次々に
生まれていった。

またいくつかのグループに分かれた状態で、
リーダー役が中央で指揮を執り、グループ毎に
音を出し入れしたり、強弱やリズムを追加したり、
ソロを挿入したりというエクササイズも。参加
者の一人で「ピティナ・ピアノステップ待ち
時間ワークショップ」の経験もある方は、積極
的にリーダー役を申し出て、各グループにタ
イミング良く指示を出しながら、音楽に生き
生きとした表情を与えた。さらにグループ毎
にリズムパターンとメロディパターンを創作し、
最後はそれらを融合させながら全員で合奏！
音の素材が組み合わせたり、作品としてまと
まっていくなプロセスは見事だった。まさに
音楽をクリエイティブに活かし、楽しむこと
を体感できるプログラムである。

ワークショップ主催者のフレイザー・トレイ

ナー氏は「どんな国や文化で育った子でも、どんな音楽の趣味を持った子でも、創造力や想像力を引き出すことができると思います。そのための考え方の枠組みや進め方の手順を、ワークショップリーダーが提示することが必要です。今回のように、さまざまな楽器の方が参加されるのがいいですね。お互いに持っているものを共有したり、学びあうなど、一緒に進めていくとする姿勢が大事です」。

イギリスではプロの音楽家や音楽大学・総合大学、そして小学校などでもワークショップを行っており、参加者は他の科目も成績がよいという。自分で考えたり、相手の音やアイディアに耳を傾けて能動的に応じることで、クリエイティビティ（創造力）が引き出されているのだろう。

音楽の良さは、1音からでも、どの年齢からでも、参加できることにもある。イギリスにはオーケストラを含む芸術団体による高齢者対象のワークショップもあり、それによって抗精神病薬が軽減されたり、認知症予防になったり、孤立していた高齢者がコミュニティに戻ってきたり、実質的な成果が出ていることが報告されている（参考：菅野恵理子執筆「音楽の見えない価値とは？～高齢者×アートの取り組み、および社会的インパクト研究（英国）」『今こそ音楽を！』2015年、第4章第4回）。音楽療法という範疇を超えて、音楽による潜在能力の開花・再活性化ともいうべき積極的な考え方だ。

音楽と社会をつなぐコンテキスト（文脈）は



2015年度2台ピアノ初級金賞の福田孝樹・瑞貴くん兄弟



2015年度グランプリ・篠永紗也子さんによる室内楽演奏（ピティナ入賞者記念演奏会より）

まだまだある。それを考えることが、音楽のポテンシャルをさらに生かすことになるだろう。

（2016年4月1日掲載分）

6. 他の世界ともつながる、音楽の豊かなポテンシャル

2014年春から始まった「今こそ音楽を！」連載も、本記事で最後となる。あらためて、音楽にはどんなポテンシャルがあるのかを考えてみたい。

音楽には、人と人、人と社会、社会とそれを取り巻く自然など、あらゆるものをつなげる役割がある（参考：菅野恵理子執筆「身体を見直して演奏の向上を～音楽医学の発展へ」『今こそ音楽を！』2015年、第6章第3回／「生活空間・自然環境に溶け込んでいくステージ」『今こそ音楽を！』2015年、第6章第4回）。そしてそこには、つながるためのコンテキストや人がいる（参考：菅野恵理子執筆「社会で音楽を生かす新しいコンテキスト」『今こそ音楽を！』2015年、第6章第5回）。では、どんなレベルのつながり方がありうるのだろうか？

他者とつながる

他者とつながるといえば、アンサンブルだ。2015年、ピアノ・コンペティションのデュオ部門が大幅再編され、連弾プレ初級や2台ピアノ協奏曲カテゴリが新設された。またピティナ・ピアノステップでは、アンサンブル総数が過去5年で約1,200組増加。中でも、アンサンブル活動の継続意識が強いと思われる団体登録者

は、過去5年で2倍以上に増えている。また兄弟姉妹での連弾や、ファミリーアンサンブルなど、身近な人と一緒に楽器を弾く習慣が、少しずつ広まっている兆しを感じる。一番身近な人に、耳を開き、心を通わせる。そんな音楽の役割が見えてくる。

早くからアンサンブルの教育的効果を唱えてきた江崎光世先生（ピティナ理事、課題曲選定委員長）は、1980年代にピアノ連弾部門を提唱した。今はデュオ部門として、着実に参加者が増えている。兄弟・姉妹・友人デュオとして小さいころから連弾を重ねてきた門下生たちは、ソロでも活躍している（写真）。

他楽器、他世代、他国とつながる

お互いに呼吸を合わせ、音を注意深く聴きあい、ともに音楽を作り上げる相手は、同じ世代や国籍とは限らない。アンサンブルの醍醐味は、さまざまな楽器、さまざまな世代、さまざまな国の人と繋がれるというダイナミズムにある。そこに音楽があるだけで。

アンサンブル普及のため日々全国を奔走している多喜靖美先生は、毎夏「ちちぶ国際音楽祭」を開催。日本にいながらにして、海外教授やアーティストによる室内楽や協奏曲のレッスンが受けられるというフェスティバルだ（参考：菅野恵理子執筆「室内楽体験を！全ては始めの一歩から——ちちぶ国際音楽祭『20代の音楽祭体験』2012年」。第1回から、アメリカ、オーストリア、フランス、



写真左 2015年度チャイコフスキーコンクール・チェロ部門第3位のアレクサンダー・ブズロフ氏、右 1997年浜松国際ピアノコンクール第1位のアレシオ・バックス氏

トルコ、韓国などからアーティストが来日し、英語を公用語としてコミュニケーションを取るなど、会場全体が国際的な雰囲気包まれていた。また熟練したアーティストとの共演は、若い音楽家にとって大いに刺激になったようだ。

また音楽とは対話である。まさにその名を冠した Music Dialogue（音楽監督 大山平一郎）*は、世代や分野の垣根を超えたダイアログを試みながら、室内楽普及活動を展開している。今年は秋田でのセミナーを経て、東京でセミナー講師4名による演奏会が行われた。同音楽監督でヴィオラ奏者の大山平一郎氏、ピアノのアレシオ・バックス氏など、いずれも各国で活躍するアーティストである。特にバックス氏のピアノは、全体のバランスを注意深く聴きながら、その多彩な音質や音色を駆使して、大きな音楽の輪郭を描いてみせた。国籍も世代も違う4名が奏でるカルテットで、静かなリーダーシップを発揮していた。

対話はコミュニケーションであるとともに、クリエイション（創造）の源でもある。「一人一人がしっかり個性を持っていれば、そこから議論が生まれ、互いの考えを共有することができます」「一人一人が音楽に投影しようとするものは違います。だから私はいつも、共演者と何か新しいものを創ろうと試みているのです」というのは、フランスやベルギーを中心に活動するヴァイオリニストのマーク・ダネルとピアノ



室内楽・協奏曲に特化したちちぶ国際音楽祭で指導する多喜靖美先生。海外教授によるマスタークラスも。

ストのイタマール・ゴランの両氏。こちらの事例もご参考頂きたい（参考：菅野恵理子執筆「室内楽を通して得られること」『ムジカ・ムンディ室内楽研修会リポート』2011年）。

他分野、他世界とつながる

一人一人が自立しつつ、お互いを尊重しながら奏でるアンサンブル。そのためには、誰がどんな資質を持ち、全体をどの方向に導いていくかという巨視的視点が必要である。オーケストラでは、まさに指揮者がその役割を果たしている。

2016年2月、バレンボイム指揮&ベルリン国立歌劇場管弦楽団によるブルックナー交響曲



2月に来日公演を行ったダニエル・バレンボイムとベルリン国立歌劇場管弦楽団（撮影 堀田力丸）

のツィクルス&モーツァルトのピアノ協奏曲の演奏会が行われた（サントリーホール）。

バレンボイムの音楽には、どこか透徹した精神性を感じる。あらゆる音や人と等距離を保ち、しかしすべてを把握し、ときに応じて向き合い、ぐっと寄り添う。モーツァルトの協奏曲第23番では、オーケストラの一つ一つの音との距離感を測りながら、その中でピアノという楽器を絶妙に溶け込ませた。モーツァルトならではの軽妙さもあり、節度あるアプローチだ。一方アンコールで披露したモーツァルトのピアノ・ソナタ第10番（第2、3楽章）は、あくまでもピアノならではの面白さや奥行きを追求する。コンテクストに合わせていかようにも想像力を膨らせ、音のパレットを多彩に広げていく、まさに匠の技を見せてくれた。

ブルックナーの交響曲第9番も節度ある音作りで、セクションごとの響きや、ハーモニーの受け渡し、際立つソロパート、すべてが絶妙なバランスの中にある。メロディだけでなく、それを支える伴奏や内声も配慮しながら、全体を大きな多面体のように聞かせていく。そして全休止からの天国のような神々しさが、そのまま記憶に刻まれていった。

バレンボイムといえば、イスラエルとパレスチナの若手音楽家を集めたウェスト＝イースタン・ディヴァン管弦楽団でも知られている。音楽に国境はないというのを、これほど体现しているオーケストラもないだろう。地域や文化だけでなく、宗教や信条も乗り越えないといけない。しかし、音楽にはそれができる。

ここで発揮されているリーダーシップとは、その状況を取り巻くコンテクストをつかむこと、すべての奏者の資質や音の役割を理解すること、そして、鮮やかにそれらを融合させること。すべては、開かれた「耳」から始まる。

次のステージの自分とつながる

音楽は、自分一人で深く掘り下げることでもできるし、自分以外の世界と触れ合いながら広がっていくこともできる。音楽はもともとあらゆる世界と隣接し、また内包しているものだ。そうしてさまざまな人、楽器、世界との関わりあいを経て、ふと素の自分に戻ってきたとき、「あ、前より表現の引き出しが増えている」と感じることもあるだろう。そのとき、感性は一回り大きくなっている。

人は生来、表現する意欲と能力を持っている（参考：菅野恵理子執筆「表現する力」『今こそ音楽を！』2015年、第1章第1回）。一人一人が自分自身のリーダーとなり、耳を拓いて、自らの資質を発見すること。そして他の世界を知り、つながること。それを引き出す音楽の力は、無限なのである。

（2016年4月12日掲載分）

参考文献❖書籍

- マーサ・C. ヌスバウム著／小沢自然・小野正嗣訳『経済成長がすべてか？～デモクラシーが人文学を必要とする理由』岩波書店、2013 年
- 石黒圭著『「読む」技術～速読・精読・味読の力をつける』光文社新書、2010 年
- 甲野善紀・茂木健一郎共著『響きあう脳と身体』木星叢書、2008 年
- 廣川洋一著『プラトンの学園アカデメイア』講談社学術文庫、1999 年
- プラトン著／藤川令夫訳『国家』岩波文庫、1979 年
- チャールズ・ホーマー・ハスキンス著／青木靖三・三浦常司訳『大学の起源』八坂書房、2009 年
- Vincent Duckels, Johann Nicolaus Forkel, *The Beginning of Music Historiography, Eighteenth-Century Studies Vol.1*, The Johns Hopkins University Press, 1968
- Spalding, Walter Raymond, *Music at Harvard: A Historical Review of Men and Events*, N.Y. Biblio Bazaar Coward-McCann, Inc., 1935
- Massachusetts Institute of Technology, 2013-2014 Bulletin for the School of Humanities, Arts and Social Sciences
- Freeman, Kenneth John, & Rendall, M. J., *Schools of Hellas; an essay on the practice and theory of ancient Greek education from 600 to 300 B. C.*, 1907
- Elizabeth A Mellon, *Inscribing Sound: Medieval remakings of Boethius's "De institutione musica"*, University of Pennsylvania, 2011
- 東京芸術大学音楽取調掛研究班編著／浜野政雄・服部幸三監修『音楽教育成立への軌跡』音楽之友社、1976 年
- 澤口俊之著『「学力」と「社会力」を伸ばす脳教育』講談社＋α新書、2009 年
- 前野隆司著『幸せのメカニズム 実践・幸福学入門』講談社現代新書、2013 年
- 西尾未希、白坂成功、前野隆司著『STAR フレームワークを用いた感動発想技法』日本創造学会論文誌 Vol. 18、2015 年
- ジョセフ・E. スティグリッツ、ジャンポール・フィトゥシ、アマティア・セン共著／福島清彦訳『暮らしの質を測る——経済成長率を超える幸福度指標の提案』金融財政事情研究会、2012 年
- 福島清彦著『国富論から幸福論へ——GDP 成長を超えて暮らしの質を高める時代』税務経理協会、2011 年
- 南野忠晴著『シアワセなお金の使い方——新しい家庭科勉強法 2』岩波ジュニア新書、2015 年
- 福島清彦著『いまこそ政府投資拡大へ』金融財政事情研究会、2015 年
- 高岡英夫著『究極の身体』講談社＋α文庫、2009 年
- 佐々木正人著『アート／表現する身体～アフオーダンスの現場』東京大学出版会、2006 年
- 長井芽乃著『音楽身体教育コナブルのボディ・マッピングによる演奏へのアプローチ』東京音楽大学、2014 年
- 飯田祥久著『医師、弁護士、大学教授……知的富裕層が選ぶ先進的健康住宅』幻冬舎メディアコンサルティング、2016 年

参考文献❖オンライン

- 公益法人日本生産性本部「レジャー白書 2014」
<http://activity.jpc-net.jp/detail/srv/activity001414/attached.pdf>
- 菅野恵理子執筆「子供の可能性を広げるアート教育・フランス編」2008 年
http://www.piano.or.jp/report/03edc/art_frnc/
- 一般社団法人全日本ピアノ指導者協会「ピティナ・ピアノ曲事典」
<http://www.piano.or.jp/enc/>
- 菅野恵理子執筆「第 16 回シヨパン国際ピアノコンクールレポート」一般社団法人全日本ピアノ指導者協会、2010 年
http://www.piano.or.jp/report/02soc/chopin_con2010/2010/11/20_11716.html
- 菅野恵理子執筆「海外音楽教育ライブレポート」一般社団法人全日本ピアノ指導者協会、2010 年～
<http://www.piano.or.jp/report/04ess/livereport/>
- 国立教育政策研究所「教育課程の編成に関する基礎的研究」
http://www.nier.go.jp/05_kenkyu_seika/pf_pdf/20130627_1.pdf
- OECD “Programme for International Student Assessment 2015”
<http://www.oecd.org/pisa/pisaproducts/PISA2015-Released-FT-Cognitive-Items.pdf>
- 一般社団法人全日本ピアノ指導者協会「ピティナ CrossGiving」
<http://www.piano.or.jp/info/crossgiving/peru-keyboard.html>
- 北村安樹子著「シルバー層の世代間交流の実態と意識」第一生命経済研究所、2004 年
<http://group.dai-ichi-life.co.jp/dlri/ldi/note/notes0409b.pdf>

松下佳代著「〈新しい能力〉と学習評価の枠組み」京都大学・高等教育研究開発推進センター、2013 年

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/095/shiryo/_icsFiles/afiedfile/2013/01/29/1330122_01.pdf

文部科学省「高大接続改革実行プラン」2015 年

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo12/sonota/_icsFiles/afiedfile/2015/01/23/1354545.pdf

文部科学省「高大接続特別部会資料」2014 年

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo12/shiryo/attach/1349601.htm

文部科学省「国際バカロレア日本アドバイザー委員会報告書」2014 年

http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/ib/_icsFiles/afiedfile/2014/04/15/1326221_06_1_1.pdf

Musicologie

<http://www.musicologie.org>

職業指導研究会編「音楽家になるには」良国民社、1933 年

<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1053171>

日本学術会議著「21 世紀の教養と教養教育」2010 年

<http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-21-tsoukai-4.pdf>

総務省「平成 23 年度社会生活基本調査」2012 年

<http://www.stat.go.jp/data/shakai/2011/pdf/houdou2.pdf>

文部科学省「平成 24 年度 子供の学習費調査」2012 年

http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa03/gakushuui/kekka/k_detail/_icsFiles/afiedfile/2014/01/10/1343235_3.pdf

総務省統計局「生活行動に関する調査」2011 年

<http://www.stat.go.jp/data/shakai/2011/pdf/gaiyou.pdf>

株式会社アテニア「“美と幸福”に関する調査レポート Vol.1」2014 年

<http://primes.jp/main/html/rd/p/000000010.000010341.html>

総務省「平成 24 年経済センサス - 活動調査」2014 年

<http://www.stat.go.jp/data/e-census/2012/kakuho/pdf/service.pdf>

厚生労働省「みんなのメンタルヘルス総合サイト」

http://www.mhlw.go.jp/kokoro/nation/4_01_00data.html

United Nations University: Inclusive Wealth Report- Measuring progress toward sustainability (IWR) 2012, 2014

http://www.ihdp.unu.edu/docs/Publications/Secretariat/Reports/SDMs/IWR_SDM_2014.pdf

ストラスブール研究連絡センター「カントリーレポート ～フランス」2015 年

https://www-overseas-news.jps.go.jp/pdf/countryreport/2014countryreport_06str.pdf

Efva Lilja: ART, RESEARCH, EMPOWERMENT - On the Artist as Researcher, Elanders Sweden AB, 2015

<http://www.regeringen.se/contentassets/3286aa141895483da32becb660e350d4/art-research-empowerment---the-artist-as-researcher>

Arts Council England: Great Art and Culture for Everyone, 10-year-strategic framework 2010-2020, 2013 revised edition

<http://www.ahrccommons.org/wp-content/uploads/2015/07/ace-greatartandcultureforeveryone.pdf>

Post Graduate Certificate in Arts Fundraising and Philanthropy, led by the University of Leeds in partnership with Arts Fundraising & Philanthropy

<http://artsfundraising.org.uk/post-graduate-certificate/>

Government Offices of Sweden : Government's Spring Fiscal Policy Bill, 2015

<http://www.government.se/press-releases/2015/04/spring-fiscal-policy-bill-2015-a-sweden-that-keeps-together/>

European Association for Digital Humanities “Focusing on East Asia”, The 6th International Conference of Digital Archives and Digital Humanities 2015 in Taiwan

<http://eadh.org/news/2015/06/24/cfp-focusing-east-asia-the-6th-international-conference-digital-archives-and-digital>

ボディマップ・ネット

<http://www.body-map.net>

菅野 恵理子（すがの えりこ）

音楽ジャーナリストとして各国を巡り、国際コンクール・音楽祭・海外音楽教育などの取材・調査研究を手がける。『海外の音楽教育ライブラポート』を長期連載中（ビティナ HP）。著書に『ハーバードは「音楽」で人を育てる～21世紀の教養を創るアメリカのリベラル・アーツ教育』（アルテスパブリッシング、2015年）、インタビュー集『生徒を伸ばす！ ピアノ教材大研究』（ヤマハミュージックメディア、2013年）がある。上智大学外国語学部卒業。在学中に英ランカスター大学へ交換留学し、社会学を学ぶ。一般社団法人全日本ピアノ指導者協会勤務を経て現職。2007年に渡仏し「子どもの可能性を広げるアート教育・フランス編」を1年間連載。ピアノを幼少・学生時代にグレッグ・マーティン、根津栄子両氏に師事。全日本ピアノ指導者協会研究会員、マレーシア・ショパン協会アソシエイトメンバー。
ホームページ：<http://www.erikosugano.com/>

一般社団法人 日本ピアノ指導者協会 調査報告書 第3号

いま おんがく
今こそ音楽を！

2016年9月30日 第1刷発行

著 者 ^{すがの えりこ}
菅野 恵理子

発行者 福田 成康

発行所 一般社団法人 全日本ピアノ指導者協会

〒170-8458 東京都豊島区巣鴨1-15-1
TEL：03-3944-1583 / FAX：03-3944-8838
<http://www.piano.or.jp/>

編 集 横平由香

©2016 by Eriko Sugano

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。本書の全部または一部の無断複写・複製・転載は、著作権法上の例外をのぞき禁じられています。また、本書を代行業者などの第三者に依頼してコピー、スキャンやデジタル化することは、個人的な利用であっても著作権法違反となります。

Printed in Japan.

